
カチ込め！ザフィーラさん

ライサンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カチ込め！ザフィーラさん

【Nコード】

N0734K

【作者名】

ライサンダー

【あらすじ】

現代を生きるとある会社員・・・彼が目覚めた場所は、見たことのない、しかしどこか見覚えある部屋だった。
そこに居たのは・・・

これはとある苦労人の一大叙事詩である・・・

会社員である必要が全くないことに気づいてしまいました

一応精神的に大人であるので上下関係の折り合いが得意、といったレベルです

まあ、気にせずお読み下さい

第一話 『うほっ、いい幼女』（前書き）

もう一つの連載も進んでないのになんかやり始めてしまいました

完全にノリです

勢いです

見切り発車です

後悔は少ししている

第一話 『うほっ、いい幼女』

深夜

「な、なんなんやコレ・・・?!」

とある街のとある家で、独りの少女が目の中の事態に軽いパニックになっていた

彼女の名は八神はやて（9）

この時点では魔法なんか知らない、
なんやかんや不幸な設定を背負う薄幸の美幼女である

現在彼女の前には一つの本が光を発しながら『浮いている』

そう、浮いているのだ

鎖で雁字搦めに封印された、見るからにアヤシい本だ

しかし、これから語ることに彼女達は関係ない。
関係ないこともないが、この物語の主人公ではない

そう、今、まさに現れんとする『彼』こそが、この一大叙事詩の主人公である・・・

カチ込め！ザフィーラさん第一話 『うほっ、いい幼女』

意識が浮上する

明るい闇

見たことのない世界

そして、全てが鮮明になってゆく

（・・・アン？ここ、は・・・？）

「・・・ら・闇の・・・」

「主・・・参じ・・・」

（何だ？何言つて・・・！？）

耳に聞き覚えのない声が聞こえてきた
それにより意識をはつきりさせると、『彼』は見覚えのない部屋に
ひざまづいていた

未だに現実を把握しきっていない彼の目に、二人の女性と二人の幼
女が映る

そして自分に眼を落とすとなんかよくわからんがピッチピチのタイツみたいな、犯罪チックな服を着せられていた

（はっ！？なんだコレ？ハーレム？いや、こんな奴隷みたいな服で？アレ？俺奴隷？『気がついたら全く知らない場所で女王様プレイを強制させられていた』・・・何？新手のイジメ！？）

「「「我らヴォルケンリッター、主の命に従い参上いたしました」」」
」

混乱の極地にある彼の耳にどこか聞き覚えのある単語が入ってくる

『ヴォルケンリッター』

そう、とある叙情的な魔砲少女アニメに出てくる騎士集団である

（え？え！？何？そういう設定のプレイ？確かにみんなソレっぽい人たちだけど、え？俺も？参加してんの？拉致られた上で更にアニメプレイ？これ何て変態？）

しかし未だに現実を理解できていなかった

「・・・ねえねえ」

「おいヴィータ、主の御前だ、静かにしろ」

「でもさ、コイツ氣い失ってんじゃねえ？」

「ム？・・・あつ！」

「あらあら」

そんな彼をよそに傍らではそんな会話が繰り広げられている

『彼』はこの状況にかなり予想が立っていた

一般的な会社員であった『彼』がこよなく愛し、日夜ネットを見て読みあさっていた「二次小説」なるモノ・・・

その中に溢れるほど存在するシチュエーションだ

つまり、憑依・転生系SSのテンプレに沿っていると、感づいた

それならば

（聞いたことある会話キタコレ！っーことはこの人等は紅口リ、乳侍、女医さんか！！アレ？てーことあ俺は・・・）

『彼』にも役割があるはずだ

「とにかく主をどうにかしなければ・・・」

ピンポン

「あら？誰か来たみたいよ？」

「主の御知人か？誰かは解らんが出るしかないだろう」

「・・・なあ、ザフィーラ、どうしたんだ？何時になく無口じゃねーか？」

（ザ、ザフィーラ・・・だと？）

『彼』、『ザフィーラ』は、自らの置かれた状況を完全に呑み込んだ

果たしてザフィーラとして目覚めた彼が、これから始まる物語の主人公である

彼がこの世界で何を成すかは、今はまだ、誰も知らない

（・・・影、薄すぎるだろい）

続く

第一話 『うほっ、いい幼女』（後書き）

更新できるだろうか・・・

第二話 『人としての尊げん・・・あつ、俺犬か』（前書き）

ザフィーラの一人称って私だったか、我だったか・・・

あとはやての一人称って私だったか、ウチだったか・・・

やべえ忘れた

誰か教えて

第二話 『人としての尊げん・・・あつ、俺犬か』

・・・こんにちは

ザフィーラです

いや、厳密に言えば違います

まあとりあえず、それは後にしよう・・・

問題は今の俺が置かれている状況なんだが

「じゃあ行ってくるよはやて！」

「行つてらっしゃい。二人とも気いつけや？」

「うん！よっし、行くぞザフィーラ」

紅口りに首輪を繋がれ犬散歩プレイの真っ最中也・・・

カチ込め！ザフィーラさん第二話 『人としての尊げん・・・あつ、俺犬か』

話は三日前にまで遡る

六月某日・深夜、海鳴総合病院にて

とある少女が目を覚ます

彼女の名は八神はやて（9）、先ほどまで絶賛気絶中だった

ふと周りに目をやれば見知った女医の顔が見える

「あれっ？石田先生・・・？」

「まったく、はやてさんが急に倒れたって言うから心配したのよ？
・・・で、あの人たちは何なの？聞かせてもらえるわよね・・・？」

石田医師に促されたところを見ると、黒いパツツンパツツンの服を着た四人の男女が立っていた

皆無表情で・・・いや、一人、犬耳をつけた銀髪褐色の男性だけは放心したように立っていた

なんで一人だけそんな顔してるんや？と、思いながらも、はやては石田医師に

『彼らは遠縁の親戚であり、自分の誕生日をサプライズで祝いに来てくれたが、ビックリして気を失ってしまった』と、

子供でも解る苦しい言い訳でごまかしながら、帰宅許可を貰った

一方、放心していた男性こと我らがザフィーラさんは、まさに放心していた

彼は状況を完全に理解し、ザフィーラとして演じることに決めた
しかし初っ端から最大の難関が立ちはだかる

彼はこのアニメは知っていたが、そこまで熱心なファンでもない

・・・そう、肝心のザフィーラの活躍を覚えていないのだ

主に影が薄すぎて

・・・覚えている唯一の場面が第三期、六課の隊舎でシャマルさんと一緒にボコられてた事だというのだから始末に負えない

（あー・・・なんだ、どんな奴だったっけ、ザフィーラ・・・クソッ、これは初っ端からヴォルケン達に不信感を与えてしまう・・・
そうなること

『貴様！ザフィーラではないな！？本物のザフィーラをどこへやった！』

『いや、待て、私は本もn

』

『まさか主はやてに害為す輩か！？問答無用！！切り捨てる！』

『ちょ、ま、ギヤアアアア！！』

b a d e n d . . .

（あ、あり得すぎて困る・・・っ！？つかシグナムさんレベルの強キャラなら思い出せんだよ！！どうせならシグナムさんに憑依したかった・・・あのおっぱい実にけしから（ゲヒンゲフン！）

若干焦りすぎて現実逃避気味だった

これをはやてに見咎められたのだが、幼女にはそんな内面までは見抜けなかったのが幸이었다

家につくか着かないかという所まできて、ザフィーラはハツとした

前世といえる『彼』の意識が確かにこの体を操っている

しかし、何か『自分であって自分ではない』記憶のようなものが頭に浮かんでくることに気づいた

（一、これは・・・『記録』か？いや・・・）

無駄に回転する頭脳は一つの答えを見つけた

これはおそらく、『ザフィーラ』という個体データに蓄積された、闇の書から送られる『ザフィーラの記憶』と言う名の『記録』なのだろう

ヴォルケンリッターはプログラム生命体だ
ならば『記憶』も『記録』として残り、更新された個体にフィードバックされてゆくのであろう

しかし、今はそんなことはどうでもいい

何より彼にとって重要なのは

（キタ！キタコレ！これでザフィーラの行動わかんじゃん！！ひとまず命拾った！これで勝つる！！）

この事実で助かる道があるという事だ

思わず両手をあげて万歳してしまうほどに浮かれていた

「・・・ザフィーラ、さっきからなにやってんだ？」

ビクッ！！

すぐ前を歩くヴィータのジト目と声に思わずビクッてしまっザフィーラ

犬耳でガタイのいい兄ちゃんが幼女の声にびくつく様はシユールですらある

ここは冷静にと、『記録』にあるザフィーラらしい回答をしておく

「いや・・・何でもない。気にするな」

「そうか・・・？ま、いいや」

ヴィータは特に興味も失せたのか、ふい、と前に向き直る

ほっ、と、ザフィーラが一息吐いたところでやっと八神家に到着したらしい

はやてが嬉しそうに皆を中に案内する

ザフィーラは当面はしのげるだろうと楽観的に思い、シグナムたちの後ろについて行った

先ほどのやりとりを、シャマルが真剣な顔をしながら見ていたことに、ザフィーラは気づかなかった

八神家、深夜

「じゃあ明日はみんなの服買いに行かなな～！うん！そうや！」

「い、いえ我が主、我らにその様なことはしていただかなくとも・
」

「いや！ウチはみんなの主なんやろ？それならみんなの体を預かる
家長つてわけや。ウチが責任もって養つたる！」

「は、はぁ・・・」

「それとな、主じゃなくて、はやてつて名前で呼んでや？ウチらは
もう家族みたいなもんやろ？」

「は、い、主はやて・・・」

「よし！それでええよ。ほんなら明日に備えて今日はもう寝よか？」

シヤマルに連れられおやすみ、と、部屋へと消えてゆくはやて

「・・・なんかさ、変わったヤツだよな・・・」

「うむ・・・しかし、悪いお方ではないだろう」

今までの主達との違いに烈火の将と鉄槌の騎士はとまどいを隠せな
いようだ

しかし、ザフィーラは別のことを思っていた

（は、すっかりしたええ子やな・・・でも、見ず知らずのアヤ

しい四人組をいきなり家におくとか、防犯意識なさ過ぎじゃないか？家族に飢えてるとはいえ、無防備すぎるような気も・・・」

この間も無表情は崩さない

だいぶん『ザフィーラ』を理解してきたんじゃないか、と、自画自賛していた

しかし、そんな樂觀は早くも砕かれることとなる

はやてを寝かせてきたシャマル今に帰ってくると、すこし深刻な顔で話を切りだした

「・・・みんな、少し気になることがあるのだけれど・・・」

（ん？こんな展開あったか？）

「どした、シャマル？」

「何か問題か？」

「・・・問題かどうかは解らないんですけど、少しね、闇の書に違和感があるの」

この流れに嫌な予感がMAXハートなザフィーラ
既に変な汗が垂れ始めている

「違和感、だと？主に害為す類のモノか？」

騎士の鑑のシグナムさんがまずは確認をする

「いえ、それは大丈夫みたい。ただ、私にもよくわからないのだけど、闇の書に『何か』が入ったような感覚がするの・・・みんな、何か体に違和感を感じない？」

参謀として四人の中で最も闇の書に詳しいシャルルの言葉に二人も真剣に考え出したようだ

ザフィーラは無表情を貫き通す。

しかし、その顔には滝のように汗が流れている

（は？違和感？入った？・・・ちよ、ちよちよ！？これ俺のことじゃね！？ヤベエ！早速バレッタ！早え、早えよシャル！！そんな有能だったのかよお前ちよつとオオ！？第三期でその輝きを発揮しろよオー！実にけしからん尻をしゃがつて（ゲヒンゲフン！）

内面は最高レベルに混乱している

「・・・アタシは特になんも、ねーぞ？」

「私もだ・・・これといって感じられん」

答える二人とシャルルの眼が、押し黙るザフィーラに向けられる

（こつちを見るなああああー！！）

心中で大絶賛絶叫中のザフィーラ

「どうした、ザフィーラ？」

「・・・なあ、ザフィーラ。お前さ、さっきなんか変だった、よな？」

ヴィータに言い当てられ更に落ち着きがなくなる

三人の視線は強くなる一方だ

（　　ッ！ええい、ままよ！！）

これは逃げきれない、諦めるしかない、と、パニクる頭でなんとか乗り切ることにした

「・・・実を言うとだな・・・少しほど、記憶に混乱がある」

「やっぱり！ザフィーラ！？」

「どうしたんだよ！大丈夫なのか！？」

やっぱり、と、どうやらシャルは当たりをつけていたらしい
ヴィータは心配してくれているし、
シグナムはシグナムで何が起こっても対応できるように油断なくこちらを見つめている

ここで止まったらb a d e n d直行だと感じ、ザフィーラの口八丁は止まらない

「いや、問題はないようだ・・・ただ、前回までの私とは少し異なる、らしい」

「・・・?どういうこと?」

「『闇の書の盾の守護獣・ザフィーラ』ということに変わりはない・・・ただ、そのイリーガル（異分子）の影響が人格データが少し改変されたようだ・・・」

「そんな・・・」

「だ、大丈夫なのか!?それ!!」

シャマルは絶句し、ヴィータは更に心配そうにしている

「どちらにしろ私には変わらない。問題は無いはずだ」

ザフィーラがそう言い切ると一旦場を沈黙が埋める

予想外の事態に皆困惑しているようだ

否、シグナムがおもむろにレヴァンティンを起動させ、腕を組みながら立っているザフィーラに突きつける

「シグナム!!!?」

「おい、いきな」

「少し黙っているヴィータ・・・ザフィーラ、一つ聞く。お前のすべき使命は何だ・・・？」

少しの間

ザフィーラはシグナムから目を反らすことなく、口を開く

「決まっている。我が身は盾。我は盾の守護獣。この身はただ、我らが主の盾として 身命を賭して守り抜くだけだ」

数拍 二人は睨み合う

と、シグナムが笑みを漏らし、剣を納めた

「・・・どうやら、今のところは問題ないらしいな。すまなかった、ザフィーラ。疑うような真似をして」

仲間に剣を突きつけたことを謝罪するシグナム

それに対しザフィーラは少し立ち位置をずらし、問題ないと眼を閉じる

「いや、当然だ。謝らなくてもいい」

「そうか　　だが、お前が、お前の中の何かがいつか、我らの主を脅かすのなら　　」

「解っている。その時は、私を切り捨ててくれ、我らが将」

代わる代わる言葉を交わす二人に緊張は去ったと感じたのか、残された二人はほっと安堵の息を漏らす

すぐさまヴィータが吠える

「てめー！ザフィーラ！心配せんじゃねー！！」

「何かあったらすぐに言ってね？診察しますから」

空気も緩み、団欒が戻ってきたその場に反し、ザフィーラの心中はすごいことになっていた

（あつつつつつぶねええええいையいさあ！！！助かった！？
乗り切った！？あゝゝゝ、心臓爆裂するわ！！？）

彼は命をつなぐために必死に無表情を繕い『頑なな盾の騎士・ザフィーラ』を演じきった

必死になれば、人間やればできるもんだと知ったが、彼からすれば二度とやりたくなかった

心臓に悪すぎる

会話中は常に心拍数限界突破だ

シグナムに剣を突きつけられた辺りなんか思わず、

『うつひゃい！？』と言う情けない声が出そうになったが、下腹部に力を込めてなんとか呑み込んだ

本来の『彼』にはこんな胆力はない

オリジナルのザフィーラボディのハイスpekさには感謝感激狂喜乱舞である

いや、別に踊らないが

「しかし」

シグナムがまた真面目な顔に戻る

ザフィーラはまだなんかあんの！？やめて！俺のSAN値はもうゼロよ！？な気分だったが、顔には出さない

「ザフィーラがどうなっているか詳しくはわからない。その解析はシヤマルに任せるが、大まかな結果がでるまではなるべく誰かが常に側にいた方がいいだろう」

「・・・そうね。もしもの場合もあるから・・・ザフィーラもそれでいいかしら」

「ああ・・・構わん。（なんだそんなことか・・・アレか、監視付きだがかまわんだろう？ってことか？　　モーマントイモーマントイ！むしろ平穏な日常を謳歌できる！！）

はやてを守るためにもシグナム達はそうすべきだと思っているらしいが、ザフィーラにははやてを傷付けるつもりなんかヒトカケラもないので、斬られる心配もない

ザフィーラは己が未来を勝ち取ったことに思わず心からの笑みが浮かんだ

「「「っ！！！！！」」」

「？どうした？」

みんなが一斉に固まったことを、ザフィーラは不思議に思声を掛ける

三人は珍しすぎる動物のあり得ない行動を見たように、眼をキョトンとさせていた

するとシャルマルが恐る恐る言い出す

「ザ、ザフィーラが、微笑った・・・？」

「・・・私とて笑いもするだろう」

ザファイラの『記録』によれば、数は少ないが、オリジナルのザファイラが笑っていたことは有るはずだ

何がそんなに不思議なのか解らず、なんとなく不安になってきた

「い、いや、悪くねーんだけどよ・・・ただ・・・何というか・・・」

珍しく言葉が見つからないようなヴィータ
それをシグナムが引き継ぐ

「・・・そんなに柔らかい笑みができるのだな・・・長い付き合いだが知らなかった。それにいつもより幾分か饒舌だ。これも改変の影響・・・か？」

ザファイラは合点が行った

今までのザファイラの笑いは、微笑みと言うより、どこかニヒルな笑い方が目立っていたのだ

今のザファイラの心からの歡喜の笑みは、同じ顔だからこそ、彼女達に与えるインパクトが違ったらしい

（いや、普通に笑っただけなんすけど・・・ザッフィーどんだけ無愛想だったんだ・・・）

こんな小さな違和でも大きく感じてしまいうらしい

ザフィーラは、何となく前途多難な気がして、微笑みを浮かべていた顔に、微妙な、ぶすつとしたしかめ面を浮かべた

「あつ！いつものザフィーラにもどった！」

「あら、やっぱりこっちの方が落ち着くわね」

「うむ、馴染みがないと、どうも動揺してしまう」

どうやらこのしかめ面が本来のザフィーラのニュートラルらしい

今度こそ漠然たる不安を感じ、ザフィーラはしかめっ面を浮かべていた

これが三日前の夜

あれから三日達、一昨日には皆で服を買いに行き、昨日は皆で町を

散策しまくった

ヴィータ等はすっかりはやてに懐き、他の二人も八神家になじみつ
つあるようだ

ザフィーラは昨日一昨日と人間の格好でいた

頭にはニット帽をかぶり、シックな黒いジャケットにデニムと言っ
た出で立ちで、すっかり父親、兄みたいな位置に収まっていた

まあザフィーラの落ち着き様とヴィータのはしゃぎっぷりを見たお
店のおばちゃんが、二人を親子と勘違いして一悶着あったりもした
のだが

ザフィーラははやてを主と呼ぶ

そこは原作通りだが、原作よりも饒舌でよく笑みをこぼすザフィー
ラに、昔の彼を知らないはやてはもちろん、も他の三人も概ね受け
入れていた

よく考えたら、高身長、高能力、男として憧れる筋肉の持ち主であ
り、銀髪イケメンだ

見た目だけならどこぞの某運命の守護者にも似通う部分がある

しかも軽くハーレムであり、端から見たら間違いなく勝ち組である

（イヤッハ！！たwのwしwすwぐwる！！何このエロゲ主人公み
たいな環境！？生まれ変わってよかった！）

それを考え悦に浸ると、同じ存在のはずなのに、原作ザフィーラの不遇ぶりに涙が出そうになった

（って、アレ？何でだ？なんで原作は・・・）

しかし、そこで少し嫌な予感はしていたのだ

今朝のことである

皆で朝食を食べていた時に、しめじの味噌汁（はやて謹製）を飲んでいたシャマルが、ふと思い出したかのようにこうのたまった

『そう言えばザフィーラ？今回は狼形態にならないのね？』

それを聞いて昨日の嫌な予感がなんであるか一瞬でザフィーラは理解した

しかし、シャマルの言葉にはやてがいち早く反応してしまう

『狼形態？なんなんそれ？』

『はやてちゃん、それはですね。ザフィーラはね今は人型だけど、もう一つ狼にも変身できるんですよ？』

その言葉にキラキラと目を輝かせるはやて

ザフィーラは手遅れだと悟った

原作の不遇は、ここに原因があったのだろう

『すごいなザフィーラ！ちょっとウチ見てみたいわ、その狼形態つてやつ！』

ギロリ、と、『まさか主の期待を裏切らんだろうな』という視線が、シャケをつついていいるシグナムから飛んできた

ザフィーラは既にあきらめているし、ヴォルケンリッターが一人として主に逆らう真似はしない

なにより、可愛い幼女にここまで言われて拒んでは、男が廃ると言うものだ

『・・・解りました。では、食事が終わったら庭でやってみせましよう』

『ほんまか！？ありがとう！いやあ、楽しみやわあ・・・ウチな、一回犬飼ってみたかったんよ』

ウキウキとするはやてを皆で微笑ましく見守っていたが、ザフィーラは心中で嘆息していた

で、二時間後

変身を見せるとはやては大層喜んでくれて、ザフィーラとしても何だか嬉しくなった

しかし、次の一言に危つく変な声が出そうになった

『でも、それやったら今まで散歩とか我慢してたんちゃう？行つてきてもええよ？うん、そうや、それがええわ！行つてき！』

ニコニコと善意100%で勧める我らが主

その後ろで車椅子を押しているシグナムから、
『まさか主の善意を断るつもりであるまいな』
という視線がガンガン飛んでくる

（怖い、怖いよシグナムさん。視線で穴があきそうだとはこのことか・・・原作でもまさかこんな事になったのか・・・？クッ（泣）！）

ザフィーラは泣きなくなったが、有り難くその申し出を受諾した

犬を放して歩かせるのはまずいとなり、件の監視を兼ねてヴィータと一緒に散歩に行くことになる

こうして、『ザフィーラの散歩』は、ヴィータの日課となっていくのであった

（幼女にリード握られてる俺って・・・ああ、犬か・・・ハハハハハ・・・）

このままでは原作みたいな悲惨なことになってしまったため、いつか改善すると心に誓いながら、

彼は今日も海鳴町を歩く

「おいザフィーラ！公園までギガダッシュだ！いっくぜ！！」

紅い幼女にリードを握られながら

続く

第二話 『人としての尊げん・・・あつ、俺犬か』 (後書き)

このまま行けば不遇街道邁進の予感

第三話 『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』（前書き）

自分でも何かいてるかわからなくなってきた

かなりグだってますが、ご愛嬌ってことで

第三話 『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』

・・・こんにちは、ザフィーラです

今、俺は犬型ではありません

ええ、犬型ではありませんとも！

・・・重要なので二回言ったが構わんだろう？

まあ、そんな俺が何をしているのかというと・・・

「いつくぜーじーちゃん！」

「ホホ、びーたちゃんは元気じゃのう」

和気藹々と、ゲートボールに勤しむ紅ロリをベンチから見守っていた

「ほら、ざひーらさん、お茶飲むかい？」

「むっ、頂きます」

お婆ちゃんにお茶をこちそうになりながら・・・

ズズッ・・・

・・・ああ、茶が旨いなあ

カチ込め！ザファイラさん第三話 『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』

七月某日

ヴォルケンリッターが八神さんちにお世話になりだしてから早1ヶ月

家主・八神はやて（9）は毎日が充実して仕方がなかった

最近家族となった四人組もすっかり家に馴染み、近頃は皆思い思いに過ごしていることが多い

ヴィータは毎日の散歩の途中に見つけたゲートボールにハマっている

おじいちゃん達のアイドルになったようだ

シグナムは日がな一日縁側にいたり、剣を振ったりしていたが、
「このままではイカン」と剣道場でコーチを始めた

シヤマルは主に家事をやってくれている

大体は家にいるが、今は買い物に行っているらしい

ザフィーラ？もちろんヴィータに連れられての散歩だ

おそらくゲートボール場でヴィータとは違う意味でのアイドル（主にもふもふ的な意味で）となっているだろう、と、はやては思っていた

四人が一度にいなくなると、前に戻ったみたいで少し寂しくなる・

だが、それでも誰かが帰ってきて『ただいま』と言い、それを『お帰り』と出迎えて上げられることが嬉しくて仕方がなかった

「シヤマルが帰ってきたら、今日は久し振りにちよつと腕ふるつた
るかな？ヴィータとか、喜びそうや・・・」

肉が大好きな末っ子を思いだし、フフツ、と笑いをこぼす

つまり、はやては今幸せだった

一方、主にもふもふのアイドルだと思われているとはつゆ知らず

ザフィーラはおばあちゃん達と茶をしばいていた

（うーん、平和だねえ・・・そろそろ夏も本番だし、海とか行きてーなあ・・・）

本来の歴史ならばおそらく家で犬化してはやての側で待機しているだろう彼が、ヴィータと共に公園にいるのには理由があった

三週間前

ザフィーラ達が八神家に来て二週間の時がたった

この頃には皆それぞれのライフワークを見つけたしていた

ザフィーラはいつしか日課になっていたヴィータとの散歩以外は、何にしる家にいたのだが、彼は問題ない

いざとなれば犬になればいいのだから（別になりたいわけではない、

どちらかというと断固拒否したい)

しかし、シグナムが日夜家でゴロゴロしているのは如何なものかと、ザフィーラに突っ込まれたのだ

原作でどのような経緯を辿りコーチの職に就いたのかは解らないが、ザフィーラとしてはそのイメージが強かったためになんとなくほめかしてみたのだ

『まるで犬のようだな』と

そのセリフにシグナムはサンダーレイジの如き衝撃を受けたらしい
まあ犬風情に犬と言われれば誰だってそうなる

シグナムからしたら特にすることもなく、家事はシャマルに任せているし、はやてと遊ぶぐらいしかない

しかし毎日毎日遊んで欲しいほどはやてはガキではなかったわけだ
よって何か真剣に悩み出し、三日ほど経った日の夕飯時に件のコーチの仕事を見つけたと皆に話したのだ

ザフィーラとしては特に意味もなく言った言葉だ
なんとなく縁側にいたシグナムが日向ぼっこをする犬っぽかったか

ら言っただ

しかもザフィーラにはそんなことなんかよりも「主はやてをお守りできる様に常に万全を期しているだけだ」とか騎士っぽいことを言われるかと思ったが、

一応体面は気にするらしい

まあこの世界が平和だということを十分理解したこともあるのだろうか

これによりヴィータには散歩、シグナムには道場、シャマルには家事というライフワークができた

（原作では丸まってずっと居間で寝てたよな？・・・うん、つまりんな）

はやてがもふもふしたい時以外はなるべく人間で居たい彼は、何をすべきか悩んだ

まあ、ヴィータの犬散歩がある時点で毎日一度は犬にならねばならんのだが、それはそれだ

はやての守護獣としては主の側を離れない方がいいのだろうか、家にはシャマルもいるし、原作を知っているザフィーラは、『ずっと家に詰めていなくとも問題ないだろう』と考えている

（なんか、バイトでも探してみるか・・・ガテン系とか、似合いますぎて困る・・・）

日課の散歩中、ザフィーラは公園までいろいろ考えながら歩いていた
ヴィータも最近では慣れたもので、探検を忘れない

今日は少し南の方まで行ってみることにしたらしい

（あつ、そうだー！）

ザフィーラはあることを思いつき、ヴィータに念話を送る

『ヴィータ』

「ん？つと、『ザフィーラ、どしたの、急に念話なんか？』

『人型に戻っても構わないだろうか？』

そう、この二週間律儀に犬化して散歩していたが、元はと言えばはやての勘違いであるため別に守る必要もない

今日は南方面という初めて見る地域で、心機一転人型になって歩いてやろうと考えたのだ

なんで気づかなかったの！？と、過去の自分を罵倒したいザフィーラだった

『え？別にいいんじゃないか？なんで？』

『いや、少し見て回りたいと思ってな。狼の姿では辛いところもあるだろう？』

『ああ、なるほどな。よっし、わかった！じゃあ今日は別行動な！でもはやてに心配かけたくねーから帰るときは一緒だぞ！』

『了解だ。帰りの時には念話を送る』

（イエッス！単独行動ゲット！！）

こうしてこの日初めてザフィーラは海鳴市の繁華街へと足を向けた

まあ、結論から言うと特にこれと言って何もなかった

バイトを探そうかと思ったが履歴書とか何も用意していないことに気づきブラブラ町を歩いただけだ

また、二次小説でよくある翠屋へ突撃なんかするはずもない
完全に自殺行為だ

そろそろ日も傾きだしたので帰ろうとして、ヴィータに念話を送る
しかし返ってきた言葉はぞんざいなものだった

『ヴィータ？今何処にいる？』

『アン！？ザフィーラか！？今いーとこなんだ！ちよつと待て！！』

ブツリ、と、念話でもそんな切られ方をするのかと変に感心した

が、すぐに再起動し、仕方がないのでヴィータの匂いを追って彼女
を見つけることにした

お忘れだろうか？

彼の鼻は狼のソレだ

しかも魔法で更に強化できる

つまり！今の彼には昔馴染みの嗅ぎ慣れたおにゃのこの体臭など一
発で嗅ぎ取れるのだ！！

・・・余りにも変態的でザフィーラは涙が出てきた

ヴィータをいざ発見すると、彼女はジジババに囲まれゲートボール

に勤しんでいた

クラブにグラーフアイゼンを使うという本気っぷりだ

場所はいつもの公園よりも少し行った先にある公民館のグラウンド
シルバーの方々の憩いの場である

（ああ、ハイハイ、こんな設定あったなあ）

合点が言ったとばかりにうなずきながら、
どうやら一段落着いたらしく和氣藹々と話しているその一団に近づいていき、声をかけた

「ヴィータ」

「アハハ、っと、ザフィーラじゃねーか！あっ！？さっきは悪いな・
・・」

「いや、構わない。しかし、これは・・・？」

こちらに気づいたヴィータは、少しバツが悪そうにしながら近づいてくる

そこへ、ヴィータと話していたおじいさんが話しかけてきた

「びーたちちゃん？この人はびーたちちゃんのお父さんかい？」

「なっ！？またっ！ちげーよ吉田のじーちゃん！..」

また間違えられたことが遺憾なのか、憤慨するヴィータ

(・・・じいさん、銀髪褐色の俺からヴィータは生まれなйдろ)

とりあえず挨拶しとこうと、吉田のじいさんなる人物に向き直る

「父ではないが、私はヴィータの家族でして、ザフィーラと申します。どうやらヴィータがお世話になったようで。何分口が悪い娘ですから、迷惑ではありませんでしたか？」

「デメーッ！口が悪いってなんだよーっ!？」

吠えるヴィータは華麗にスルーだ

そんなヴィータを微笑ましげに見ながら老人はザフィーラに言う

「ホッホッ、これはどうもご丁寧な人じやの。ざひーらさんと言ったか？迷惑なんぞ思つたらんよ。むしろ儂ら礼を言いたいぐらいじや」

「そうじゃね、びーたちゃんは可愛いからのう」

「最近ハ孫も大きゅうなつてしまつたからの、やはり子供は良いもんじゃ」

口々にヴィータの存在を歓迎する老人達
どうやら1日にしてアイドルになったようだ

「子供じゃねーッ!！」

子供扱いにぶくつと頬を膨らみながら、更に子供らしさを際だたせるヴィータ

これ以上やつても後々怖いので、ザフィーラは老人に挨拶をして今日は帰ることにした

帰り際に「また来たらええよ？」と言われたが、ヴィータも乗り気だったためそうなるのだろう

『ざひーらさんも一緒に』と言われたのはどうしようかと思ったが・・・

こうしてヴィータのライフワークに『ゲートボール』が追加された

これが三週間前のことだ

この三週間時折ゲートボール場に通い、今ではすでにヴィータの保護者として顔なじみになった

本来のザフィーラと違い、『彼』は中々に喋れる方なので違う意味でおばあちゃん方のアイドルになっていた

ゲートボールじいさん達にはヴィータが、
ばあさんの茶飲み仲間達にはザフィーラが、
それぞれ人気者だった

老人会では、『最近人気者の若い親子がゲートボール場に時折現れるらしい』と、噂されているとか

ヴィータが聞いたらまたもや怒り出しそうだ

ザフィーラはこの穏やかな日々を非常に満喫していた

そして何より嬉しいのが、はやてもどことなくザフィーラが人型で居たいことが理解できたらしく、人で居られる時間が少し長くなったのだ

これを受け、彼は最近工事現場で短期のバイトを始めた

ビルの土台建築現場：時給1225円

一日六時間良い汗流している

このザフィーラ、かなりアグレッシブである

かれこれ始めて一週間であり、今日はシフトが無いので久々にヴィータと一緒にグラウンドに顔を出したのだ

（思えば原作のザフィーラはよく暇じゃなかったな・・・まじめだったんだね・・・だがかし！これで未来の番犬化を防げる！！めざせ自立！はやてちゃんに小遣いもらうのは体面が悪いしね！！）

収入の大半はシャマルに生活費として渡してある

別にグレアムおじさんが居るのだから金に困ることはないのだが、男として、働いていないのはどうも気後れするのだった

現在昼の三時を回ったあたりだ

ザフィーラはそろそろ帰ろうと、腰を上げヴィータを呼ぶ

「ヴィータ、そろそろ帰るぞ」

「オウ！わかった、んじゃあなじーちゃん達！」

ヴィータと共にザフィーラはまたおいで、と言う老人達に別れを告げ、我が家を目指す

道中、ヴィータがおもむろに話し出す

「なあ、ザフィーラ」

「?どうした」

「やっぱり・・・だいぶ変わってる、よな。前より」

例の人格改変云々の事だろう

ヴィータからすればやはり古い友人が違う人間になったような感覚なのだろうか

「ああ・・・やはり可笑しいか？」

ザフィーラが聞き返すと、彼女は首を横に振り答えた

「いや、さ。やっぱりまだ時々違和感あるんだけど・・・でも、今のオメーも中々いいんじゃないか？」

ザフィーラは、意地っ張りのヴィータから『彼』を肯定してくれる言葉がでたことに驚いた

やはり『自分』を受け入れてもらえるというのは嬉しいものだった

照れくさそうに少し顔を赤らめながら言ってくれるヴィータは、七割り増しで可愛らしかった

断っておくが、彼はペドフィリアではない

幼女は愛でもノータッチ、の紳士を標榜している

だけど、可愛えなあ

思わず笑みがこぼれ、ヴィータの頭に手を置く

「なっ！？なにしゃがる！？」

「いや、すまん。だが、そう言ってくれると有り難い」

子供扱いされたと感じたことよりも、嬉しそうにザフィーラがそう言うのに気が削がれたのか、ヴィータはまたそっぽを向く

苦笑しながらも歩みは止めない

「では、我らが主の元に帰るか」

少しずつ、物語には影響を及ぼさないレベルだろうがザフィーラの存在は『原作』とは変わりつつあった

「ただいま、はやて！」

「ああおかえり、ヴィータ、ザフィーラもなあ」

「ただ今帰りました、主」

八神家に着くとはやてが出迎えてくれた

夕飯の支度には早いし、

シグナムもまだだったので、しばらく居間で団欒を楽しんでいた

ヴィータははやてと話すこと自体が楽しらしく、今日あったことなどを楽しそうに話している

はやても楽しそうに聞きに回っていた

ザフィーラはソファーに座りながら、そんな二人を眺めている

小さな二人の様子は、見ていて笑みがこぼれるようなものだったが、今の彼は珍しく深い思考の海に陥っていた

（・・・そうだよ、今は平和だからいいけど、あと三ヶ月もしたらはやてちゃんが倒れちゃうんだ・・・
んーむ・・・別に何もしなくてもハッピーエンドには、なるだろうが・・・）

彼の知る原作は、これ以上無いぐらいの『ベスト』な結末だった

リインフォースが消えたことも含めての『ベスト』だ

もしも彼女が消えていなかった場合、『悪逆の限りを尽くした闇の

書』が未だ生きていると、世間にとられえられたかもしれない

何より、闇の書による遺族達からすれば、憎い仇達がなんの被害も被ることなくのうのうと生きているなどと知れば暴走しかねない

人の感情とは得てして御しがたいものである

だからこそ、彼女の消滅により感情の落しどころが出来たのである

『闇の書の管制人格』が消えることで、

リンフォースの消滅を以てこそ、初めて『闇の書の被害者』として、八神家に平穏が戻るのだ

（・・・胸くそ悪いが、どうしようもない、か・・・うん、だって俺ザフィーラだし。盾張るしか能無いし・・・クッ（泣））

ザフィーラは、奇跡に奇跡が重なって導かれたような、不確定極まりない綱渡りのエンディングを迎えるため、下手な干渉はしないことにした

何故なら彼はザフィーラだから

原作介入のロマンはスルーした

そんなことを考えていたら、とあることに気づいた

そう言えば、俺、魔法って使えんのかな？

彼は魔法を使つての戦闘を知らない。

記録として『識つて』はいるが、『体験』したことはないのだ

今までの1ヶ月、居心地が良すぎてついついそっちを忘れていたらしい

(・・・さてよ、十月に入ったらリンカーコア集めまくるんだよな・
・・・！？

チヨ、ヤバイ！ヤバイヨコレ！？練習・・・そうだ！魔法練習しなきゃ！？死ぬる！！大ミミズに食われて死ぬる！！)

本当に今まで考えていなかったようだ

眼前に最重要課題を突きつけられた彼の頭は、久しぶりにメダパニ状態だ

「・・・イーラ？ザフィーラ？どないしたん？」

「・・・またザフィーラが変になった」

「ハッ！！」

聞こえてきた声に頭を上げるザフィーラ

するとはやてとヴィータが彼の顔をのぞき込んでいた
知らず知らずのうちに頭を抱えて悶えていたらしい

さっきのことは、後で誰かに相談して何とかしようと思い、とっさに取り繕うことにした

「ああ、い、いえ、大丈夫です。何でもありません、主」

「ふん・・・」

はやては何とか誤魔化せたようだが、ヴィータの視線がイタイ

ちよつと前に受け入れてもらえて嬉しいとか言っていたのに、早くもザフィーラのガラスハートはブローケン気味だ

「それより、そろそろシグナムも帰ってくるから、晩御飯の用意しよか」

「おう！手伝うよ、はやて！」

「お！ヴィータはえらい子やな」

「エヘヘ・・・」

頭を撫でられ喜ぶヴィータ

はやてに撫でられるのは嬉しいらしい

ザフィーラが時計を見ると、既に五時を回っていた

フウ、と、一息つき立ち上がる

「私も手伝いましょう」

「おゝ、ザフィーラもか。えらいでゝ」

撫でようとしてくる主の車椅子を押しながら、ザフィーラはキッチンへ向かう

そこではシャルが既に調理の下拵えに入っていた

今日のメニューはカキフライであるようだ

夕食を終え、皆思い思いに過ごしている中、

ザフィーラは先ほど考えていたことを思い切って相談することにした

相手は勿論、我らが烈火の将・シグナムさんだ

先ほど風呂から上がったばかりで、濡れた髪や火照った白い肌が、普段の八割り増して色っぽい

何より、夏場なので上着が薄手のＴシャツ一枚だということが、素晴らしかった

うほっ、いいオナナ！と言ってしまいそうな自分を抑え、ザフィーラはシグナムを誘う

「シグナム・・・少しいいか？」

「ん？なんだ、急に？」

一応魔法、しかも荒事関係であるため、すぐそこでヴィータとゲームをしているはやてには、なるべく聞かせたくない

ザフィーラはつい、と目でベランダを示して立ち上がり、シグナムも理解したのか、それについて行く

「て、わざわざ席を外してなんの用件だ？」

七月の夜風がさわさわと髪を撫でる

今夜が満月と言うこともあり、ベランダに立つシグナムはまさに「月下美人」という言葉がピッタリだった

話がまた逸れつつあると、雑念を振り払い、ザフィーラは切り出した

「・・・シグナム、今の生活をどう思う？」

「それは・・・ああ、確かに、初めは戸惑いもした。今まででの上下では考えられなかった生活だ。・・・だが、主はやてに巡り会えたことが運命だとするならば、私は神に感謝している・・・」

シグナムは、いきなり何を言い出すのかと面食らったようだが、しかし、次第に穏やかな笑みを浮かべていきながら、そうのたまった

つまり、幸せであると

そう、その眼が言い切っていた

それはザフィーラも心から感じている

未だ一ヶ月足らずだが、下手をすれば世間の世知辛さに揉まれた前世よりも、心地良い生活だ

だからこそ、彼は最低限『原作』を辿れるように足掻いているいざという時に、『原作』すら辿れない体たらくは御免だった

「ああ、私もつくづくそう思っている・・・だが、このままでいいのだろうか？」

「・・・何？」

シグナムはザフィーラが一体何を言いたいのか解らず、訝しげだ

「我々は戦いから遠ざかりかけてはいないか？」

「！！？ザフィーラ！お前は主はやてが示してくれたこの道を蔑ろにする気かッ！？」

争いを求めるようなザフィーラの言葉にいきり立つシグナム
その視線は今にも斬りかからんばかりだ

ザフィーラは違つ、と、首を横に振り言葉を続ける

「この生活は心地良い。

しかしそうでは無くなるうとも、主はこの身に掛けても守り抜く・
・それは変わらない」

「・・・」

シグナムは彼の言葉を黙って聞いている

「だが、今までの主は、全てと言っていいほど『闇の書』を端とした戦乱に身を置かれていた・・主はやてが争いを好まざろうと、遠ざけようと、何時かは巻き込まれる気がしてならんだ」

「それは・・・」

「この世界は確かに平和だ・・しかし、シグナム。お前も感じただろう、ここに来た直後にこの街に漂っていた魔力を？」

漂っていた魔力　　ぶっちゃけフェイトそん達が海やら空やらで
カチ合いまくった影響なのだが、ここは如何にも不穏な要素である
様に言っておく

シグナムはそれに心当たりがあるのか、少し考え込む

「・・・魔法文明の無いこの世界とて不穏な気配はある・・・いく
ら私たちがそこいらの魔導師如きに不覚を取らないとは言え、万全
を期すべきだと、そう感じたのだ」

言い終えるとザフィーラは瞠目し、押し黙る
語るべきは語った、と、泰然とした佇まいでベランダの端に立つ

（・・・とりあえず、これで流れは掴めたかなあ・・・？あとは、
ツメをウマくやれば・・・）

が、内心は泰然とはいかず、ある意味綱渡りドッキドキ状
態だ

後はシグナムの反応を待つばかりだが・・・

そう、今までの会話はザフィーラのひたすらに回りくどい、とある

計画の一部なのだった

名付けて『ザフィーラ天元突破作戦』 ネーミングセンスに若干のイタさを感じるが である

歴戦の兵たるザフィーラが戦い方を忘れるなどあるわけ無いし、そんなことを言ったらこの一ヶ月で何とかモノにした『新・ザフィーラ』という立ち位置を疑われるかもしれない

なにせ初日に『ザフィーラという存在は変わらない』と言ってしまったからだ

これでうまいこと戦えないと知られると

『ザフィーラが戦いを知らない？』

『そんなバカな？彼は我らと同じく歴戦の兵だ・・・』

『ならばお前は何者だ・・・！？』

『一ヶ月だまし通していたな！この偽物が！問答無用！斬りsry』

・・・bad endの危機再びである

それは勘弁してほしいので、ザフィーラはこんな回りくどい方法でそれとなく魔法を使える環境をシグナム達に認めてもらえるように

し向けているのだ

後は魔法のトレーニングが出来るような世界に行くなり、結界なりで何とかする

これが晩御飯のカキフライをほおばりながら思いついた計画の全貌である

ここは人外魔境の海鳴市、下手に魔法を使えば地雷を踏む可能性があった

ここまでだと鍛錬場所の確保しかできないのだが、それすらも一苦労だ

ザフィーラはこの世界全てに細心の注意を払う心がけだった

バタフライ効果で知らない展開になられても困るし、何より、『彼は心配性なタチだった

しばらく目線を下にやっていたシグナムが顔を上げ、先ほどの強ばった顔を弛めながら口を開き

「確かに、一理ある、な。今のままでも不覚をとる愚など犯さないが・・・常に外を意識しておく必要もあるとも思う。主はやてのお側に長くいるヴィータやシャルよりも、私たちこそが気を

回すべきことだな」

（イヨッシー乗ってくれたか！？）

「だから、ザフィーラ。緊張感を無くさない為に、たまには仕合でも行つか？勘も鈍らせないし、いい刺激になる。そういうことだろう？」

サラリ、と、仕合を持ち掛けてきた

（・・・えっ？予想GUYデス・・・って、えっ？今なんて！？）

『たまには魔法を使わないと勘も鈍るだろう。時々トレーニングしよう』

みたいなことを期待していたザフィーラからすると、一足跳びどころか大ジャンプな返答だった

（仕合！？模擬戦・・・だと！？こんなところでバトルジャンキー発動しちゃったー！ツ！？）

確かに、先ほどの彼の言い回しでは

『最近戦ってないか？』

と行っただけに等しく、
シグナムにとっては

『最近戦ってないから、俺と模擬戦やらないか』
と変換されたらしい

ザフィーラにとっては大きな誤解であり、かなりの痛手だ

しかし、自分から振っておいて下手に断ろうものなら bad end
直行の予感しかない

つまり、やるしかないわけで

「・・・そうだな。お相手しよう・・・」

としか答えられなかった

（マジでこんなはずじゃなかったことばかりだ・・・）

心中で滂沱の涙を流しつつも、表面上はクールなザフィーラを崩さない

もはやスキルと化してきていた

そんな彼をよそに、シグナムは言う

「そうか、ならば時間が空いたときなどにやるとしよう。・・・しかし、やはり変わったな、ザフィーラ」

今日の昼間にヴィータから言われたようなことを再び言われた「そう、か？」

「ああ、昔のお前ならば主の側でただ寡黙に控えていただけだったが・・・今みたいに積極的に何かを言っていたことなど数える程しかなかった・・・」

あくまでも柔らかい表情のシグナムだが、やはり一ヶ月足らずではしこりか有るのだろうか？と思い、ザフィーラは聞いてみる

「・・・皆から見て、変わった私はどうなのだろうな・・・？」

「フフ、昔のお前でも良かったが・・・今のお前も悪くはないさ。皆そう思っているだろう。」

どちらにせよ、お前は我が仲間、ヴォルケンリッターが盾の守護獣ザフィーラだろう？少しぐらい変わろうが、『お前』は『お前』だ」

（・・・ああ、うん、涙でそうだ）

ヴィータに続きシグナムにも、また、彼女の言い分だとシャルルもだろう

今の『ザフィーラ』を認め、受け入れてくれている

元から居た、寡黙な守護騎士たる『ザフィーラ』に対しては、居場所を奪ってしまったことに未だジクジクと胸は痛むが、仲間達の暖かい言葉には素直に感動したザフィーラだった

「心配するな。一月前にも言っただろう？お前がお前である限り、我らは戦友だ^{なかま}と？」

フツ、と、そう言い切るシグナム　月下に映える紅髪の騎士は、やけに男前に見え、思わずその姿に見惚れる

（シグナム姐さん・・・惚れてまうで・・・やっぱりザフィーラ。いくら留守番わんちゃんだろうが、お前は羨ましすぎる位置にいやがったんだ・・・）

先ほど胸に覚えた痛みなんて、既に次元世界の彼方へ消え去っていたザフィーラだった

「さて、いつ仕合おうか？生憎今月一杯は道場の稽古が入っていて

な・・・」

(「いーやだぁぁぁーッ!!?」)

嬉々として仕合の予定を詰め始める烈火の将に、ザフィーラは声無き声で悲鳴を上げるしかなかった

彼は今日も流されていた

続く

第三話 『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』（後書き）

ますます先が思いつかない

プロット？なにそれおいしいの？

第四話 『ておあーって、なんですか?』（前書き）

大変長らくお待たせいたしました

その割には駄文も極まっております、なんと申し上げてよいのやら

応援なさってくださいている方々に、お詫びすると同時に、図々しいとは存じておりますが、生暖かい目で見えていただければ、幸いです

第四話 『ておあーって、なんですか？』

・・・皆さんこんにちは、アナタのザフィーラです

・ 前回、迫り来る事件に備えアクションを起こしたワタクシでしたが・

「ッテオアアアッ！！」

「今のを防いだか！流石だな！！だが、まだ終わらん！！ハアアッ
！」

・・・新たな脅威を呼び起こしただけかもしれません・・・

カチ込め！ザフィーラさん第四話 『ておあーって、なんですか？』

八月上旬・某日

月夜の会談より二週間後、ザフィーラは今、見渡す限りの砂漠に立っていた

この世界の原生生物だろう、足の長いダンゴムシ（全長30メートル）的ななにかが遠くに見える

（デラヤベエ・・・）

冷静を装ってはいるが、

ポタポタと汗を流しながら、汗以外の何かも流れそうになるザフィーラ

目の前にはギラギラとイイ笑みをした烈火の将が

何故彼らはこんな場所にいるのか？

話は一時間ほど前に遡る

バイトの方が一段落着き、夏真っ盛りの海鳴を散歩していたザフィーラ

この日はヴィータとは一緒ではなく、ゲートボールの日でもなかった
ので、一人でブラツいていた

（ふいゝ、暑いねえ。帰ったらはやてちゃんにかき氷でも作って貰
おかなあ・・・）

そんな取り留めもないことを考えながら、ミンミンと、蝉が鳴
き盛る公園をゆつたりと歩きながら家路につく

「ただいま帰りました」

「今帰ったか、ザフィーラ」

「・・・ム？」

いつもならばはやての

『おかえりいゝ、手え洗いや』という声で迎えられるはずなのに、
その日の出迎えはどういうワケかシグナムだった

「（え？シグナムさん？）・・・珍しいな、シグナム」

「ああ、お前を待っていたところだ！さあ、行くぞ！」

「ハ？・・・いや、待つて

」

そして至る、現在

まあ要約すれば、

家に帰るやいなやシグナムに拉致・・・もとい連れてこられたのだ
どうやら剣道場とのすり合わせが済み、シグナムに時間が出来たため模擬戦を実行しようと相成ったらしい

結局シグナムの熱意に流されてしまった形にはなるが、一応最初の目的である『戦い方を知る』ことは出来るのであるが

（いやあゝゝな予感しかしねーYO！・・・コレ、殺されんじゃね？
いや、死ぬる、うん・・・）

この期に及んで、ザフィーラは後込みするばかりだった

目の前には既にやる気満々でレヴァンティンを抜刀し、騎士甲冑を着込んだシグナム

やはりザフィーラの言ったように、戦闘から離れていたこともあり、模擬戦とはいえ久方ぶりの仕合に血が騒いでいるのだろう

（アレ？はじめの目的って『魔法ってどうやって使うんですか？』
みたいなことを聞く予定だったのに・・・今にも殺仕合^{コロシアイ}始まりそう

な雰囲気じゃね・・・？アレ？何を間違えた・・・)

「さて、ここならばいくら暴れようが問題あるまい？わざわざシャルに頼んで探した甲斐があった。存分に仕合おうか」

お馴染みとなった、

外面クール内面メダパニを繰り広げるザフィーラを余所に、シグナムは臨戦態勢に入る

彼は魔法有る無しに関わらず、戦いを知らない

知らないからこそ魔法から訓練しようとシグナムに相談したのだ

それをいきなりシグナムという絶対強者との模擬戦から、と言うのは些か酷であった

だがしかし、元はといえば自分から言い出したことでもあり、流石に相手をするしかないと開き直った

(　　ツアアアア！？もうっ！？やるよっ！どうせ死ぬならやつて死ね！だ！・・・でもなあゝゝっ！？)

そう考えてみた割には無言のままのザフィーラ

最近でこそ外面の逞しさに引っ張られ気味ではあるが、中身の本質はヘタレであるのだ

そんなザフィーラを見て、シグナムは何かに気付いたように声を掛けた

「どうした？まさかお前ともあるう男が隠したわけ有るまい？それとも今日は都合が悪かったのか？」

え？今更聞くんですか？、と突っ込みたいようなセリフを発するシグナム

その言葉には他意はないのだろうが、
踏ん切りが着くか着かないかの位置をウロウロしていた彼にとって
はこう聞こえた

『用事を理由に帰ってもいいんだぞ、この腰抜け！』

と

無論シグナムが長年の盟友たるザフィーラにそんなこと言う訳ないので、完全な彼の被害妄想である

だが、テンパっていた彼にはそんな思考が回らなかった

（え？・・・イヤイヤイヤ、いくらシグナムの姐さんとも言えど、

そこまで言われちゃあ黙つとれんよ・・・意地があんだろ！？男の子にはさ！！なあ！君島アア！！）

「・・・問題ない、始めようか」

勢いに任せ手甲を構え、原作でお馴染みの騎士甲冑を展開

往年の名ゼリフを（心中で）叫び捨て、シグナムに相対したザフィ
ーラ

シグナムはそんな彼に満足そうに、鷹揚に頷く

「フッ、そうこなくてはな。では、往くぞ！！」

「応ッ！！」

正眼に構えたレヴァンティンを振り上げ、そのまま弾けるように『空中』を踏み蹴り迫ってくるシグナム

そう、『空中』を踏みしめた

（　　）
　　ってあああ！？空ってどうやって飛ぶんだよーっ！
　　！？）

威勢良く応じたは良いものの、基本的な飛行魔法からダメなザフィーラだった

瞬く間に刃との距離は縮まっていく

ザフィーラはまだ地面に足を着けており、シグナムは既に飛んでいる
完全な上空からの襲撃だ

上からの斬撃など、普通の生活を送ったことしかない人間には防ぎようもないわけで　しかし、ザフィーラは手甲を上突き出し、刃筋を逸らして受け流した

（　　って、あれ・・・？）

シグナムの太刀筋を受け流す『行程』が頭の中に浮かび、無意識のうちに体が其れを『実践』する

文字通り、自然と体が動くのだ

彼が『ザフィーラ』の『記録』を初めて『観た』ときと似たような感覚だった

ピキュイン！と、

さながらニュータイプの如き直感で、ザフィーラは『それが何であるか悟った

(つまり・・・これは『ザフィーラ』の経験、か?)

数千年の長きに渡り、守護獣として主を守り戦い続けてきた『ザフィーラ』である

『体に染み着く』というレベルに至るまでに『ザフィーラ』としての
護りの戦い方を磨き上げてきたのだらう

共に戦い、共に鍛えた仲である戦友シグナムの刃筋など、何度も『体験』しているのだ

受け流すなど造作もない

(・・・フ、フ、フハハハハハハア!?動く、体が動くぞ!?さすがはザフィーラ!ええカラダ(ボディースペック的な意味で)してるやないか!いつ!!)

これは戦える!と断じて、ザフィーラは一気にテンションが上がった
やはり単純思考だった

「ハアッ!!!」

ギャリ、ガキン！

受け流されたことなど物ともせず、返す刀で再び斬撃を繰り出すシグナム

それに対し、片手の掌に張った障壁で受け止め、反対の手でレヴァンティンの腹を殴り刃を逸らす

今、彼は『障壁を張る』という魔法を行使したことに気づいた

（魔法使える！！ヤベツ、無意識にカラダ動くってそこまでできるの！？さすがリリカル世界！ご都合主義有り難おおおう！！）

外面には反映されないものの、更にテンションをあげるザフィーラ
幾度かの剣戟を逸らし、弾き、防御していくうちに、この模擬戦に後込みしていたことなど忘れ、『戦えている自分』に何だか楽しくなってきた

しかし、彼は失念していた

「まだまだッ！」

「フツ、効かん！！！」

一度距離を取ったシグナムの、再びの突撃から来る剣戟を受け止めようと障壁を前に出し

パキイイイン

砕かれた

「ッ！！？（ちょ、まっ、えっ！？）」

ザファイラとシグナムでは、根本的なスペックに圧倒的な差があることを

ズドムッ！

「ふっぐお！！？」

障壁を砕き衰えることのないシグナム渾身の一撃は、見事にザファイラの脇腹に叩き込まれた

本来のザファイラであれば歴戦の勘や推測で何とかなっただかもしれないが、今の『彼』にそれはまだ無理な話だった

（・・・イッツツツテテ！？・・・やっぱ、戦いはそんな、に、甘く、ない、か・・・ガクリ）

激しい痛みと、吹き飛ばされる体の中、ザフィーラはそんな当たり前のことを悟っていた

「だ、大丈夫か？だが、お前ならば今程度の剣閃ならば・・・」

シグナムが何か言っていたが、ザフィーラにはそれどころじゃない（ああ、痛い・・・帰りたい、あつたかい八神家に・・・ヴィータちゃんに癒されたい・・・）

吹き飛ばされ、砂漠に仰向けになりながら現実逃避真っ最中のザフィーラ

一発イイのを喰らっただけだが、彼の精神力はもうゼロよ！な、状態だった

何でこんなことをしているのか？

別にやらなくてもいいんじゃないか？

どうせザフィーラに活躍の場なんかないんじゃないか？

努力するだけ無駄じゃね？

と、思考がネガティブにスパイラル

しかし 思い至る

（・・・いや、スペックはそこしなくても、出番は少なくとも・・・やらなきゃいけない場面は確かにあるんだよな。それに、このままじゃ『盾』なんて名乗れないし、スゲー癩だ・・・クツ、はやてちゃんに癒されたい！！）

なんやかんや言いながらも使命的なモノに駆られ、ふらりと立ち上がるザフィーラ

倒れてから思考、立ち上がるまで、この間僅か四秒

なかなかの早業である

シグナムに怪しまれることはない筈だ

「・・・ウム、問題ない。不覚をとった」

「大丈夫かザフィーラ？」

「ああ、この程度で音を上げては主の『盾』など務まらん」

「フツ、そうだな・・・では、続けようかッ！！」

立ち上がり、コキコキと首を鳴らしながらのたまうザフィーラに、シグナムも言い終わるやいなや再度呐喊

模擬戦は仕切り直された

初めての模擬戦から二週間が経過した

「ッテアアアッ!!」

ビュオツ、と、空を切りザフィーラの拳がシグナムの懐を捉える

「甘いッ!!」

しかしシグナムはそれをどうこうするでなく、一歩引き下がると同時にレヴァンティンを突き出し、返す剣戟をザフィーラの右肩へと繰り出した

それに反応するように、二枚に重ねられた青い障壁 ザフィーラ
の盾が展開され、刃を弾く

と、同時にその盾が前に迫り出し、さながら某白い悪魔のアクセルシューターの如くシグナムに迫り『飛んで行く』

そう、盾が『飛んで行った』のである

一体何故このような技を考えたか？

それは、鍛錬一日目・・・つまり二週間前のあの日に結局はなんやかんやで、シグナムにボコボコにされたことに起因する

『ふう・・・今日は良い鍛錬だったな、ザフィーラ！お前の言ったとおり、やはりたまには感覚を研ぎ澄ませるのもいいものだ』

『あ、ああ、うむ・・・（グヌウウ、痛いよう、シグナム姉さん容赦ねーよう・・・）』

『さて、そろそろ主はやての下へ帰るとしよう』

『うむ・・・（これは、なんとかしないと死ぬる・・・）』

ザフィーラはこの日、家に戻った後考えた
アニメにおいての役回りもあったのだろうが、

『何故ザフィーラは盾しかできないか？』

ということについてだ

同じ狼系のアルフはバリアブレイク、つまり彼の対極の特技を持っていた

その対になるためのザフィーラなのだろうが、彼としては

『余り者・犬同士くついついとけよ』

というようにアルフと番にされるのだけはゴメンだった

いや、アルフはアルフでワイルドな色気とか、バインバインな胸とか、むしろ好きなn・・・話が逸れた

つまり、何が言いたいかというと、

『ザフィーラの攻撃手段は肉弾戦以外にないのか？』ということだ

『（盾は硬いんだよなあ・・・あの後気合い入れて張った奴は殆ど壊されなかったし・・・やっぱりパンチとキックしかねーってのが辛いんだよ・・・）』

深夜の八神家のソファに座り、むうう、と唸りながら考えこむ犬耳男不審だが、本人はそんなことも言ってられない

攻撃手段の貧相さ“いいようにやられることにもなりかねない

いや、確実になる

確かに盾は硬いが、それだけでは時間稼ぎしかできない

ご都合主義万歳のオリ主的なチート魔力なんて有るはずもないので、既存のザフィーラのスペックで手を講じなければならぬのだから、余計大変だ

しかし、ふと、天啓が浮かんだ

『（・・・あつ、そうだ。盾しかできないなら、盾を使えばいいじゃない！！）』

つまり、

『苦手なモノは得意なモノで補え』

更に意識するならば、

『いつそのこと盾でブン殴っちゃえよ』

と、いうわけである

本来の寡黙なザフィーラなら、「主を守るためだけに在ればいい」とか言って攻撃なんか積極的にはしなさそうだが、今の彼は違う

どちらかといえば守りにはいることは好きだが、折角使える『魔法』という未知なのだから、少しは工夫して色々やってみたいのだ

求めるコンセプトは『攻勢防御』

戦い、護り、打ち倒し、守り抜ける、そんな『魔法』を彼は研究することにした

ぶっちゃけ思う存分男のロマンを探求したかったのだ

このコンセプトの下、ザフィーラはシグナムとの模擬戦を重ね、この技の実用にまでこぎつけたのだ

荒事嫌いの彼が自ら模擬戦を申し込む辺り、初めの目的とか完全に吹き飛んでいるらしく、かなり『魔法』の運用にのめり込んでいた

幸い『ザフィーラ』というボディのスペックでの再現も可能で、

『飛ばして相手を追尾、そのまま攻撃、牽制、防御と使い分けることのできる盾』

を完成させたわけである

名前はまだ無いが、

『攻勢防御』を体現した技だと言えた

そして、場面は再び戦闘へと戻る

迫り来る二枚の盾を巧みにかわし、シグナムは魔力を足に込め、空を蹴りザフィーラへと距離を詰める

ザフィーラは臆すことなく手甲を前にかざし、ギリリ、と拳を握る

その手には、拳大の二重障壁

「ハアア、ゼイツー!!」

下段から切り上げてくるシグナムの剣を 真っ向から『殴って』
受けた

これもまた、『攻勢防御』の一つであり、元々強靱なザフィーラの
体躯を、更に強化することに成功した

「フツ、まだだ！」

剣を止められることは判っていたらしく、シグナムはすぐさま二の
太刀を繰り出す

と、そこへ先程かわした二枚の障壁がぐるりと回って戻ってくる

その障壁はそれ自体が回転しており、手裏剣のごとく飛び回る
(イメージは某龍玉のクリンの気斬)

咄嗟に太刀を翻し、二枚の迎撃に当たるシグナム

だが

「『炸裂』!!」

ザフィーラの叫びとともに、二枚の障壁は魔力素となって光を放ち
爆発する

(イメージは某運命のブローン・ファンズム)

「ッ！？ぐうつ！！」

シグナムは爆発の余波に一瞬怯むものの、さすがは烈火の将

すぐさま体制を立て直し、爆炎に阻まれた前方に意識を向ける

しかし、時既に遅く

「・・・私の、勝ちだな」

ピタリ、と、懐にまで接近していたザフィーラの拳が、彼女の喉元に添えられていた

「・・・ああ、今回は一本取られたな」

シグナムは意外そうに、それでいて少し悔しそうにフツ、と笑みを漏らす

今日は久しぶりに、ザフィーラがシグナムに競り勝った

模擬戦とは言え、中身は素人同然だったザフィーラが、歴戦の勇士から一本奪ったのである

この二週間で、彼はかなりの戦い方を身につけていた

戦いを終えた二人は海鳴に戻るべく、転送陣の準備をしていた。用意していたタオルで汗を拭きながら、シグナムはザフィーラへと話しかける。

「しかしやはり意外だ」

「どうした？」

「お前から戦いを忘れるなど言い出したかと思えば、今までにない戦い方を編み出してくる・・・盾の守護獣にしては攻撃的じゃないか」

「ふむ・・・」

転送陣の設置を終え、ザフィーラは少し考えてから、言葉を選んで答える

「守るとは、ただ受け身に回るだけでは務まらないから」

「まあ、そうだな」

「故に、前に出る『護り』を講じてみたが・・・烈火の将として、どう見た？」

シグナムはそう問われ、僅かに思案する。
そして、きっぱりと言い切る

「実を言えば、いささか粗い」

「やはり、か・・・」

ザフィーラは内心解っていたことだが、やっぱり少しテンションが下がった

まあ三週間やそこいら訓練したからといって、元来専守防衛型のザフィーラが攻撃特化になれる筈もない

strikersの辺りでザフィーラの魔導師ランクはA+、シグナムはS-だった

守護騎士ならば簡単にランクは変わらないだろうから、今の時点でもそれだけの差が開いているだろう

そんなシグナムから一本取れただけでも金の字なのだ

「だが、それでいいだろう。お前は今まで堅固な盾でしかなかった。そんなお前にいきなり追いつかれたら、将たる立場の者として少しやりきれなくもなる」

ニヤリと笑いそう言ってくれるシグナムに、ザフィーラは一寸ポカンとするも、答えるようにニヤリと笑う

「では先ずの目標は、二回に一回は一本を取ることだな」

「ハッ、中々言ってくれる。私とて簡単に遅れは取らんぞ？」

フフフフ・・・と、後を引くような笑みを残しながら、二人は主の待つ我が家へと帰って行った

「ほんなら、ヴィータ、お風呂行こか？」

「おうっ！」

「あっ、はやてちゃん、私もお手伝いしますね」

「えー！？シャマルも入るのかよ！アタシだけで十分だって！」

「はいはいヴィータ落ち着いてな。じゃ、三人で入るか？」

「むう・・・はやてがそう言うなら」

「ヴィータちゃんたらもう・・・」

夕食 メニューははやて特製冷やし中華 を終え、風呂や
何やと姦しく騒ぐ三人を後目に、ザフィーラは自分専用湯飲み（青
いわんこの柄が入った渋い配色の瀬戸焼。はやて購入）で食後の一
服と洒落込んでいた

「ふう・・・やはり日本茶とは良いものだな」

向かいの席ではシグナムが同じく専用湯飲み（白地に『侍』一文字
の瀬戸焼。はやて特選）を持って茶を啜っていた

「ふむ、そうだな。この国はベルカとはあらゆる面で異なるが・・・
存外、馴染むものだ。（まあ、中身は純粹根っから日本人だもの！
！）」

「・・・本当に、まるで昔からこの地に居たかのようにだ」

シグナムが過去を思い起こすような瞳で虚空を見やる

まだまだ数ヶ月程度だが、血と闘争から離れて暮らした価値ある数
ヶ月に思いを馳せているのだろう

そんな憂いを含んだ目線もたまりません！

やはり美人はすばらしいとザフィーラは思った

だが今此处で展開されそうなこれはシリアスな空気

表情にはおくびにも出さず、湯呑みを置き一息つく

「確かに、私もそうだな。この地は、今までのどの世界よりも寛容で　人心地が良い。（まあ日本だし、リリなのだし、海鳴だしねー）」

ザフィーラの言う『今までの世界』とは過去の主達を見た『ザフィーラ』の記録であるが、そのどれもが血塗られていたそのことを鑑みれば、アニメ本編の扱いは騎士達にとって良い意味で『異常』だったんだと理解できた

そりゃあそんな場所を与えてくれたはやてにゾッコンにもなるだろう

（・・・にしても、かなり地域に密着してるよね。まあ原作キャラには会ったこと無いけど）

思えばシグナムは近所でも評判の美人さんと呼ばれるになったし、シャマルは朗らかな若奥さんとしてご近所さん達に認知されている

ヴィータはゲボ子（ゲートボールに勤しむ女の子。略してゲボ子）としてジジババに大人気な近所のちみっ子扱いだ

ザフィーラ自身も日雇いガテン系のバイト関係やヴィータの保護者としての老人会の方々との関係を考えてみると、すばらしく海鳴に溶け込んでいると言えよう

それらに影響されてか、図書館と病院ぐらいしか目立った外出の無

かったはやても、積極的に外に遊びに行くようにもなった

ヴィータやシャマル、明いてるときにはシグナムやザフィーラをも連れだしてピクニックなどに行くような、アグレッシヴ車椅子美少女と化していた

下手をすれば原作の目じゃないぐらい社交性の高い八神家である

（あれ？大丈夫、だよな・・・？はやてちゃんも高町さんとかと仲良しになってないよね？）

自身の『犬化、ダメ、ゼツタイ』計画から始まったバタフライ効果で、そういう事態も引き起こされてるんじゃないかと不安を感じたザフィーラ

幸いこの数ヶ月は魔法関係は音沙汰ないので、まだ大丈夫だろうが・
・

（ん？魔法関係？・・・グレアムさんは、ちよつかいかけてこないよな？なら、まだ原作のシナリオの上・・・？あゝ、ダメだ、考えれば考えるほどマイナス思考のデフレスパイラル！！）

「ザフィーラ？」

シグナムは、湯呑みを置いたと思えばほっこりと笑い、しかし急に冷や汗を掻きだし、終いには頭を掻きだしたザフィーラに視線を向けた

しかしそこに怪訝な色は含まれていない

高頻度でこうなるものだから、シグナムを含めた女性陣は、既に慣れっこになってしまったのだ

『クールで寡黙、しかし前よりフレンドリー、しかし時々変になる』

と言うのが、周りからの現状のザフィーラの評価だ

「（ハッ！オウフ！またトリップしかけてた！？フウ、危なひ危なひ）・・・スマン、何だ？」

そんなザフィーラに、シグナムは軽く息を吐き、もう一杯茶を注ぎながら言う

「ふう、最近は変わったかと思えば、上の空？いや、思考の海に浸ることが増えたんじゃないか？」

「・・・ムウ、そうか？」

「まあ、昔から寡黙な奴だったからな。しかし、時折見せる変な動き、あれは何だ？」

(・・・恥ずかしい限りです)

そう問われザフィーラはなんか恥ずかしくなってきた

無意識の奇行を突きつけられて狼狽えないほど、彼の中身は肝が据わってない

そこで彼はハツとした

原作のザフィーラは堅物すぎる

堅物キャラは、高町兄や真つ黒黒助提督が既に居る

(・・・まあ、『お茶目なザフィーラ』もキモイッスけど・・・)

まあ、少しばかり堅物からの脱却をはかろう

目指すはウェットに富んだジョークを吐けるダンディズムザフィーラだ！

取りあえず軽くジャブから。

そう考え、ザフィーラは片目を閉じ、人差し指を顔の前に近づけ、
言い放つ
！

「禁則事項です」

「・・・は？」

何が起こった？と言わんばかりにきょとんとしたシグナム

空気がなんとも変なことになった

静寂を切り裂き、ザフィーラは立ち上がる

「・・・う、む。うむ。さて、主等が湯浴みしている間に皿を洗ってこよう」

「あ、ああ・・・」

そそくさと湯呑みを片し立ち去るザフィーラ

シグナムはその背中をぱちくりと目を瞬かせ、ポカンと見ていた

と、おもむろにその顔に笑みを形作る

「・・・クツ、クツクツ。奴も、冗談を言うようになったのか・・・」

その眼差しは、仲間の一人の変化が、改めて悪いものではなくて良かったと節に語っていた

まあ、意味はよく解らなかったが

この日、ザフィーラの評価に『冗談のセンスも変』が付け加えられた

（ヘタこいたーーーーっ！）

負け犬、ならぬ負け狼の心の叫びが、夜の八神家に響いたとか響か

なかつたとか・・・

続く

第四話 『ておあーって、なんですか?』 (後書き)

なんか、繋ぎなのか日常なのか、なんなのかわからない話ですよ

力量が足りなさすぎる・・・

第五話 『とあるメガネとイイオトコ』（前書き）

ウホッ、いいザフィーラ・・・

って、考えてたら、こんな話に

いや、ノンケでも食っちゃわないですよ、うちのザフィーラは

第五話 『とあるメガネとイイオトコ』

はろー、えぶりばでー！

毎度おなじみザフィーラです

原作とは全く掠りもしない（ザフィーラなんてる時点で関わりまくってるとか言うな。八神家はキャラじゃない！家族だよっ！）
『気ままなザフィーライフィン海鳴』を過ごしてきましたが・・・

「あゝ、お兄さん、聞いてます？」

「・・・ああ、うむ」

まさか記念すべき原作キャラの一人目がこの娘だとはのう・・・

カチ込め！ザフィーラさん第五話 『とあるメガネとイイオトコ』

「いよーし！休憩だぁ！お前等、昼飯行くぞー！」

「「「ウィーっす！」」」

学生達は夏休み真っ盛り、しかし社会人達には休みなど無縁な八月某日

炎天下の中、とあるビル建築の工事現場では、昼時と言うことで休憩を執っていた

「ふう・・・」

「うーい、八神！お疲れさん！」

「うす、お疲れ様です、親方」

その中に、我らが盾の騎士、ザフィーラの姿があった

青いつナギに、褐色の肌が映え、犬耳は黄色い安全ヘルメットが覆い隠してくれている

万が一ヘルメットがはずれても、下に手ぬぐいを巻いているため、『犬耳をつける変態さん』の称号を頂くことはない慎重仕様だ

ザフィーラは、良い汗を流していた

元来デスクワーク派だった『彼』だが、今のボディのそこ知らずの体力を振るえることが、存外に労働意欲を高めていたのだ

ザフィーラは家族の為に、少ないながらもお金を稼ぐという行為が尊いものだと、改めて実感していた

決して前世がもやしだったからウハウハになっているだけではない

担いでいたスコップを地面に突き立て、ザフィーラが首から下げたタオルで『イイ汗かいた！』とばかりに汗を拭っていると、現場監督、通称『親方』から声をかけられた

ザフィーラはここでは『ザフィーラ・八神』として、日系二世のハーフと認識されている

『日本の親戚を訪ね、遙々海外から海鳴に移住してきた生真面目な青年。現在は居候先に少しでも貢献するためこうして汗水流している』、という設定だ

なのでみんなからの呼び名は、大方が『八神』、少数派で『ザフィ

やん』である

ザフィーラとしてはこんな色黒でガタイのいい男らしい男を、『ザ
フィヤん』と軽く呼べる現場の仲間達に軽く戦慄したのだが、みん
なには内緒だ

閑話休題

「八神は、今日はシフト午前だけだったよな？」

「うす、昼上がりの予定です」

「そうか！よし、もう上がっていいぜ！後は任せな！」

「うす、ありがとうございます！お疲れ様でした！」

「おう！お疲れ！」

ノリが体育会系である

クールな彼ならば有り得ない暑苦しいスタイルだ
ヴィータやシグナムがみたら大層驚くこと間違いない

この職についてより数ヶ月、すっかりガテン系の職場に紛れ込んでいたザフィーラだった

（あゝ、あつちいなあゝ・・・）

皆に挨拶をすませ、職場を後にしたザフィーラは、海鳴町を歩いていた

着替えても結局汗だくになるため、格好は先ほどのままツナギにであり、ヘルメットだけがパージされていた

ミインミイン、ジリジリとオーケストラを開催しているセミ達に更に暑さを煽られながら、ザフィーラは右手に提げたものを見る

（どこで食おっかなゝ、コレ）

コレ、とは弁当箱であった

そう、八神家家長たる、はやて謹製の手作り弁当だ

ザフィーラが働くようになってから、わざわざ腕を振るってくれて

いるのだ！

今日は昼上がりであることを伝え忘れていたため、朝に間違えて作ってもらってしまったのだった

しかし、絶品であるため、食べないという選択肢はない

それほどまでにウマイ

（ほんま、えー子やでー、はやてちゃんは。あんな嫁さん欲しいよなー・・・いやいやいや、光源氏計画はいかん、いかんよ君！若紫、若紫イー！！）

暑さで頭がやられそうになっているザフィーラ

しかし頭の手ぬぐいは外さない

外したら『犬耳ピョコリこんにちは、あらあら変態よ、マァー、コワイ、ヒソヒソ・・・』コース直行だとザフィーラは思っているからだ

まあ変身魔法の応用で隠せるのだが、ザフィーラは今一完全な人型になりきれないでいたのだ

暑さにブれる思考の中で、ザフィーラは昼飯をどこでとるか考えた別の帰ってしまったもいいのだが、せっかく弁当を用意してもらったのだし、屋外で食べたい気分だった

ふと、思いついた

（そうだ、公園いこう）

単純に、木陰を求めてザフィーラはたまたま一番近い海鳴臨海公園に向かってしまった

そこが、『原作』きつてのイベントスポットであることは、彼の頭からきれいさっぱり抜け落ちていた

海鳴臨海公園にて、ザフィーラはベンチに座り弁当を広げていた

日差しは未だ力強いが、ざわざわと揺らめく木陰と、高台特有の海から吹き抜ける爽やかな風のお陰で、幾分涼を得ることができていた

「さて・・・いただきます」

蓋を開けると、中には色とりどりのおかず達、ふっくらな白飯、添えられたフルーツとご対面

暑い中でも食欲を失わないよう、夏野菜など旬の食材が工夫され詰め込まれている

実にウマそうだ

（やっぱり料理できる子っていいな、うん。これがまさか九歳児による一品だとは思えるだろうか？いや、無い（反語）！）

埒もないことを考えつつも箸を進めるザフィーラ

そんな彼に、声をかける存在がいた

「あ！あの時のお兄さん！」

「（むぐもぐ）・・・うん？」

ザフィーラが顔を上げると、そこにはメガネと三つ編みが特徴的な、どこかで見たことのある少女の顔があった

「（あるえ？この子どつかで）・・・君は？」

「えー、覚えてないですか？私、先週助けていただいたんです。こんなところでまた会えるなんて！あの時はありがとうございました！」

ずっとお礼を言いたかったと、にこやかに言う少女

先週、というワードに、ザフィーラの中で一つの出来事がヒットした

「・・・ああ、あの土曜日のか」

「はい、それです！本当に、あの時はきちんとお礼も言えないですいませんでした」

少女は、ぺこりと頭を下げる

見たところ高校生ぐらいだろう

三つ編みメガネのせいか、文学少女的な印象が強い

いや、先週の事態を見るに、実際に文学少女なのだろう

さて、ここで気になる先週の件とは？

それは遡ること六日ほど前

炎天下、ザフィーラはビル街を歩いていた

ジリジリミーンミーンカーンカコンブロロロ・・・

（あっつい・・・溶ける、ザフィーラさん溶け出す・・・）

近隣のビル工事の音や車の騒音が、BGMとして更に暑さをかき立てる

すこし奥まった閑静な住宅街、つまり八神家の付近はそうでもないが、

いくら海鳴とはいえ真夏のビル街は灼熱地獄であった

この日は午後から現場の調整があるとかで、バイトは午前上がりだったのだ

はやて印のお弁当も食べたし、早いとこ家に帰ろうとしていた

格好はいつも通りのツナギに手ぬぐい、
実に暑苦しいのだが、ザフィーラのポリシーなのか決して表情には
出ないので、周りから見れば涼しげな顔をしているように見えるだ
ろう

（これは、キャラ崩れ防止の保険なのかね・・・？世界の修正力（
笑）か？すごく・・・ありがたいです）

（お？）

ふと、横に目をやればかなり大量の本をもって歩いている少女が目
に入る

華奢な体躯だが、しかしその荷の重さに反し、足取りは軽そうだった
よく見ればかなり楽々と歩いている

（このお嬢さん体力あるなあ、うん、ウラヤマシス・・・まあ、今は俺もハイスペックなんすけどね、ありがとうございました・・・・相当キてんなあ俺。ハア、帰ったらヴィータちゃんのアイスを美味しくいただこう）

取り留めもなく考えていると、横断歩道に差し掛かった

歩道で信号を待つ人垣、夏休みでお出かけ中だろう親子連れや、ス
ーツを小脇にカッター姿で営業周り中だろう企業戦士達

その中に、先ほどの少女も居た

まあ、それがどうしたという話であるわけだが

横断歩道で待たされ、立ち止まると空気が停滞し、余計に暑く感じる

「フウ・・・」

車の行き来など見えていても暑さは緩和されない
ザフィーラはせめて青空で爽やか成分を補おうと上を仰ぎ見ると

「ん・・・？」

揺らめく影が目に入る

ソレはビル風に煽られたのか、ワイヤーとの接触部がギシギシと音をあげていた

見るからに、危険だ

（どう見ても鉄骨です、ありがとございました・・・ッて!?!?これは・・・!?!?）

その瞬間ザフィーラはニュータイプばりに脳裏に電撃が走った、気がした

（『街中で事故　キヤー！　おっと大丈夫かい？　ドッキンコ！吊り橋効果でアナタにメロリン!!』フラグッ・・・!!テンプレ・・・!圧倒的っ、テンプレっ・・・!）

ざわ・・・ざわ・・・

ブツンッ!!

「キヤー!?!」

「うわっ！？逃げろっ！」

「あ、危ないっ！」

「ひいっ！？」

いらんこと考えてたらホントにざわざわしだした
下の人々が気付いたようだ

皆がパニックながらも散り散りに逃げ出してゆく

（つと、俺も逃げねーと！！）

ザフィーラは人波に従い踵を返して後退する

ドンッ！

「うわぁ！？」

「！！君！大丈夫！？」

「あ？」

その声に後ろを見れば、母と切り離され、人波に押され転んだ子供
に先の少女が駆け寄っていた

彼女は今し方まで抱えていた本を地面に打ち捨て、すぐさま子供を抱き起こす

実に素早い

しかし、彼らの頭上には已然として迫る、鉄骨

（マジでテンプレかぁアーイーッ!?!）

またしても踵を返し、ザフィーラは二人へと一気に距離を詰める

間に合わないと思ったか、少女は子供だけでも助けようとしたようで、その腕でぎゅっと掻き抱いた

同じ様に、堅く目を瞑った

今にも鉄骨が彼らにぶち当たろうとした、その刹那

「（ッテ、オオアアアア間に合えィッ!?!?!）ぬんっ!?!」

がつし、と、二人の腕を掴み引き寄せた

地に跳ね返った鉄骨で怪我をしないよう、二人をグッと抱え込む

ここらへんの動きはオートでやってます

さすがザフィーラボデイ、護ることにかけては妥協しない職人の業
！！

ドンガラガッシャンピッシャンガッシャーン！

（セエーッフウ！！）

紙一重で鉄骨が地に叩きつけられ、轟音と塵風が巻き起こった

（あ）

と、その風がザフィーラの手ぬぐいを弾き飛ばす

「（ホオアッー！！！！）！！？」

「あ、あの、ありがとうございました・・・」

「（まずいまずいぞまずいぜまずいぜよ!!?・・・へ、変態はイヤやゝゝつ!!）クウッ!!?」

懐の存在の安否よりも自身の変態認定を恐れ、ザフィーラは二人を地面に降ろすと手ぬぐいを拾い、脱兎のごとくその場を後にした

この間五秒

さすがは歴戦の土ヴォルケンリッター

見事な撤退であった

「あつ!・・・行っちゃった・・・」

野次馬をかき分け去る背中を、少女はじっと見つめていた・・・

とまあ、こんなことがあったわけで（マジメな子だなあ・・・
っと、そっぴや、この子なんか引つかかるな・・・なんか、思い出
したら取り返しがつかなくなりそうな・・・）

夏なのに、薄ら寒い感覚が脳裏を過ぎり、ザフィーラはいささか不
安になってきた

黙った彼を不思議がり、少女は首を傾げる

「？あの・・・？」

「（フォッ！？）あ、ああ、すまない。謝ることはない。大したこ
とはしてないさ」

「いえ！そんなことないです！私も、あの子も助けていただいたん
ですから！」

「（なんだろなあ、なんだ、この漠然とした不安は・・・）そう、
か。何にせよ、ケガがなくて良かった」

「はい。あの、良かったらお礼させてもらえませんか？」

ここで、ザフィーラの頭にイヤな予感が過ぎった

彼は後に語る

『ええ、この時点で少し「ヤバイ」と思ったんですよ、はい。何がって、それは解らなかったです。ただ、「ヤバいな」って・・・』

頭の中の小さな警鐘を無視し、言葉を繋げる

「礼？いや、そこまでしてくれずとも・・・」

「いえ！是非させてください！私の家はこの近くで喫茶店やってるんです。そこまでお越しただければ！」

「き、喫、茶店・・・！？」

頭の中の警鐘が現在進行形で最大音量になった

（海鳴・・・喫茶店・・・三つ編みメガネ・・・！？

って、ワアアアアアアア！！？

ヤバいのキターーーッ！？何でこんな大事なことを忘れてんだバカーーーッ！

俺のバカーーーッ！！

この、このメガネっ娘は、『あ の 一 族 』・・・！！！）

ダラダラと暑さ以外の要因で流れ出した汗を拭うことも忘れ、ザフイーラはゴクリと唾を飲み、意を決した

「・・・そう言えば、君の名は、なんと言った？」

「あつ、申し遅れました！私は 高町 美由紀 って言います！」
『翠屋』 って喫茶店なんですけど、ご存じですか？」

『高町』

『翠屋』

(地雷・・・踏んじやった・・・orz)

こうして彼は、家族以外の『原作キャラ』との邂逅を果たしたのであった

「あの、お兄さん、聞いてます?」

「・・・ああ、うむ・・・申し訳ないが、丁重にお断りさせていた
だこう」

「え?」

気力を取り戻したザフィーラは、なんとか体勢を立て直し少女
美由紀に向き直った

ここで流される分けにはいかない・・・!!

その決意を込め、ザフィーラは思い切って断った

美由紀は一寸驚くも、すぐにわたわたと手をパタつかせた

「あ、お忙しかったですか!? スイマセン、勝手なこと言って・・・
」

(ぐ、ぐぬう・・・)

善意からの言葉を断った上、美少女にシュンとした顔をさせるのはザフィーラのポリシーに反するのだが、ここは非常に徹するのが金である

「すまないな」

「いえ、無理を言ったのはこっちの方ですから」

ザフィーラの謝罪に、ニコリと微笑みを返すメガネっ娘

嗚呼、どうしてこの世界にはいい娘さんが多数存在しているのだろう？

より一層心苦しさが増したザフィーラ

「なんだかお昼の邪魔もしちゃったみたいだし・・・本当にありがとうございました。それじゃあ私はこれで・・・」

「・・・翠屋、と、言ったか？」

気付けば、ザフィーラは立ち去ろうとしていた美由紀に、声を掛けていた

「機会があれば、今度寄らせていただくこう。その時は、お勧めでも紹介してくれないかな？」

「！！はいつ！ぜひお越しくださいね！」

それじゃ！と、再び、今度は嬉しそうに帰ろうとする美由紀だったが、何かに気付いたように「あ」、と声を上げた

「あのう、お名前、伺ってもいいですか・・・？」

「ん？ああ、構わんよ。私は、ザフィーラ・八神だ。宜しく、美由紀嬢」

「じ、嬢なんてそんな・・・！？ぎ、ザフィーラさんですよー！あの、ホント、ありがとうございました！！それじゃ、また！！」

「ああ、また、な・・・」

照れながらも挨拶をして走り去ってゆく美由紀

ザフィーラは、そんな彼女を遠い眼をしながら見送ったのであった

（なに流されてんのよ、俺ぁ・・・orz）

数分前と同じベンチに座りながら、ザフィーラは一層淀んだ空気を纏っていた

昼下がりの公園に、作業着の青年がこんな空気を醸しているのは甚だ場違い極まりなかったが、ザフィーラはそんなこと気にしていられなかった

先ほどの自分の愚行にほとほと沈んでいたのだ

（なんて約束しちゃってんのよ、俺ぁ・・・翠屋突撃とか、バカなの？死ぬの？いくら美由紀ちゃんに悪い気がしたからって・・・さつき流されねえって決めたばっかだろ・・・）
くそう、八方美人な日本人体質が憎い・・・）

ハア、と深いため息を一つ

「・・・仕方ない、月が明けたら、平日の昼間にでも行くか」

そうすれば魔砲少女とはエンカウントしないだろう

戦闘民族らしい父上殿や兄上殿には力チ合うかもしれないが、少なくともそれだけで済むかもしれない

不安は募るが、約束した手前行かないという選択肢は考えつかなかったザフィーラであった

「ハア・・・(さっさと食って帰ろう・・・)」

ザフィーラはもともと、再び箸を進めだした

(アレ、なんだろう、なんだかさっきよりしょっぱいぞ？ハハ、ハハハ・・・)

続く

幕間之一 『高町美由紀の遭遇』 (前書き)

ちよつと勘違い要素を入れたつもり

いや、そうでもないです

幕間之一 『高町美由紀の遭遇』

その日、私はその青年に惹き着けられた

カチ込め！ザフィーラさん幕間之一 『高町美由紀の遭遇』

とある夏の日

日差しが弱まる兆しも見せず、人々が辟易する中

彼女、高町美由紀は図書館に立ち寄っていた

彼女は濫読家でもあり、見た目通りに文学少女然とした一面も持っていた

この日は実家の喫茶店に手伝いにはいる予定もなく、暇だったのだ
丁度良いとばかりに図書館へと足を運び、午前中を読書に費やした

（この本探してたんだよね〜！フッフ、かえって早速読みましょう！！）

お目当ての本が入荷されていて機嫌も良く、いつもより足取りも軽く帰宅の徒についていた

彼女の手には、手持ちの鞆に入りきらなかったその他の書籍　どれもハードカバーの品であり、実に重量感たっぷりな物ばかりも抱えられているのだが、それすらも苦にならないようだ

眼鏡に三つ編みから強靱なイメージはうけない線も細く、華奢な体躯と言えるだろう

ならばなぜ、彼女は『楽々と』歩けているのか？

こう見えても彼女は武人であつた

生家に伝わる古流剣術・『御神流』

父と兄、そして彼女を含めた三人が継承する、小太刀二刀取りの剣法

その使い手として、修練をその身に刻んできた

現に、今朝も早朝の内に鍛錬を終えてきている

その上、いかにも文系な見た目に反し、彼女の運動神経は良い方である

彼女の末の妹とは比べるまでもなく、美由紀の身体能力は優秀といえるレベルであった

美由紀は、軽い足取りのままに歩道を歩いていた

近隣ではビル工事をしているためか騒音が気になるが、手の内にある待ちかねていた本の内容を考えていれば、あまり気にもならない

ああ、早く読みたい

華の女子高生が、夏休みだというのに剣だの本だの、実に色気がない話ではある

美由紀自身も、恋人が居る兄や、いつまで経っても新婚気分な父母を見ているため、そういった願望が無いわけではないのだが、

『これまで良い縁に恵まれていないのだ』

そう自分に言い聞かせていた

あまり気にしても虚しくなるだけであるし、最近はなるがままに任せようと消極的なスタンスになっている

とまれ、今の彼女の思考は、本のことで大半が占められていた

（つと、危ない危ない）

ふと、美由紀は信号が赤になったことに気づく

半ば意識をトバしていたため少し焦りながらも、横断歩道で待つ人垣に自分も身を列する

（・・・暑いなあ）

ジリジリとコンクリートが熱を運び、ビルのガラスが陽光をギラギラと反射する

いくら鍛錬で鍛えられた心身とはいえ、暑いものは暑い

美由紀は、その気怠い空気に辟易しながらも、信号が変わるのをただぼうつ、と立って待っていた

「フウ・・・」

隣で、誰かが溜息をついていた

その人物もこの暑さに辟易しているのだろう

その気持ちは良くわかる

ちよつとした共感^{シンパシー}

少し気になったので、その人物がどんな人なのかちらりと横を見やると

（おお・・・大きい人だなあ）

それは青い作業着に身を包んだ、逞しい男性
青年と呼べる年頃だろうか が、空を仰いでいた

身の丈は180?程だろうか?
160前後の自分と比べると大抵の男性は自分よりも大きいのだが、その人物はそれでも少しばかり大きく感じた

恐らく捲っている袖から見える筋肉の付き方のせいだろう

父や兄も上背はあるが、どちらかと言えば細身で、鋭く研ぎ澄ました筋肉の付け方をしている

だが、隣の青年の場合はガツシリとした、逞しいと思える筋肉である
よく焼けた肌や格好から想像するに工事現場で働いている人なのだろう

美由紀の周りには余り居なかったタイプの風体だ

「・・・ん？」

取り留めもないことを考えていると、件の青年は上を見上げたまま
何事か呟いた

（なんだろう？）

美由紀も気になり、上を向こうとした瞬間

ギシリ、と、嫌な音が鼓膜を震わせた気がした

（ッ！何！？）

バツと上を見上げれば、今にも切れそうな

否、たった今切

れたワイヤーから解き放たれた鉄骨が、自分たちの頭上に墜ちてこようとしていた

「キヤー！？」

「うわっ！？逃げろっ！」

「あ、危ない！」

「ひいつ！？」

次々と異変に気づき、散って行く人垣

美由紀もこれは危険だと理解し、距離を取るべく足に力を込める

ドンッ！

「うわぁ！？」

（ッ！？）

すぐ後ろで、何かが倒れる音と、少年の悲鳴が聞こえた

その音を聞いただけで状況を理解した彼女は、次の瞬間には手に抱

いていた書籍達を打ち捨てていた

「君っ！大丈夫！？」

少年に駆け寄り、すぐさま抱き起こす
今すぐ離れないと巻き込まれる危険がある

しかし

（ッ・・・！）

剣の稽古で鍛えられた彼女の体は、理解した
理解してしまった

一旦制動を掛けてからの拳動だったため、踏み込みに1テンポ遅れ
が生じたのだ

（間に合わないッ・・・！！）

反射的に掻き抱いた少年だけでも助けようと、突き飛ばすために腕
に力を込める

それでも、彼女はただの女子高生でしかない

命の危機など、瀕したことがあるわけもない

故に、『死ぬかもしれない』恐怖から、思わず目を瞑ってしまった
彼女を責められる者は居ないだろう

（ああ、死んじゃうのかな・・・？）

鉄骨が、彼女達に直撃する

その刹那

「ぬんっ!!」

グイツ、と、腕に力が掛かる

（えっ？）

力強い声と共に、自分の体が誰かの腕に包まれるのを感じた

ゴッッシャアアアアン！！！！

（ビクッ！）

すぐ側に鉄骨が落下したと思しき轟音が響き、美由紀は思わず身を竦める

だが、痛みはない

塵風が巻き起こるも服を汚しただけで、身に異常はなかった

ふと視線を上げれば、青い作業着と浅黒い肌が目に入る

（あつ、この人・・・）

美由紀は気づいた

先の青年の逞しい肉体が、それらから彼女と少年を庇ってくれていた、と

まるで、『盾』みたい

彼女は、そう思った

「!!!?」

青年が何かに気づいたような、何処か狼狽えたように辺りを見回す

その顔を、相貌を垣間見て、美由紀はドキリとした

先ほどはバンダナで隠れていたため解らなかったが、その髪色は白に近い銀

そして浅黒い肌によく映える紅い瞳

顔立ちも端正、と言うよりは精悍な、凛々しいものであった

一寸見入るも、すぐにはつとする

先ずは礼が先決だと、美由紀は声を掛けた

「あ、あの、ありがとうございました・・・」

「クッ・・・!!!?」

しかし青年は美由紀の言葉に応えることもなく、二人をそつと地に

下ろす

そしてすぐさま、まるで何か大切な物を今にも失ってしまおうと言わんばかりの焦燥を身に纏いながら、人垣の向こうへと走り去っていった

「あつ！・・・行っちゃった・・・」

美由紀はしばらくその背を呆然と見ていた

「う、ううん・・・」

「あつ！君、大丈夫だった？怪我はない？」

あまりの轟音に一瞬意識が飛んでいたらしい少年の呻き声が耳に入り、美由紀はすぐに少年の無事を確認する

同じように彼の青年に護られた自分に傷一つ無いのだから、大事無いは思われるが、念のためである

「あ、うん。大丈夫、ありがとう、お姉ちゃん・・・」

「そう・・・ふう、良かったね」

「ユウイチ!!」

「あっ! ママッ!」

後ろの人だからから、少年の母と思われる女性が、少年の名を呼ぶ

繋いでいた手を一瞬とはいえ離れたがために息子に危機が迫った

母としては辛いことだろう

少年に何もなくて本当に良かったと、美由紀は微笑んだ

「ありがとうございます!! 息子を助けていただいて! 本当に・・・!!」

女性が美由紀に気づき、手を取って深く礼を述べてくる

「い、いえ! 私も助けてもらった側なんです! だからそんなお礼なんて・・・」

「それでも! それでも言わせてください!! 本当に、ありがとうございます!」

ここはあまり断りすぎても良くない

美由紀は素直に礼を受け取った

「でも、あのお兄さんが助けてくれたんです。私も、お礼もちゃんと言えなかったんですけど・・・」

「まあ・・・その方にも、感謝してもしきれません。ほら、ユウイチ、お姉さんにもう一度ちゃんとお礼言いなさい」

母に促され、母に抱きついてた少年は美由紀に向き直った

「うん！お姉ちゃん！ありがとうございました！！」

「えへへ、どういたしましてー」

素直な謝礼に、美由紀は照れくさくなり、軽く鼻の頭を掻いた

その一方で、彼女の脳裏には、先の青年の姿が焼き付いて離れなかった

あれから事故現場は野次馬で溢れ、より騒然としていた

ビル工事の工員達も、あまりの失態に顔を青ざめさせながらも何度も頭を下げ、真摯な対応を約束すると言っていた

美由紀としては、確かに危なかったがもう過ぎたことであつたのでそこまで深く追求はしなかったのだが、申し訳ないと向こうが思うなら、好きにさせた方がいいだろう

美由紀は対応を終えると、埃まみれになっていた本を拾い集め、帰途についた

先ほどの事故を目撃した周囲の人々は、少年を助けようとした少女と、

更に颯爽とその二人を助けた青年のこともしっかりと見ていた

少女の方はその場に残ったが、一番の功労者たる青年は忽然と現場から姿を消したのだ

白昼の悲劇を防いだ、その勇敢な『青い青年』

下手に謎めいている物だから、『青い青年』の噂は本人の預かり知

らぬところで密かに海鳴に広まっていったのだった・・・

「はあ・・・」

美由紀は、シャワーを浴び終え、寝室のベッドに横になっていた
すでに夜の帳も降り、あとは寝るだけであるのだが・・・

「どんな人なんだろう、あの人・・・」

事故の話を家族に漏らせば、一家総出で心配された

父や、母、兄は勿論、妹までも怪我はないか、異常はないかと問う
てきた

確かに、命の危機に瀕したと言えはこのぐらいは心配するだろう
なんといっても大切な家族なのだから

その気持ちが、優しさが感じられ、怖い目にあっただけなのに、

美由紀は嬉しささえ感じられた

それらは有り難いことなのだが、特に末妹からの心配は強く、不安そうな瞳でこちらを見やるものだから思わず安心させるために言ってしまったのだ

『大丈夫だよ！ちょっと危ないかな？』と思ったけど助けてくれた人が居たの。お陰で無傷なんだから！』

と

となれば『どんな人か？』『その人は大丈夫だったのか？』『お礼をしなくては』『出来れば直接礼を言いたい』と、色々話は繋がるわけで

人が良いことが売りである高町家において、一家の一人の恩人は家族の恩人である

その人物がすぐに立ち去ってしまった、と言えば皆それなりに残念がったが、同じ町にいるならばいつか巡り会える、再び会える日もあるさ

と、結論に相成った

そうして、夜も更けたことだし、今へと至ったのである

美由紀は今日の昼間にすこし関わりを持った人物を、改めて思い浮かべた

鍛え上げられた躯

白銀の髪

紅の相貌

褐色の肌

そして、精悍な顔つき

自らの兄も、身内鬚眉なしに美形だといえるが、件の彼もまた、美形であった

別に自分が面食いであるとも思っていないが、やはりあそこまで特徴的な容姿だと、目がいつてしまう

それを間近で

腕に抱えられた状態で直視したのだ

何より、一人前ではないといえ、御神の剣士である美由紀が間に合わないと思った距離を一足で詰めたのだ

それこそ、まるで疾風の如く

考え出せば、気になって仕方がないと思えてくる

だからこそ、こんなにも心に焼き付いているのだろうか？

「・・・とりあえず、今度あえたらキッチンとお礼を言おうかな。うん、そうしょ」

自らにそう決意して、美由紀は布団をかぶった

確信はないが、なぜか、彼とまた近い内に会える気がしたのだった

（『女のカン』・・・て、奴かな？

そういえば、あの人、名前何ていうんだろ・・・？）

何の因果が一週間後、彼女の目的は、青年の名を知ること共に達成された

このカンが正しかったことは、僅か一週間で証明されることになるのだが

現時点では、美由紀すらも、知る由もなかった

果たして、これは

一時の巡り合わせなのか？

何かが始まる兆しなのか？

それは、誰にも、解らない

続く？

第六話 『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる己を恥じる』 (前書き)

はやてのキャラが怪しいことに

第六話 『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる己を恥じる』

皆さんこんにちは

ザフィーラ、毎度おなじみザフィーラでございます

最近は夏も終わりが見え始め、幾分が過ごしやすい気候に成りつつある気がするようないような・・・

それはともかく

ワタクシただいま海鳴商店街にてお買い物としけこんでいましたらば

カロンカローン！

「む？」

「おう！おめでとうお客さん！お見事二等賞だよお！」

ふむ、なにやら当たってしまったようだ

カチ込め！ザフィーラさん第六話 『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる己を恥じる』

八月末日

「あ、ザフィーラお帰り〜・・・って、何なんそれ？」

「ただいま帰りました主。これはですね。商店街で買い物をしていたら手に入りました」

「はえ？・・・ああ、そういえば今つて福引きやつとったね。じゃあザフィーラがそれ当てたん？すごいな〜」

家に帰るやいなやはやてに出迎えられたザフィーラは、担いでいる巨大な箱について説明した

冒頭で語ったように、

『海鳴商店街主催の残暑に負けるな！ドッキリワクワク福引き大会！〜』

なるイベントが開催されており、たまたま買い出しに出ていたザフィーラが見事二等賞を当ててきたのだった

夕飯の買い物は普段はシャマルなどの仕事なのだが、この日はザフィーラは仕事が入っておらず暇であり、『では今日は私が行こう』

と相成っていたのである

服装は黒いジーンズに普通のシャツ、青いバンダナのいつもの三点
装備

180?を越える外人のお兄さんが買い物かごを片手にネギを物色
している姿はシュールではあったが、そこはやはりグローバル海鳴
近所の奥様方も慣れたもので、逆にニコニコと見守っているほどだ
微笑ましくはあれど、特段珍しい光景ではないらしい

「おーい！はやて何して・・・あ、ザフィーラ！遅いぞ！」

奥から顔を見せたヴィータがザフィーラに気づく

すると、やはり背中の箱にも気付くわけで

「なんだソレ？新手の修行か？」

「確かにそれなりに重いが・・・ふっ、この程度では私には負荷と
は言えん」

「ザフィーラは力持ちさんやな」

「・・・いや、言い出したあたしが言うのも悪いけど、なんの話だよ」

箱を担いだままキリリと笑うザフィーラと、どこかずれた讃辞を送るはやて

そんな二人にヴィータは脱力せざるを得ない

最近、盾の守護獣のキャラクターが解らなくなりつつある気がしてならなかった

ヴィータは気を取り直し再度尋ねる

「で、なんなんだよ、ソレ？」

「これはな・・・」

ザフィーラは玄関先にドツカリと箱を置くと、その包みを解いていた

「わあゝ」

「へえ・・・」

それは自転車であった

俗に言うママチャリ、
そして子供用自転車の豪華二点セット

題して『海鳴サイクル提供：親子でBUNBUNサイクリングせつ
と』！！

二等賞というだけあり、中々奮発したものだ

さすがは海鳴商店街

お客様の笑顔が第一です！！by商店街組合

というだけはあった

「何だっけコレ？乗りもんだよな？」

「そつやよヴィータ、これは自転車言っんや」

今までの文化圏にはなかったものであり、当然乗ったことがなく知識もないヴィータに、はやては教えてやる

ママチャリの方は男性でも乗れるように、ブラウンを基調としたユニセックスなデザインとなっている

一方の子供用自転車だが

（ククク、これは是非ヴィータちゃんに乗り回していただきたいね

〜！）

内心でニヤニヤと笑いながら、ザフィーラが思わずそう思ってしま
うような一品だった

ピンクに近い赤を基調とした可愛いフレーム

小洒落た装飾の施されたハンドル

愛らしいキャラクターのプリントされたサドル

細部まで行き渡った意匠が、乗り手への深い愛を感じさせるこだわ
りの逸品 ！！

ママチャリが男女共用なのに対し、こちらはやけに女の子向
けではあるが・・・それは仕様

気にしては負けだ

「ふーん・・・ん？・・・！！これは！」

興味深げに眺めていたヴィータだが、そのデザインを見ているうち
に、あることに気づいたらしく驚愕の表情を露わにする

そんな彼女に対し、ザフィーラは、今度は隠すことのないニヤリと

した笑みを見せる

（フッフッフ、気付いたか・・・）

ニヤニヤしているザフィーラだが、ヴィータはそんなこと気にしてはられない

なぜなら

「『のろいうさぎ』だっ！」

サドルにはでかかと『のろいうさぎ』がプリントされており、よく見れば、全体的に赤と黒の配色が、かのキャラクターを彷彿とさせる

そう、その自転車は、大人気キャラクター『のろいうさぎ』とのタイアップ商品だったのだ
！！

「うおー！乗ってみてー！！」

「ヴィータはほんまにのろいうさぎ好きやねー？」

「うん、うん！はやてが最初に買ってくれたやつだもん！」

ハートにギガストライクだったらしく、目をキラキラトさせながら

嬉しそうに語るヴィータ。

はやても、ザフィーラも、そんな様子が微笑ましくてならなかった

ザフィーラの方は、気分はすでにはしゃぐ娘を諫めるお父さんである

中の人の年齢的には、ヴィータぐらい（外見年齢）の娘がいても不自然ではなかったため、その感慨もひとしおであった

「ハハハ、乗るのは構わんが、今日はもう遅い。明日にしよう」

「そやで、ヴィータ。別に自転車は逃げへんよ」

「えー・・・わかったよ」

興味津々といったヴィータをなだめ、ザフィーラは片手に持ったまま買った買い物袋をはやてに渡す

「では主お願いします。私はこれらを外に置いてきましょう。ここにあっては少しかさばりますから」

「はい、じゃあ今からご飯作るからね。ほら、ヴィータ、今日の晩ご飯は久しぶりのお肉やで」

「ほんとに？よっしゃあ！」

受け取ったはやてはヴィータを引き連れ、車椅子を操り台所へと消

えていった

（ヴィータちゃん、なんか感情のままに生きてるなあ・・・）

原作ではシビアな戦闘者としての一面も強調されていた赤いロリツ子だが、この家での生活、とくにはやての前ではあんな風に喜怒哀楽を素直に表現する

そのことに、ザフィーラは少し驚いていた

ザフィーラには前回までの主の『記録』はあっても『体験』はないためよく分からなかったが、今まではよほど抑圧されていたようだ
ヴィータ本来のハツラツとした性格が、一気に解放されているようにも思える

これも全てははやてのお陰なのか？

（まあ、可愛いからいいや）

結論：可愛いは正義

「・・・さて、縁側辺りに置いておくか」

どうせ明日になれば使われるのだ
物置にまでしまい込む必要はないだろう

残されたザフィーラは自転車を箱に詰め直すと、とりあえず通行の
邪魔にならない場所へと運ぶのだった

「ザフィーラ、気になったのだが」

「ん？どうした、シグナム」

夕飯も終え、各自思い思いに過ごす団欒の時間

食卓でいつも通り茶をすするザフィーラに、同じく茶をすすっていた
シグナムが不思議そうな顔で居間の方を見ながら、ザフィーラに
問いかけてきた

その視線を辿ってみれば、問いの内容がわかった

「ヴィータのことか？」

「ああ、先ほどから、やけに機嫌がいいじゃないか。何かあったの
か？」

「ああ、あれはな
」

シグナムはザフィーラが帰宅した30分後ほどに帰宅したため、玄関でのやりとりを知らないし、ザフィーラが庭の方に回って置いていた自転車も見えていなかったため、

ヴィータのご機嫌の理由に疑問があるようだった

一連の流れを説明してやれば、シグナムも成る程、といった顔になる

「自転車か。ヴィータもそんなものに心惹かれるような奴だったのか」

「今までが今までだ。本来のアイツは、好奇心の強い質なのだろうさ」

はやてと一緒に居間でアイス片手にテレビを見ているヴィータは、いつになくご機嫌だ

「いいじゃないの。新しい物に触れるっていうのは、とっても楽しいことだもの」

そんな姿を眺めながらの親のような二人の会話に、洗い物を終えたシャマルが参加してきた

シャマルは自分の分の湯飲みに茶を注ぐと、シグナムの隣の席に座る茶をすすり、のほほんと笑いながらヴィータを見るその目は、まるで慈愛に満ちた母のごとく

「確かにこの地で目覚めてからは、新しいことの連続だったからな」

「私たちの見てきた世界は広くはあったが、逆に狭いものでしかなかったのだと改めて思うな」

「そうねー。本当に・・・最近はみんなも、この生活を楽しんでいるものね。勿論私もだけど」

のんびりと談話に花を咲かせる大人組

隣室の二人と比べると、やはり彼ら三人のまとう空気はまったくとしたものである

（はふう・・・落ち着くわあ・・・）

美女二人と食後の一服

女日照りだった前世からは考えられないリア充生活にも慣れてきたザフィーラだった

「む？その口振りだと何か趣味でも見つけたか？」

シャルの言いぐさに、シグナムが気がついたように聞いた

すると、シャルはにんまりと笑いながら答える

「そうなの！最近だね、お料理だけじゃなくてお菓子も作ってみようかななんて考えてるのよ」

「・・・それは、うん。程々にな・・・なあ、ザフィーラ」

「何故私に振った烈火の将。その程度の敵も捌けぬようでは、炎の魔剣が泣いているぞ」

「くっ・・・そこまで言われては引き下がれん！ザフィーラ、明日は暇か！仕合うぞ！！」

「何故そうなる・・・仕方ない、受けて立とう・・・と、言いたいところだが。生憎、明日は昼から仕事だよ、シグナム」

「・・・二人とも、何の話をしてるのかしら？」

こうして、夏の夜は更けていった

翌日・午前

「・・・ふむ、こんなものだな。乗っていいぞ、ヴィータ」

「おおー!!」

「良かったなあ、ヴィータ」

庭先に出た八神家の面々　　といってもザフィーラ、はやて、ヴィータの三人だが　　は前日の予定通り、自転車を弄くっていた

新品特有の堅さなどをザフィーラが軽く整備してやったのだ

前世知識、というか経験で、自転車の整備ぐらいは出来るザフィーラである

子供用のチャリ整備など、朝飯前

付属していた予備部品や『とあるパーツ』は今のところ出番がないため、箱の中だ

（アレ？よく考えたら・・・）

いざ乗らんと自転車に跨るヴィータだが、ザフィーラはあることに気付いた

「よおーし・・・って、どう乗るんだコレ？」

（まあ、やっぱそうだよなー）

跨ることは跨った、
が、ヴィータはそこから先は知らなかったらしい

うん？と首を捻ったヴィータに、はやてが一肌脱ぐ

「その足下にあるソレ・・・そや、そのペダルに足置いてな。思い切って漕いでみ」

「これ？よっし、解ったよはやて！見ててよ！」

丁寧に教えてやるはやてだが、端で見ていたザフィーラは、10秒
先が予測できる気がした

「おーりゃっ！って、うわあっ！？」

ガッシャコーン

走り出して一秒

見事にコケた

（ヴィータちゃんよ・・・君は、期待を裏切らない子だと・・・お兄さんはそう信じていたよ）

見ていて解るほどに力んでいたため、疾風の如き蹴り出しは、一瞬にしてバランスの崩壊へと至る

その結果、眼前で繰り広げられたのは、美しき放物線を描きながら大地へと熱い抱擁を交わすヴィータ、という光景だった

「あちゃあー、また派手にいったなー。ヴィータ、大丈夫？」

「いてて・・・なんだコレ！？ギガ乗りにくいです！！」

地団駄踏み踏みなヴィータに、ザフィーラは苦笑を漏らしつつも自転車を起こしてやった

「初めてだからな、そんなものだろう。慣れるまで、練習あるのみだ」

「・・・なんだよザフィーラ。やけに上から目線だな。オメーは乗れんのかよ？」

そんなザフィーラの余裕が気にくわなかったのかジト目＋上目遣いで睨みながらぶっすりするヴィータ

（そんな可愛いことをしても、お兄さんのライフポイントが回復するだけですよ？）

表情は苦笑、内心は緩みきったザフィーラの思考

しかし気付かれないのならどうということはないのだよ！

「ああ、乗れるとも」

「なあっ！？マジかよ！？」

「無論、マジだ」

自身と同じく闇の書の守護騎士の一柱であるはずのザフィーラが、未知の乗り物に乗れるという事実が、ヴィータには衝撃的だったようだ

な、なんだってー！と言わんばかりに大きな青い目をぱちくりと見開き驚愕の意を示すヴィータに、ザフィーラの胸キュンポイント（死）はもうイケイケだ

（まあぶっちゃけ当たり前のように乗れるんだけども・・・）

確かに、いきなり初見の乗り物を理解するなど、所詮狼のザフィーラがすれば怪しいだろう

ザフィーラは適当にカバーすることにした

「仕事場の同僚がな、乗っていたんだ。それを借りたことがある」

「お前、街中でコケたら危ねーだろ」

どうやらヴィータはザフィーラも初めはコケたと思っているらしい街中で、いきなりガテン系の青年がチャリで転倒すれば、それはもうただの事故ではないか？

だが、それはあり得ない仮定だった

（フツ、見くびられたものだな・・・自慢ではないがこのザフィーラ。

『自転車に乗る』という一側面において、敗北はないと言っておく！）

何故ならばッ！！！

何を隠そう！

ザフィーラの中の人の趣味はッ！！

週末に敢行する、my自転車でマンガ・グッズ探しツアーだったのだッ！！

どうでもいい話

「私が、無様に転倒するだけでも？」

「なっ！？じゃあいきなり乗れたのかよ！？何だよソレ！」

「ザフィーラは器用やね。ヴィータも練習せななあ」

「うう、ちくしょー・・・」

ニヤリとニヒルに笑みを浮かべてやれば、再び衝撃を受け、ほぞを噛むヴィータ

ザフィーラに負けたことがよほど悔しいらしい

「ハハハ、そう拗ねるな、ヴィータ」

「拗ねてねーです・・・」

「まずは感覚を掴まねばな。では、『取って置き』を用意してやろ
う」

「『取って置き』？」

「まあ少し待っている」

そういつて箱を漁るザフィーラが取り出した物は、『例のブツ』

「何する気だよ？」

「あゝ、私ちよつと予想できたわゝ」

「何なのさはやて？」

ドライバーとレンチを駆使してガチャコラと作業をするザフィーラの背中を見ること数分

「できたぞ」

ヴィータは満足げに頷くザフィーラに促されるままに、自転車を見る

そこには

「何これ、ちっこい車輪？」

燦然と輝く、二つの補助輪

ヴィータは感じた

彼女は自転車や、その付属品なんかに対して知識は明るくない

だが、直感で感じ取ったのだ

『コレ』は、なんか気に入らない

補助輪のフレーム部分には、のろいうさぎの愉快的仲間の一入、
にんきょうひよこ』がデデンと構えている

眼帯にサンマ傷、三白眼でこちらを睨むチャーミングなキャラクタ
ーだ

可愛いことは可愛い

しかし、それでも何故か気に入らない

にこやかな、あくまでにこやかなザフィーラと、予想通りらしく、
やっぱりな」などのたまうはやて

二人の視線が、どこか微笑まし気なのも気に入らない

ヴィータは何故か沸き上がる内心の不満を隠すことなく、声に乗せた

「どーいうこったよ？」

「コレは、補助輪という。自転車に乗るために修練する幼子達が、
慣れるまで使用する道具だ」

おさな
幼子？

幼児？

つまりは、ガキか？

「あたしはガキじゃねーっ！！」

ヴィータは思わず激怒した

しかし二人はそんな彼女をまあまあと宥め賺し、優しげな口調で語る

「ほらほら、私も付き合うから。せつかくええ自転車なんやし、ちゃんと練習しよな？ヴィータならすぐに補助輪もとれるよ！」

「うむ、主の言うとおりだ。小さいことは気にするな」

「く、ぬぬぬ・・・」

葛藤に次ぐ葛藤

ヴィータの中ではあまり譲りたくない一線

しかしこうまでお膳立てされては、逆に乗らないなどと言い出せない
主と仲間の生暖かい視線を一身に受け、今にも頭を抱えこみだしそ
うなヴィータだったが

「ああーっ！解ったよ！乗ってやらあー！！ベルカの騎士に1対1
で負けは無え！こんなもんすぐに乗りこなしてやるあーっ！！」

色々とふっきつたらしい

意気軒昂に自転車に取り付くヴィータ

「うむ、その意気だ」

「特訓やでヴィータ！！気合いや！やってやれんことはないんやで
く！

あはは、なんか気温が一気に上がった気がするな」

「熱血という奴でしょう、主よ」

「なんかちゃう気もするけど、まあ、ええよね。ほら、ヴィータフ
アイト」

「おお！見てろよはやてー！！っおわあー！」

ガシャツーン

「ありや、補助輪付きでコケるんや。ヴィータも中々やなあ」

再びの転倒に、またも綺麗に放り出されるヴィータ

はやては既に応援モードらしく、優しい気性の彼女にしては、ヴィータに駆け寄るでもなく冷静に原因分析に努めていた

変なスイッチでも入ったのだろうか？

夏の暑さは、残暑とはいえまだまだしつこいようだ

そんな光景を見てみると、ザフィーラはそろそろ時計が昼頃を指しているのに気づく

（あ、もうこんな時間か・・・ヴィータちゃんは、大丈夫そうかな）

時計から目を離し、ヴィータを見れば、再度トライしているところだった

負けん気の強い彼女のことだ、本気で今日中に乗りこなすまで止めないだろう

「主、私はそろそろ時間ですので、これにて。申し訳ありませんが

後をお任せします」

「あ、もうそんな時間か。お仕事頑張つてな」

「はい、では行って参ります」

「とうりゃー！っすわっ！？」

ガッショーン

「ヴィータ！背筋が甘いで！もっとピンと伸ばすんやー！」

「っく、オーライだぜはやてー！ぬおりゃあー！っにゅあー！？」

ズッシャーヌ

熱血幼女達の燃え上がる激闘の軌跡：修得篇をBGMに、ザフィーラは今日も工事現場へドリルを振るいに行くのだった

後半へ続く

第六話 『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる己を恥じる』 (後書き)

後半へと続きます

まだまだ夏は終わらないぜ

第七話 『この私がスロウリィ!? ああーりえなあーいつ!-!』 (前書き)

はやてキャラ崩壊

いや、属性ねつ造のつもりが・・・何故こうなったし

第七話 『この私がスロウリィ!? あぁーりえなぁーいつ!』

ブエノスアイレス!

一家に一台、暮らしのお供、ザフィーラでございます

前回までのザフィーラさんですが

ヴィータちゃんが予想外に可愛かった件について

はやてちゃんが予想外にスポ根好きだった件について

とまあ、うちの娘達(達)の新たな側面を発見したんですが・・・

「待てやー!ー!」

「ははは、速いなー! 気持ちええわー!ー! ザフィーラ! もっとや! もっととばすんや!ー!」

「御意」

「置いてくなよー!ー!」

チリンチリーン！

現在、娘達と一緒にデッドヒートしてます

カチ込め！ザフィーラさん第七話 『この私がスロウリィ！？ああーりえなあーいっ！！』

話は遡ること少しばかり

前回自転車に乗れるかどうかを見届けることなく仕事に行ったザフィーラ

「ほう、ヴィータがそんなことを？」

「ああ、主とともに楽しそうにやっていたよ。ああしているのが至極自然に見えるぐらいだ」

「そうか、はしゃぎすぎて主はやてに迷惑を掛けなければいいが・・」

「ふむ。主も楽しそうにしておられた。そう心配することもないと思うが」

昼からの仕事を終え、帰り際にばったり会ったシグナムと取り留め

もない会話をしながら我が家に帰った

「ただいま戻りました」

「今帰りました、主はやて」

何時ものお出迎えを期待し、ガラリと玄関を開けてみればそこには

「ようやった！ようやったでヴィータ！（すっ転ぶ）痛みに耐えて
ようがんばった！感動した！！」

「はやてのお陰だよ！！はやてがずっと応援してくれてたから、だ
からあたしは頑張れたんだ！！」

「くう、嬉しいこと言うてくれる・・・ヴィータアー！！」

「はやてえーーーー！！」

ひしつと抱き合う少女が二人

アットホームな我が家で展開されている異次元的な空気に、シグナ
ムは目を皿にした

一方のザフィーラは昼間に一端を目の当たりにしていたので、ビッ
クリはしたが、すぐに立ち直った

扉を開いたのがザフィーラでよかった

シグナムであれば、思わず閉めてしまっただろう

烈火の将も大概にスポ根の人ではあるが、いきなりこんなアツい空間に身を投じる羽目になるとは思わなかったようだ

「その様子であれば、乗れるようになったのですか？」

「あつ、ザフィーラ、おかえりー。シグナムもな、お疲れさま」

「あ、はい。あの、これは一体何事で？」

「せや！聞いたってや！ヴィータがやり遂げたんや！な、ヴィータ！」

「おうよ！バッチリだぜ！ま、あたしに掛かりやあ自転車なんてえこんなもんだよ！」

「うむ、そうか。流石だな、ヴィータ」

「へへんっ！」

無い胸を張る幼い仕草がものすごく微笑ましく、ザフィーラは紅い頭をぽふぽふと撫でる

まさに娘の成長を喜ぶ父のごとく
その瞳は父性愛に満ちあふれていた

図らずもほっこりとした空気が、夕方の八神家玄関前に流れていた

「って、娘じゃねえー！！？」

「なる程、もう乗りこなせるようになったというわけか」

「そうなの。だからヴィータちゃんったらもう喜んじゃってね。『この補助輪ってのもういらねー！』って言って、取ってってせがむんだもの」

「何だよ！いいじゃんか別に！あたしはもうマスターしたんだよ！」

「そやでシャマル。ヴィータの頑張りはこの私がちゃんと見届けたんや、私が証明したる！」

「あらあら、フッフ」

（ヴィータちゃんも運動神経いいなあ。一日でとは頑張ったね。さすが『ベルカの真紅の稲妻』・・・案外似合うな、これ）

女性陣の会話を小耳に挟みながら、ザフィーラは庭の後始末をしていた

ヴィータが短時間で乗り回した庭は、まさに歴戦の戦場といった様相を呈しており、荒れていたのだ

まあ無頼の風に庭先が乱れたぐらいのレベルではあるのだが、几帳面なザフィーラはそこらへんが気になるのだった

パサリパサリと庭先の掃除を終えると、ふとヴィータの自転車が目に入る

シャマルに補助輪を取ってもらい、玄関脇に立てかけてあるそれは、ヴィータの努力が垣間見えるような、見事なくたびれ具合だった

「半日でここまで・・・ふむ、少しくらい磨いておいてやろうか」

夕暮れの庭先で一人微笑む彼は、実に所帯じみている

ザフィーラの中に居るのが『彼』だからかは解らない、元来のザフィーラもこういう気分を感じていたのかもしれない

そう、実に平和な、平和な日々だった

家族の日常を語り合い、皆で団らんする、普遍的な、しかし大切な一幕

「なんやザフィーラ。居らんと思ったらこっちにおったんか」

「む、主」

「そろそろ晩ご飯やで？掃除はまた明日にしょ？」

「そうですね」

車椅子が床を軋ませる音を耳にし、ザフィーラはそちらに振り向く
そこには予想通りほんわりと笑顔でザフィーラを呼ぶはやての姿
ザフィーラがつっかけを脱ぎ縁側に上がると、ふと、自転車を眺め
ているはやてが気になった

その目には、9歳の少女らしい憧憬と、9歳の少女にはそぐわない
諦めが混在していた

「ええなあ、自転車・・・私も、一回でええから乗ってみたかった
なあ・・・」

「・・・主」

「あ、気にせんといて！？私はヴィータが乗ってるのみるだけで楽
しいから！」

先程の表情を消し去り、一転して取り繕うように明るさを見せるは
やて

それじゃあ手え洗ってきいヤー？と言い残し、彼女はキッチンへと
向かった

思わずといった風にポツリと垣間見た少女の本音に、ザフィーラはいたたまれない気持ちになる

最後の言葉は嘘ではないが、本音でもないだろう

9歳の少女が、自らの不遇に不満を漏らすでもなく、逆に周囲に気を遣う

ザフィーラは、八神はやてという少女の『異端性』を、改めて直視した気がした

「うむ・・・」

（原作に沿えば、一番いい結果になるけど・・・今は原作前だ。この時期の八神家の動きは特に決まっていはいはず・・・まあ、色々変わってるからもう原作知識が使えないかもしれないなあ）

ザフィーラは、思いの外冷静にそんなことを考えていた

自信の最大の武器たる原作知識

しかし、その信頼性が最近揺らいでしまっているような気がしてならなかった

思えば、『彼』がザフィーラとしてここにいる時点で、原作を変え

てしまっているのだ

こちらの世界で目覚めてから二ヶ月、今更ながらにザフィーラはその可能性に気づいた

しかし、彼の心は何故か穏やかだった

普段ならば、『アレ？よく考えたら原作知識って役に立たないんじゃない？確定的に明らかじゃない？』と『そぉーい！』といった風に、混乱すること請け合いだ

だが、夕陽を眺める彼の心中は、至って穏やかだった

先程はやてが見せた、寂しそうな顔。

少女には似合わない諦めの表情。

それを見て思ったのだ。

『これを見ているだけなんて、それで家族と名乗れるのか？』

きっかけは実に小さなことだ

単純で、ふとした考えに過ぎず、短慮だとも思う

長い目で見れば、これまで通り傍観者を気取った方がいいかもしれない

だが、今までの二ヶ月、彼は『ザファイラ』だった

色々覚悟を決めるとか、戦いに行く決心を何とか、大層なことを言ってきた

それらしく修行などにもチャレンジしてみた

だが、彼の中身は普通よりも少し臆病な成人男性でしかなかった

『魔法』とか、『戦い』とか、そんな非現実の中にいる彼は、あくまで『ザファイラ』としての彼だった

だが今、彼は、日常の中にいる彼は、『彼』として『八神はやて』という少女を笑わせてやりたいと思っていたのだ

二ヶ月の生活を通し、彼は今、初めてと言っていいぐらいに『やりたいこと』を見つけてしまったのだ

キャラクターではない
決められたシナリオを歩く、無感動な人形ではない

前世と何ら変わり無い、泣き、笑い、悲しみ、喜び、そしてまた笑う
この世界にいるのは、
血の通った、人間たちだ

よくある陳腐な答えだろう、青臭い綺麗事だろう

しかし、それでいい、

オリジナリティなんて要らなかった

きっかけは小さなことだ

それで十分だったのだ

何故なら、『彼』は、一人の小さな人間だったのだから

「そう、だな・・・私は、『そう』だった」

原作にはない、ほんの小さな、イベント性もエンターテイメント性もない、少女とその家族の一場面

だからこそ、『彼』は、今まで縋ってきた『原作知識』という盾を、するりと手放すことができた

そう、手放したのだ

「この世界で、真^{しん}に生きてみようか

まずは、『主』に笑顔を、

だな」

その顔には、熱意溢れる理想もなく、悲壮的な覚悟もない

夕陽が照らす八神家の縁側にて、『ザファイラ』であり『彼』である男は、小さく、しかし大きな意味のある目標を掲げたのだった

シリアスに決めてみたザファイラ だがしかし。そうは問屋が

卸さない、それが八神家クオリティ

「そうや、サイクリングに行こう」

「「「は？」」」

『夕焼けの決意（笑）』から数日後、ザファイラは日曜日であり暇だった

シグナムは道場も休みで、暇だった

ヴィータは言わずもがな暇であり、舎・・・シャマルは洗い物をしていたためこの場にはいない

穏やかな朝食後の団らん、そのはずだったのだが、はやてがおもむろに皆に言い渡した

車椅子を固定し、まるでこれしかないとばかりに可愛らしく腕を組んで頷いている

急な事態に、ザフィーラを含めた三人には「????」が乱舞していた

「あ、主はやて？サイクリング、ですか？」

「せや、サイクリングや」

代表してシグナムが聞いたが、聞き間違いとかでははないようだ

「私思ったんや。せつかくの自転車、乗りこなせるようになった今、ヴィータには広いフィールドで存分に楽しんでほしいってな」

「は、はやてっ……!」

家族思いのいいせりふに、ヴィータは感極まる

が、何故か、シグナムとザフィーラはその言葉が空恐ろしかった

「……して、いつなさるの？」

「今日や」

「「「え?」「」」

「昔の人はいいこと言った。『思い立ったが吉日』言つてな。みんな今日はなんか用事あるか?」

一度は懐柔されたヴィータですら、再びポカン

さらりとサプライズ発言なはやてに戸惑いつつも、三人は暇であることを告げる

シグナムとザフィーラの危機関知的直感、別名『ヤバいよセンサー』がピンピンになってきた

「『善は急げ』とも言つ。ちゅうわけで、行こか、みんな! 取り敢えず、まずは近場の臨海公園でも目指してみよー!」

数日前の儚さと諦めを含んだ幸薄（薄幸ではない、さちうす。コレ重要）の少女・八神はやてはどこへ消えたのか、わくわくしてますとばかりに手を上にかざすはやて

なんだかんだ言つて、はやてが楽しそうならばそれでいい騎士二人に、似たような決意（笑）を固めたザフィーラである

はやてからの提案ならば、断る理由などありはしなかった

「「御意」「おう！」

「何の空気かしらコレ・・・？」

洗い物を終えたシャマルがリビングに顔を出し、ひたすらに疑問の声を上げていた

場面は変わり庭先へ

『はやてによる突然の思いつきで開催される、はやての、はやてによる、ヴィータのためのサイクリング祭り』・・・略して『はやてサイクリング』が開始された

「さて、ほんならヴィータは準備おっけーやな？」

「もち！」

「お弁当はシャマルとシグナム、よろしくな？」

「はい、はやてちゃん」

「しかと、承りました」

そこまで言ってうんと頷くと、はやては残りの一人へと視線を向けた

「ザフィーラ、準備完了した？」

「ただいま終わりました。行けます」

はやてサイクリングの全貌は、至ってシンプル

先に述べたようにヴィータのチャリ鳴らし（誤字に非ず。腕が鳴る
ぜ的な意味で）であるしかし爆走するヴィータを一人で行かすのは、
家族イベントたる意味がない

車椅子で追いつけるほどヴィータは生半可ではないし、車椅子に合
わせたらサイクリングにはならない

そこで、はやては考えた

しかし、車などとも縁がない八神家だったし、シグナム達に車椅子
を押しながらの全力疾走を強要する鬼畜主ではない

そこでふと、ザフィーラが入れ知恵をはたらい

『お忘れですか主？私たちには、まだ「足」が残されています』と

そしてはやては気づく

『なんや、もう一台自転車あつたやん』と

つまりザフィーラが当ててきた自転車セットの、むしろ目玉商品

大人用ユニセックスデザインママチャリのご登場であつた

！！

「狭くはないですか？」

「うん。うん。大丈夫やね」

小学三年生の女子としても軽いはやてを慎重に抱き上げ、ママチャリの後部に設置された座席へ座らせる

普通ならキツいかもしれないが、車椅子生活で筋力の弱い、小柄なはやてには十分の余裕があつたらしい

こちらに残した車椅子は、お弁当を持ってきてくれるシャマルと一緒に、シグナムが持ってきてくれる手筈となっている

過保護侍シグナムさんのことだから、自らこぎ手に名をあげるかと思いきや、そうでもなかった

曰く、『ザフィーラならば問題なかつた』

ザフィーラ的には謎のプレッシャー攻撃である

現時刻は10時20分、

集合は12時に臨海公園としていた

はやてがしっかり乗ったことを確認し、重責であるこぎ手に選ばれたザフィーラは自身もサドルに腰をかける

「ほな、行こか！」

「よっしゃあ！」

「それでは、しっかりと掴まっていってください、主」

「主はやてを頼んだぞ、ザフィーラ」

「みんな、また後でね」

彼等のサイクリングが始まった

「おぬぐあー！ー！！待てえザフィーラあああ！」

「フハハハハ！ヴィータ！そうや！もつと闘志を燃やすんや！コスモを爆発させえー！！」

「オオオオ！燃えろあたしのコスモオオオー！！」

（何故こうなったし・・・）

現在サイクリング開始から十数分

いきなり『どっちが先につくか勝負しようぜ！』とかのたまいだしたヴィータが全速力でチャリをダッシュさせ始めたことが発端となつて、この事態は始まつた

はやてを乗せているため、無理な機動は避けたいザフィーラだったが、あるうことかそのはやて自身から、『ヴィータに負けとつたら盾の守護獣の名折れやで！気張るんや！ザフィーラ！』と言われてしまった

なんで守護神が韋駄天に負けたら恥なのか？

よくわからなかったが、異次元的熱血スイッチが入ったはやてはまさに疾風の如き性質となり、速さを求めてやまないようだ

仕方なしに軽く本気でこいだザフィーラだったが、案の定、車輪のインチ差などからザフィーラがヴィータを追い越した

それからは、追うヴィータに発破をかけるはやて、ひたすらこぎ続けるザフィーラのデッドヒートになってしまった

（原作知識捨るとかいったけど・・・捨てるまでもないよ。なんだ

このはやてちゃん。いったい何を食ったらこんなク　ガーの兄貴みたいな幼女ができるんだ？シャマルか、シャマルさんが『舎（シヤマル）ご飯』を味見でもさせたのか？

ザフィーラの決意（笑）は本当に（笑）でしかなかったようだ

アニメとかでは、この時期のはやてはタヌキと称されることもない、まだ人気のあつた健気な少女時代のはずだ

断じてこんな熱血スピードマスターキャラではなかったと思う

丸つきりと言っていていいレベルの違いは、もはやこれが原作準拠ではないことの最肯定となっていた

（なんだかなあ・・・しかし）

「ぜつ、ぜえ、くそう！待てえつ、ザフィーラあー！！はやてえー
！」

「ほらヴィータ！今が耐え時や！ここや、この一線を越えるんや！
その時あんたは空も飛べるはずやー！」

「ああああいきゃんふらあああい！！！」

（嗚呼、もう。コイツ等降ろしてえなあ・・・）

叫ぶ少女と満面の笑みで発破をかける少女を引き連れ自転車で爆走する青年の図とは、これいかに

ザフィーラは周囲からのイタイ視線をカットする魔法障壁がほしいとか考えていた

その少女がそこに居たのは偶然だった

この日は日曜日、学校もなく、数ヶ月前に出会った『不思議な力の練習もない』

両親等のお店はまだ込む時間ではなく、なんとはなしに散歩に出かけたのだった

「・・・？」

そこで、少女はふと、どこかで女の子が叫ぶような声を聞いた

「何だろ？解る？レイジングハート？」

『Sorry master・I don't』

頼れる相棒にも解らないらしく、しかし聞こえたのは確かのように、

空耳ではないとわかった

その声のようなものは、徐々に近づいてきているようで、必死だと感じさせる少女の声が幾分強まっている

そこに重なるように、楽しそうな、ひどく愉快そうなもう一つの少女の声が新たに聞こえてくる

「な、何だろう・・・?」

言い争っているような、しかしこの少女と最近できた金髪の大事な親友とがそうだったように、互いを認めさせ合っているかのような壮絶な声の応酬

見知った町中での底知れぬ事態に、修羅場をくぐり抜けたこともある栗毛の少女は、唾を飲む

『 っか 』

『 ス イ 』

声が近づいてきた

少女は一層に深く耳をこらし、その実態を探る

（危ないことなら、私がなんとかしなきゃ　　！）

彼女にはその『力』があるのだから

『　　おま　　ちい　　』

『　　ザフ　　ラ　　す　　』

声はすぐ側まで迫っていた、おそらくはその曲がり角のすぐ向こうにまで

久方ぶりの未知を相手に、待ちかまえる少女にも緊張が走る

そして、『彼女たち』がはその姿を現した

ごくり、と再び息をのみ、少女が見たものは・・・

「ギガああああ！！！！」

「いいっ！いい加速　アクセラレーション　や！だがもっとやれる
！あんたならもっと出せるはずやっ！筋肉を躍動させるんやあっ！
！」

「爆ぜろあたしの大腿筋んんんっ！！」

「に、にやあああああああ！！？」

予想外であつた

意外！それは自転車！

二台の自転車、一つは子供用が、猛スピードで少女めがけて迫ってきたのだ

しかも尋常でない何事かを叫びながら

あまりの圧力と風圧に、少女はバランスを崩し、尻餅をついてアスファルトにへたりこんだ

ある意味ジュエルシードよりも怖い

本当に怖いのは、誰よりも何よりも、人間であるということだろうか・・・？

『Master、Master！！』

茫然自失となつた少女をはっとさせたのは、機械の相棒の声であつた

「はひいつ！？・・・え？レイジングハート？え？え？何、今の・・・？」

『NO date・・・』

少女に認識できたのは、何か得体の知れない圧力を放つ二台の暴走特急と、真つ先に視界に入った青いツナギのような服だけであった・

少女 高町なのはは、原作を離れてしまったこの世界でどう動くのか？

受難に満ちあふれた彼女の人生は、ある意味ここから始まってしまったのだった・・・

「主！主！！」

「どしたあザフィーラ？」

「今、まさに、何か人らしきモノを蹴散らしませんでしたか？」

「障害物は蹴散らしてこそその花道や！！スピード落としたらあかんでザフィーラ！勝利こうえんまでおよそ7カーブ・・・ヴィータには悪いが、この戦い いくさ・・・私が貰うっ！！」

「・・・（どうして、こうなった・・・？）」

「ギガだあああつしゅあああ!」

「やりよるな、ヴィータ。さすがは【ベルカの真紅の稲妻】やでっ
!」

「・・・何も、言っまい」

ザフィーラの受難はどこまでもいつてもマツハ越えて進み続けるの
だった

続く

第八話 『悪いなの 太、このデバイス三人乗りなんだよ！』

九月某日

八神家リビングにて、とある昼下がり

図書館へ向かったはやてと付き添いのシグナム

久々にゲボ子に復帰しつつ、爺さん達に自転車を自慢しに行ったグ
イータ

よって、家にいるのは必然的に二人だけ 我らが参謀、シャ
マルさんと

我らが主人公・ザフィーラその二人であった

家事も一段落つき、今は二人ともソファで茶をすすりながらワイド
ショーなどを流し見ていた

その落ち着き様 あえて言うなら長年連れ添った老夫婦が醸し
出すような、居心地のよい沈黙の中

有閑マダムな有様のシャマルはともかく、あまり芸能関係に興味の
ないザフィーラは目は画面を見ながらも全く違うことを考えていた

（俺もデバイス欲しいなー）

カチ込め！ザフィーラさん第八話 『悪いな び太、このデバイス三人乗りなんだよ！』

ザフィーラは、そんな思いに駆られていた

前回で『原作知識は捨てる（キリッ』とかかましたザフィーラだったが、基本的には今までと生活は変わっていない

よく考えたら、犬にならなかったし、日銭を稼いでたし、ご近所付き合っているし、メガネ嬢にエンカウトしたし、原作なんか外れまくっていたのだ

はやてが正に疾風の化身と相成ってしまったのも、いつか来る未来（S t s 時間軸とか）における『狸娘はやて』が先走って生まれたというだけかもしれない

図書館ばかりの内向的なはやてを、この二カ月で何度か外に連れ出したりしていたため、ポテンシャル的にはアグレッシヴになっても不思議ではなかった

今までは原作を大事にして不干渉で行くつもりだったのだが、改めて考えるとまったく遂行できていなかった

それだけ、ザフィーラ生活を楽しんでいたからなのだろうが、『彼』

は、意志薄弱な自分が何とも情けなくなつた

そんな折り、一応未だ続けているシグナムとの喧嘩祭り・・・鍛錬で、ザフィーラは疑問を感じたのだ

そう、『ザフィーラのデバイス』という存在について

丁度いい、闇の書に詳しい参謀マダムも目の前にいることだ、今のうちに聞いてしまおうとザフィーラは考えた

「
時にシャル」

「はい？」

パリン、と乾いた音を立てる煎餅を加えながら、シャルはテレビからザフィーラに視線を移す

「今更なのだが、私の存在は、『闇の書プログラム』の一つとして
どつという概念が備わっている？」

いきなりの真面目な質問に、シャルも顔を引き締め、口内の煎餅を飲み込む

「もぐ、んくっ・・・どうしたのザフィーラ、いきなりそんなこと

を言い出すなんて？」

「いや、少しばかり引つかかることがある」

「・・・！！まさか、あなたの体に何か異変でもあったの！？」

いきなりはつとした表情になると、心配そうに詰め寄ってくるシャマルにザフィーラは「え？え？なに？」と動悸と焦りを覚える

しかし、一瞬後に『そういう設定』だったな、と思い出す

「いや、その件ではない。心配するな。ただ純粹に、私と三人に違いはあるのか？と聞きたかったんだ」

シャマルは心配していた件ではないと言われ胸をなで下るすも、ザフィーラが新たに問うた質問に、少し考える素振りを見せた

「・・・厳密に言えば守護獣か騎士かという違いはあるけれど。大差はないはずよ？結論としては同じプログラム生命体なもの」

「ふむ・・・それならば・・・」

「どうしたの？」

「いや。何故私はデバイスを使用していないのかと思ひ直してな。今の話を聞く限り、使えん、というわけでは無さそうなのだが」

そう言われ、「そう言えば何でかしらねー？あれ？ホント何でかしら？」とのほほんと返すシャマル

そう、ザフィーラが抱いた小さな疑問とは、『なんでザフィーラってデバイスないの？ハブられてんの？ベルカ式ぼっちって奴？』といったものだ

それも、天啓が如く、いきなりその『疑問』が脳裏に浮かんのだった

きっかけはシグナムとの模擬戦だった

あれは疾風サイクリングより数日後、まだ八月中のことだ

数日前・八月末日

「ちえあっ！」

「ふっ、セイツ！」

迫る白刃を鉄甲で受け流し、体をひねり込んでシグナムの無防備な腹へと回し蹴りを叩き込む

「甘い！」

難なくかわすシグナムだが、回避のためにジャンプした瞬間にザフィーラは地を蹴り、回し蹴りの軌道をずらし直上へと蹴り上げる

「ぜあっ！」

「っ！く、まだだ！！」

さすがは烈火の将

奇襲じみた蹴りすらも、空中という回避に適さない空間で正中線をぶらして回避する

蹴り上げた足が上に残り、無防備をさらしたザフィーラの背面に着地すると、振り返りの刃でザフィーラの逆胴を狙う

「うおおっ！！」

「テオアアアっ！！」

瞬間、先のシグナムを真似るが如く空中に浮く足を起点に跳躍し、剣劇を回避

振り抜いた左の鉄甲でシグナムへと一撃を迫る

ピタと、お互いの首と胸で止められた剣と拳

「……ふう」「」

お互い同時に息を吐き、力を抜いた

「……今の回避は見事だったな。刃が空を切り掛けた」

「シグナムこそ、相変わらずの体幹だな。隠し玉を避けられたのは何度目だ？」

剣を納めたシグナムと、拳を納めたザフィーラが互いに感想を言い合う

「やはり超近接戦ではザフィーラに一日の長があるか。私もまだまだだな」

「む。私の武器は四肢四刀だ。その分有利でなくては、守護獣の面目が立たん」

「フッ、それもそうだな」

爽やかに汗をかき終えた二人は、お馴染み砂漠の星で戦後検証へと移っていた

「しかし・・・」

その中で、ザフィーラは一つ切実な問題に気づいてしまった

「今の仕合、そちらが一合でも刃に魔力を込めていたら、防戦に徹するしかなかるうな」

「しかたないのではないか？お前はやはり、魔法における攻撃手段が未だに薄い」

「（はつきり言うなあシグナムさんよ・・・）ふむ・・・どうやら私の『守護』獣の力は攻めには向かんようだ」

ザフィーラは伸び悩んでいた

前に開発した盾手裏剣と盾爆弾

アレらを実践投入するには、いささか粗が大きいすぎるのだ

本来守りを至上とする『ザフィーラ』の本質は、あくまで『盾を張る』ことであり、『盾で攻撃する』ことではないからだ

意識を集中させないと、すぐに盾の魔力が散ってしまうのだ

仕合には使えるが、実践ならばすぐさま攻略されるような拙い技は、かえって命取りになりやすい

『ザフィーラ』の膨大な経験は、『彼』にそう語りかけていた

「だからといって、打撃力が拳と『鋼のくびき』だけというのなもの・せめてもう少し、『盾だけに意識を回す』ことができれば使い物になるんだが・・・」

「ままならんものだな」

しかめ面で悩む戦友に、しかしシグナムは苦笑するしかできない

こればかりは本人が打破する壁だ

既に戦士として完成系に近いザフィーラが更なる高みを目指しているという事実は、武人であるシグナムにとっても刺激されるモノがあった

故に、この鍛錬は相互の利にうまく合致していた

ふと、ザフィーラの視線がシグナムの腰に留まっていることに気づいた

「ど、どうしたザフィーラ？」

「そうか・・・ふむ、これならば・・・」

何か光明を見いだしたようなザフィーラの言葉に興味が湧き、シグナムがなにを思いついたのか問おうとする

「シグナム」

「な、何だ？」

が、寸前で先を越され、シグナムが逆に話しかけられた

「簡単なことだった・・・実に、簡単なことだ。何故今まで私はこんなことに気がつかなかった？」

「何か思いついたのか？」

「ああ、単純な話だ。デバイスを使えばいい」

デバイス？

「ああ、なるほど」

そう言われると、シグナムはストーンと理解できた気がした

デバイスとは、本来人には負荷のかかる高度演算を肩代わりするた

めの、補助道具である

『盾を張る』思考ソースをデバイスで肩代わりし、『盾を操る』ことをザフィーラが行う

これだけで問題解決だ

先ほどの視線はレヴァンティンに向いていたらしい

むしろみんなやっているのに、何故今まで誰も指摘しなかったのか？

「「「「「「「「」」」」」」」」

あまりにもあまりな新発見に言葉をなくす二人

まるで、『誰かが決めたから』『ザフィーラが活躍できない』ように誘導されていた気さえしてくる・・・

『都 監督の罠だ！！』

罠だあー！

だあー・・・（エコー）

「・・・まあ、いい。深くは考えん」

「そう、だな。そうしようか」

『触れてはいけない』話題に立ち入りそうだったため、二人は氣を取り直して会話を続ける

「ともかく、私のデバイスというモノを作成してみよう。幸い闇の書には膨大な資料がある、一つや二つ、わからないだろう」

「そうだな。シャルに頼むといい。やはり闇の書に一番詳しいのはあいつだからな」

「・・・ん？待て。守護獣だからデバイスが無かった、ということ
は、無い・・・だろうな？将よ」

「・・・さあ。答えかねるな」

そこらへんどうなんだろう？

本気で首を傾げながらも、二人は海鳴へと帰って行くのだった・・・

とまあ、こういった経緯があり、ザフィーラはあらましを
シャルに伝える

「そんなことがあったの・・・」

うーん、と頭をひねるシャルだったが、推測だけど、と前置きして口を開く

「守護獣でも、リンカーコアはあるもの。デバイスは使えるはずよ？ただ、私の予測だけど、今までの貴方はデバイスが無くても盾だけに集中できたけど、シングルアクション増やすことによって処理力に追いつかなくなっただんだと思うわ」

「成る程・・・要は私の我が儘が原因か」

「我が儘って・・・別に、私は今の貴方もいいと思うわよ？それだけはやてちゃんを守りたいって想ってる証拠だものね」

「
無論だな」

朗らかに笑うシャルに、確かにその思いだけは確実に同意するザフィーラ

参謀曰くザフィーラにもデバイスは使えると解ったのだ

どうせなら早く自身のデバイスというモノを体験してみたかった

「シャル、闇の書のデータからデバイスを作成することは可能か？」

「え？恐らく、できると思うわよ？・・・あ、そうだ、今まで使ってなかっただけで、プログラムの中には貴方のデバイスデータも設

定されてるかもしれないわ」

「む、その可能性もあつたか」

シャルの言葉には一理あつた

さすがに夜天の書の創造主も、騎士一人だけハブるような鬼畜ではなかつたはずだ

むしろそんな鬼畜であつてほしくない

ザフィーラはそんな考えを振り切ると、シャルへ所要時間を聞き出す

「引きずり出す全行程にどれくらいかかる？」

「そうね。書内のアーカイブを走査、検索、割り出し、情報取得、再現化・・・全部で一晩ぐらいかしら？あ、まだ中にあると決まつた訳じゃないわ。だから、貴方に合いそうなデバイスデータも同時に探しておくわね。その場合は走査、構築に二日ほどかかるかもしれないけれど」

なんと気の利くシャルだろうか？

ザフィーラの中にあるドジっこなイメージが払拭され、一気に頼れるお姉さまキャラではないか

（シャルさんパネエな。さすが中身は老練なる参謀・・・場数が違うぜ！）

感謝の割に失礼なことを考えながらも、しっかりと頭を下げて礼をする

「重ね重ね助かる。恩に着る、シャル」

堅苦しいザフィーラの様子に、シャルは一つ苦笑すると、お茶目にウインクしながらザフィーラに気にするなと言った

「構わないわよ、私たちは家族でしょ？」

「家族、か・・・ああ、そうだな。では、頼む、シャル」

「フフフ。ええ、任されたわ。あ、お茶のお代わり、どうかしら？」

「ふむ、頂こう」

穏やかな初秋の昼下がり、矢神家は、まったりとした空気で満ちあふれていた

その日の夜、ザフィーラは夢を見ていた

（うーん・・・なんだここ？）

夢の中だというのはなんとなく分かった

何故なら、そこは『海』と呼ばれる次元空間の様に周囲360°。何もなく、たゆたゆとザフィーラはそこに浮かんでいたからだ

しかも自分の体は見えるのに、周囲は一寸先すら見えないという真つ暗闇の仕様だ

（えー・・・悪夢の類だろこれ。俺暗いの嫌いなんだよなあ）

ヘタレここに極まれりといえる思考

これで外見は凛々しく取り繕っているというのだから、まさに見た目詐欺だ

【盾の 獣。 ての守護 フィーラよ】

ふと、どこからともなく声が響く

途切れがちなその声は、どうやらザフィーラへと呼びかけているらしい

哀切に満ちたような、渴望に枯れ果てたような、慈愛を説く女神のような、美しくも儚げな声

（え？え？何これ？誰だよ？何これ明晰夢って奴？ていうか声だけ聞こえるとか止めてマジで怖いからあばばば）

しかしザフィーラにとっては、姿無き美声は幽霊のそれと同義語であつた

自分の夢の中にあつてなお、普段の小心ぶりに拍車がかかる残念な有様だ

【・・・ザフィーラ、いや、『ザフィーラ』と共にある者よ】

（　　！！なっ、今、なんて！？）

呆れたような、しかし先ほどよりも明瞭な声音に、ザフィーラは著しく反応する

正しくは、その言葉の含む意味に驚かざるを得なかった

（『ザフィーラ』と共にある者・・・俺が『ザフィーラ』じゃないって知ってるって言うのか！？誰だ！？これは俺の夢じゃないのか！？）

【いいや、これは夢だ。起きたときには既に忘却の彼方へと去りゆく、虚ろの出来事でしかない】

頭の中での疑問に対し、答えが返ってきた

どうやら幽霊さん（仮）はサイコメトラーであるようだ

（ちよつ、やめて！！俺のチキンな心を読まないで！）

【……安心しろ、表層意識を拾っているだけ、念話のようなものだ……『ザフィーラ』、貴方に話しておくことがある】

（……何すか？）

閉じる俺の心眼！と、訳の分からない思考を拾われてしまったようで、声の主はザフィーラに事態の説明を図る

なんとも律儀な幽霊さん（仮）であつたが、次に発せられた声はここからが本題とばかりに少し引き締まった

返すザフィーラの声も、少しばかり真剣なものへと変わる

彼の中では、別に現状をはっきり理解できたわけではない

単に『夢だ』とはっきり言われたし、話す相手も実に理知的

『それなら別に大丈夫……大丈夫かな？』

と適当に場の流れに身を任せただけである

そんなザフィーラの無意識下のヘタレをもものともせず、声の主は語り出す

【私は、貴方達と共にあった存在。そして、今なお貴方達、主と共にあり続けている。しかし、私には騎士達へと語りかけることはできなかった。いつしかできないように改変されてしまった。辛うじて、主へと意識をつなげるだけで精一杯だった・・・】

(・・・)

何やら思ったよりも深刻そうな話だ

ザフィーラは取り敢えず口を挟まず聞いてみることにした

【だが、貴方が、ザフィーラでありながらも『ザフィーラ』ではない貴方が突如として現れた。メモリ野とルーチンの微細かつ決定的な変化。今までのサイクルでは観測されなかった事態だ。しかし、それ故に、貴方には改変プログラムのプロトコルが適用されなかった。だからこそこうして今、夢として思考域に働きかけることができているのだから】

(・・・うん、うん。成る程・・・)

何を言っているのかザフィーラにはさっぱり分からなかった

ルーチンとかプロトコルとか言われても、前世で電子工学に長けていたわけでもないザフィーラには、とんだ畑違いだ

（つまり分かりやすく言えば？）

【・・・お前になら、話しかけることができるようになった】

二人称が貴方からお前に格下げされた

声に滲む呆れも隠そうとしない辺り、幽霊さん（仮）からのザフィーラ株価は下落しだしたらしい

しかしそんな些細なことを気にするザフィーラではない

（それは良かったですねー。つまり、アレか？今までは話し掛けたくても出来なくて、久し振りに話せそうな相手 俺に意を決して話しかけたと・・・？）

【え、いや、何を ー】

（よかろう同士よ！人見知りという壁に立ち向かった君に敬意を表して、語り明かそうじゃないか！）

【ちょ、違 ー】

（なあに、心配はいらない。俺は理解者だからね！安心してくれ！

俺もそうだったんだよ！)

【・・・】

ザフィーラの中にいる『彼』は実に温厚な男だった

人当たりも悪くなく、人畜無害、仕事効率是人並み、特に嫌われな
い　　いわゆる草食系男子

だが実体は、ヘタレ気味な人見知りであつた

人当たりが良いのは基本的に他人と深くつつこんだ関係にならなかつたから、つまり悪い面を知られるほどに親交を深める相手が少なかったからだ

仲良くなる奴とは仲良くなるが、手広くフレンドリーなタイプではなかった

だから彼は本来なら忌避すべき幽霊(仮)の言葉に、いたく親近感を感じてしまった
先ほどまでビビっていたのにだ

また夢の中だということも、彼を幾分開放的にさせていた

(というか夢中だろこれ？無害無害！)

姿無き声も『そういうもの』、やけにはっきりとした夢も『そういうもの』だと、割り切ってみることにしたようだ

【おかしいな・・・本質的には『ザフィーラ』に変わりはない筈なのだが・・・こんな男だったかな？】

漏れ出るお気楽な思考に、幽霊（仮）は怪訝な声で自答する

声の主 凜とした音色から女性と推測できる は、自身の記憶にある寡黙で不動の男が面影も無いことに、戸惑いを隠せないようだ

そう、ここは内面思考が意志発露のツールとして働く精神空間

普通の、自動的にクールな『ザフィーラ』を取り繕った言動で誤魔化されていた違いが、明るみに出てしまっているのだ

『彼』と『ザフィーラ』の中身は、一万人いれば一万人が別人と認めるくらいには別人だ

同士であるシャイな幽霊（仮）の怪訝な色を含む言葉だったが、いつになくハイなザフィーラには届いてなかったらしい

（それで、話はそれだけかい？ほら、もっと話していいんだよ？今まで喋れなかった分、存分に聞いてやろう！！）

【・・・まあ、いい。一応伝えておこう。お前自身は認識していな

いであろう、お前の在り方を】

（ん？在り方？どういう意味で？）

声の主は取り敢えず疑問を先置いた

彼女（便宜的に、女性と定義する）の言葉に、今度はザフィーラが疑問を持つ。

【文字通り、お前はザフィーラであって『ザフィーラ』ではない。それは自覚しているだろう？しかし、結論を言えばお前は『ザフィーラ』という存在でしかあり得ない】

（そりゃ、まあ、確かに見た目はこんなだけでも・・・『ザフィーラ』ってのはもっと男らしいガチマツチョコだろう？ 内面的な意味で。俺は『ザフィーラ』に憑依したとか、乗っ取っちゃったんじゃないのか？）

彼が今言ったことは、この二ヶ月で彼がたどり着いた答えであつた

原作における『ザフィーラ』は不遇ではあるが、内面は寡黙一徹騎士道まっしぐらな男だった

彼が今まで蓄えた記録はあるにしても、中身が全くの別物である現状、『彼』が『ザフィーラ』を乗っ取ったといつても不思議ではないだが『彼』はあまり罪悪感などは感じていなかった

彼自身にも何故こうなったかと言う理由が分からなかったからでもあるし、誰が悪いのかも全く分からなかったからである

取り敢えず『ザフィーラ』役として　その割にはあまり自重していなかったが　過ごしてきただけだった

だが、やはり『ザフィーラ』と同一存在だと言われては、違和感が拭えない

【いや、確かに性質の改変は性格、言動面において影響は見られるが、本質は変化していない。お前は夜天の騎士が支柱『蒼き守護獣』である『ザフィーラ』だ。理由は私にも特定できていないが、従来のザフィーラが未知のコードに接触した結果、その余波により及ぼされた変質が今のお前だ】

（はぁ・・・はぁ？その、コード？それは何なの？）

【分からない。私達の技術体系では解析し得ない未知の情報としか。しかし、『ザフィーラ』というプログラムがそのコードに取って代わられたわけではない。あくまでお前は、『不明情報の余波により細部に変異が生じたザフィーラ』だ。つまりはお前の認識する『ザフィーラ』の人格が『今』のお前であるわけだ】

彼女の言を纏めると、つまりはこういうことらしい

“ザフィーラの中の『彼』とは、原作の『ザフィーラ』が何らかの情報により変化した、同一の存在である”

（うつそでーい）

余りにも違いすぎるだろう？

彼にはそう思えて仕方ない

（いや、でも、確かに憑依モノとかに付き物の『憑依前人格との関係性』が無かったな・・・）

声の主の言葉に従えば、その疑問への解答はひどく単純、『無くて当たり前』だ

何故なら、憑依前のザフィーラこそが、今のザフィーラであるのだから

声の主はうつむと頭を捻るザフィーラに対し、淡々と事実だけを述べる裁判官ように言葉を連ねてゆく

【当事者として納得できないのも無理はない。完全な上位存在である私にも『何故』『どという理屈で』そうなったのかは理解できていないのだから】

（なんか、ややこしいことになってるみたいだなあ・・・我ながら訳が分からん）

【案ずるな。湖の騎士が見立てたとおり、その変化がお前に及ぼす弊害は今の所観測されていない。そして、現時点では変化したお前が主に害をなす存在ではないとも理解している。だからこそ、私はお前に接触するという選択を選んだのだ】

（そりゃあ、どーも？）

声の穏やかさから判断するに、一応信頼されているらしい

初対面の幽霊（仮）、しかも夢の中で信頼とかされても、どう反応すればいいの？と言わんばかりのザフィーラだったが、一応礼を言っておく

【・・・さて、そろそろ終いとしよう】

（あれ？もう居なくなるのか？別に朝までまだ時間はあるんじゃない？）

【一晩中話し込むつもりか・・・？どうやら予期していたよりも長く話してしまったようだ。主よりも、お前と話す時間が長かったと言うのも複雑な話ではあるが・・・ザフィーラ】

去るという幽霊（仮）は、最後に改めて彼の名を呼んだ

（何かな？）

【私は、昔のお前をよく知っている。お前の、主への忠義は変わっていないはずだ。疑いはしない、だが、改めて・・・ただ、主だけのために在ると、悲しませないと誓ってくれないか】

支えることすら出来ない私の代わりに

ザフィーラには、そう聞こえたような気がした

そしてザフィーラにとって、そんなもの言われるまでもないことだった

（当たり前だろう？はやてちゃんを、あんな良い子を泣かせてたまるかよ。一応、俺だって男で、大人なんだから。ちっさい子供を守ってやるぐらいしないと、年上である意味がない。それに、多分これは俺以外のみんなも思ってることだよ）

武力はシグナム、ヴィータには及ばない
知識や技術も、シャマルには及ばない

だが、それでもザフィーラは、『家族』と言ってくれる少女を守りたいと願っている

ヴォルケンリッター一同の願いは、皆同じ

優しい少女のための平穏な日々を守ることだ

勇ましくもあるその言葉に安心したのか、声の主は幾分か明るさを増した声を返す

【・・・有り難う、その言葉、信じよう】

（いえいえ、そんなお礼を言われるのは恐縮の至り・・・）

【そうだ、お前が気にしていたことを一つ、教えてやろう】

（ん？何？）

【ヴォルケンリッターには、それぞれの武器 デバイスが設定されている。勿論、お前にも。私が保証しよう】

（ ！マジか！！ひゃっほう！）

ザフィーラは思わぬ嬉しい言葉にテンションが妙なことになった
暗闇の中で思わずガッツポーズを決めてしまうほどには
（シャマルさんが調べてくれてるって言ってたし、これは、夢の『
ザフィーラ専用デバイス』がマジで実現すると！？ひゃっほう！）

【そんなに喜ばれるとは思わなかったが・・・】

（何を仰る幽霊（仮）さん！ステゴロザフィーラも確かにカッコいいかもしれないけど、やっぱ魔法使えるならデバイス使うのもロマンでしょ！！デバイスはロマンだよ、兄貴！！）

夢だからといって欲望に忠実な男である

ネタが通じるかも分からない相手に思考が駄々漏れていることすら
気にかけていない

そして、声の主はこの短時間でこの『ザフィーラ』の新たな性質に
対処しつつあった

【私は兄貴では・・・いや、気にしまい。さて、どうやらここまで
のようだ】

即ち、気にしたら負け故のスルーであった

（ああ、うん。あ、そう言えば、君は結局誰なわけだ？俺の夢にし
ては、俺の知らないことが多すぎたし）

はて、と今更ながらに首を傾げるザフィーラ

本来ならば真っ先に気にならなければならぬ事柄だが、雰囲気
流されていた彼は今の今まで聞き出せなかったのだ

さてお別れだという際になって初めて、ザフィーラは幽霊（仮）へ
とその正体を問いかける

【・・・私は　　いや、この答えに意味はない。目が覚めたその
時、お前は私を、この一時を覚えてしまい】

悲しげに、諦めに彩られた彼女の声は、先程はやての安らぎを願っていたときよりも、無機質に立ち戻っていたように思える

それが、曲がりなりに一端のジェントルマン気取りであるザフィーラには、少し寂しかった

（そんな寂しいこと言われてもなあ・・・）

【私はお前達と共にある。だが、お前達と交わることは無いだろう
或いは、そんな未来が来るならば、その時にこそ
】

（あ、ちょ、待・・・）

消えゆく声に思わず手を伸ばせば、ザフィーラは、闇の向こうに薄く光る白銀の煌めきを見た気がした

「
待ちよしっ！！？」

自室のベッドにて、ザフィーラは飛び起きた

割り当てられた部屋は八神家二階の南の端、日当たり抜群の六畳間
どこかしらの方言らしき言葉とともに、虚空に手を突きだして目を

覚ました部屋の主は、しばし呆然としていた

「・・・っ、む？何を、誰を呼び止めたんだ、私は・・・？」

よく分からないが、何か夢を見ていたらしい

しかし、その内容は、一部だけが記憶に残るだけで殆どは思い出せなかった

「確か、私のデバイスは有ると、言っていた・・・のか？」

銀の髪をくしゃりと掻きつつ、むむむ、と唸るも、それ以上は思い出せない

（なんか誰かから大切なことを聞いたような・・・ないような？）

時間はまだ日の出ず、おそらく四時半ぐらいだろうか
小鳥の鳴き声が耳に入る

「・・・まあ、いい。気にしても仕方がない。起きるとしようか」

普段より少しばかり早い、二度寝するには些か眼が冴えすぎている

ザフィーラは凝り固まった首をコキリと鳴らすと、ベッドから起き上がるのだった

二日後。

この日はザフィーラの仕事場は追い込み時であり、一日中仕事のシフトが入っていたので帰宅したのは既に日が落ちた後だった

いつものように帰宅しはやてから劳いの言葉を受け、いつものように夕食を済まし、団欒し、そして風呂に入って、さて眠ろうかという時

「ザフィーラ、今いいかしら？」

「む、シャマル。どうした？」

「一昨日話してた貴方のデバイスについてなんだけど・・・」

そう言われ、ザフィーラはピクリと耳を動かした

「む、何か見つかったのか？」

そう言えば二日ぐらいで出来るとか言っていたことを思い出し、ザフィーラはシャマルに促されるまま、ホイホイと着いていった

既に就寝準備に入っていたちびっ子二人は居らず、シグナムも風呂リビングには二日前と同じくシャマルとザフィーラだけだ

そして、ソファに腰を下ろしたシャマルはザフィーラの問いに、「ええ」と答える。

「予想したとおり、闇の書内のパーソナルデータ、その一部に貴方のデバイスデータは確かに存在したわ」

「それは重畳。して、使えそうか？」

「問題ないわ。少し複雑なデータ構成だったから思ったより探查に時間はかかったけれど、見つけてしまえば後は組み立てるだけだったから」

「そうか・・・礼を言う、シャマル」

ザフィーラは、もたらされた吉報にほうと一息つく

薄く残っていた曖昧な夢の記憶では確かに肯定されていたが、実際に成功したと言われれば、それはそれで安心だ

（いやあ、まさか二日ぼっちで手にはいるとは。シャマルさんマジ

感謝っす)

うんうんと頷くザフィーラに、シャルはほんわりと笑みを浮かべる

「あらあら、まだ実物を見てもいないのにお礼は受け取れないわね」

「む、そうか。では、現物は？」

「はい、これよ」

そう言っただけでシャルが懐から取り出したのは、蒼い光沢のブレスレットだった

身を飾る装飾品と言うよりは、修行者等が身につけている法具の様な、どこか武骨さが際立つ腕輪

その光沢も淡く鈍い蒼であり、まさにザフィーラのイメージに合わせたような外見だった

「ほう・・・これは」

「待機状態は腕輪ね。スペックデータは登録してあるわ。説明するよりもまずは、発動してみると良いわ」

「発動して問題ないのか？」

現在時刻は夜の十時辺り

このデバイスの形状がどの様なものかはまだ分からないが、いかにも守護騎士！な巨大盾とかだったらリビングがヤバいのでは？

ザフィーラはそれを危惧したが、勧めただけあってやはりシャマルは問題ないと頷く

「フフ、大丈夫よ。そんな物騒な形状にはならないから。形を見れば、貴方もしつくりくるところと思うのだけれどね」

「む。では」

そうして、ザフィーラは手の中のリングに魔力を込める

魔法の練習をする中で、彼は魔力流用にかけてはかなりの段階まで修得していた

例によって『ザフィーラ』の記録のお陰であつた

そのため、初めて触れるデバイスでも、起動させることに問題はなく

パシユン

「！これは」

微少な発動音とともに、そのデバイスは真の姿を、今、ザフィーラの前に現した！

「手甲だな」

「ええ、手甲よ」

意外！それは手甲ッ！！

ザフィーラのバリアジャケットに付属している、両手に被さり鈍色に光る圧倒的無骨な鉄板の小宇宙ッ

！

つまりは、見慣れたアレであつた

（・・・まあ、変に武器とか出てくるよりは、確かにしっくりくるなあ）

意外性はなかったが、ザフィーラは特に落胆するでもなく、それを受け入れた

半分素人の『彼』が使うには、二ヶ月とは言え付き合ってきた相棒こそが一番落ち着く形だ

（ぞこぞのオリ主みたいに聖剣とか魔銃とか出ても、困るだけだしなあ。

うん、いいじゃないか）

よく見れば、鉛色一色だったそれには、両サイドにどことなくオサレな感じの蒼いラインが入り、手首の辺りにはカートリッジバレルと思わしきギミックが追加されていた

（なかなかカッコイイんでないかな？）

少々メカメカしくなった相棒に、ザフィーラは満足だった

「ふむ、確かに、手に馴染む」

「でしょう？私もデータを見たときは納得したわ。この形が一番貴方に合っているんじゃないか」

シャマルも満足げなザフィーラの言葉に相打つように、言葉をつなげる

「スペックを説明すると、見ての通り、その子は鉄甲型アームドデバイス。非人格搭載型ではあるけれど、瞬間処理速度は人格搭載型のそれを上回るほどに効率を重視されているわ。また、カートリッジ搭載型だから、より強固な障壁を張るための出力も確保しているわ」

「非人格搭載型か。まあ、私の本分は防御と支援。確かに処理速度が高いというのは強みではあるな」

シャルマル曰く、これは攻撃に際して自動的に防御するといったオート機能などではなく、あくまで使用者が発動する魔法の演算を高レベルで補助する代物らしい

（んー・・・アニメみたいなデバイスとの掛け合いができないのは残念だけでも・・・つまりはストレージデバイスみたいなもんか？）

インテリジェンスではなくとも、意志はなくとも、戦場では自らの命を預ける相棒には変わらない

カッソカッソと両の手甲を打ち鳴らしながら、ザフィーラは考える

寡黙で武骨の男

そんなザフィーラにこそ相応しい一品ではないか

「でしょう？これで魔力障壁と併用した遠隔魔法を使うのも楽になると思うわ」

「うむ、パーフェクトだ、シャルマル」

「フフフ、感謝の極み、ってね」

想像していたよりも相性の良さそうな新たな相棒に、口元に笑みを浮かべたザフィーラは茶目っ気たっぷりにシャルマルに労いの言葉をかけ、シャルマルもふわりと笑いながらそれに答える

「どうした二人とも、もう夜も ん？
ザフィーラ、それは？」

そこへ、風呂から上がった我らが烈火の将が加わった

リビングで和気藹々と笑いあう二人に、シグナムは不思議そうな顔を見せるが、ふと、ザフィーラの腕にある存在に目を留めた

「おお、シグナム。実はな ー」

先日のシグナムとの遣り取りをシャマルに相談し、そして新たなデバイスを手に入れた経緯を、二人はシグナムへと伝えた

そうすると、ああ、と納得した風に声を漏らしたシグナム

「やはり闇の書から見つかったのか。良かったじゃないか、ザフィーラ」

「うむ、だからこそシャマルに礼を言っていたところだ。礼に悖っては、ベルカの騎士として名折れだろう」

「もう、だから気にしなくて良いのに。ザフィーラったら」

「そうだな、確か道場で聞いたのだが、この国には『親しき仲にも

礼儀有り』という格言があるそうだ。良い言葉じゃないか」

デバイスを仕舞ったザフィーラ達にシグナムも加え三人で取り留めもなく話していると、シグナムがふと疑問の声を上げる

「ん、そうだ。ザフィーラ、そのデバイスの名は何と言うんだ？」

「む、そう言えば聞いていなかったな・・・」

「お前・・・自身の相棒の名にぐらい興味を示すものだろう・・・」

うつかりだぜ！とばかりに間の抜けているザフィーラに、シグナムが白い視線を送る

むう、と唸り苦笑いを浮かべながらも、ザフィーラはその視線を甘んじて受けた

「してシャル。コイツの名は？」

「・・・あー、そのう」

「シャル？」

二人の会話にピクリと肩をふるわせ、何やら言いよどむシャル

どうしたのかとシグナムが声を掛けるも、イマイチ反応が芳しくない

「・・・何かあるのか？言い淀むような、何か」

「うん、まあ、そのね。その、確かに名前も登録されていたんだけれど・・・」

言葉を選びつつその緑の眼を泳がせるシャルマルに、残された二人はさらに首を傾げる

（どしたんだ？シャルマルさんの気に入らない名前とか・・・？いや、でも俺のデバイスだしなあ）

内心でもシャルマルの態度に疑問を感じ、ザフィーラはとうとうシャルマルへと聞いてしまった

「ふむ。その、『登録名』とは何と？」

「・・・『ナックトフロント』」

「・・・ナックト」

「フロント・・・？」

ザフィーラとシグナムはその言葉を吟味した

余談だが、このザフィーラ、体の蓄えた知識のおかげで、ベルカ語も問題なく理解できるのだ

そして、その頭が弾き出した、その名の意味は

N a c k t 裸の

H u n d 犬

『裸の犬』

空気が凍るとは、まさにこのことが

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「と、登録名を、変更、しよう、か・・・」

「そう、ね・・・」

「ああ、そう、するといい・・・」

なんか変な空気のまま、三人はザフィーラの相棒に相応しい名前を
考えるのだった

初秋の夜は、思ったよりも冷え込むようだ

蛇足・・・一時間の議論の結果、ザフィーラの手甲には『シュツ
エン・フォウスト（守護者の拳）』という、何とも当たり障りなく
素晴らしい名が与えられた

（誰だ、デバイスの名前付けたバカヤロウ・・・ああ、初代の夜天
の主か。そうか、そんなにザフィーラ嫌いだったのか・・・）

ちくしょうめ！

続く

第八話 『悪いなの 太、このデバイス三人乗りなんだよ!』 (後書き)

ご推察の通り、夢の中の人物はあの人です

え？わからない？

またまた、ご冗談を・・・

第九話 『噂の高町家突撃報告書、或いは三つ編み少女の驚愕』 (前書き)

待たせたな！ (大塚明夫風に)

第九話 『噂の高町家突撃報告書、或いは三つ編み少女の驚愕』

服は着てます、裸じゃありません

ザフィーラです

犬ではない、狼だ！

ザフィーラです

使い魔ではない、守護獣だ！！

ザフィーラです

先日のデバイスいじめと呼べるレベルのネーミングセンスには腰を抜かしました

間接的に自分も虐められているという事実には、目をつむります

ザフィーラです・・・

ザフィーラです・・・

ザフィーラです・・・

カチ込め！ザフィーラさん第九話 『噂の高町家突撃報告書、或い

は三つ編み少女の驚愕』

「悪いなシャル。付き合わせてしまつて」

「構わないわよこれくらい。それに、お隣の奥様に聞けば評判のお店らしいじゃない？一度行つてみても損はなさそうなもの」

九月初旬、水曜日

ザフィーラとシャルは小高い丘へと続く道を歩いていた

繁華街から延びたその道の先にある住宅街、ここを抜けたその先に、この日の目的地があつた

「ふむ、確かに繁盛はしているらしいな。平日にもかかわらず客が列を成すとか。私もそう聞いた」

「あら、誰か知り合いが行つたことあるの？」

「ヴィータに付いて行つた時に、吉田老人が孫娘にケーキを買つたと仰つていたのでな・・・」

「ああ、吉田のお婆ちゃんね。そういえば、今度ヴィータちゃんがゲートボール大会に出るつて行つてたわね。随分はしゃいでたけれど、ご迷惑とか掛けてないかしら？」

少しばかり気にかけて様子の問いに、ザフィーラは一考するも、すぐに問題ないなと結論づける

「む、老人方も孫のようにヴィータを可愛がっていたからな。苦になるどころかむしろ微笑ましいと仰られていた。彼等には頭が下がる思いだ」

「そうねえ、確か大会は再来週だったかしら？はやてちゃんやみんなで応援に行くから、その時にお礼と挨拶をしておきましょう」

是非見に来てくれ、と

先日、嬉しそうに主である少女に報告していた小さな盟友を思いだし、シャマルは顔をほころばせた

「うむ。すっかり母親役が板についたものだな、シャマル」

相づちと同じくしてそう指摘したザフィーラ

シャマルは、その言葉に「そうかしら、」と返し、金髪をふわりと揺らしながら軽く微笑む。

「昔からみんなのお母さん役は私だったわよ？誰が整備やら補給やらを担当してたと思ってるの」

「む、そうだったな」

「でも確かに、今回の顕現ではいつも以上にお母さんらしいかしらね。私だってまだまだ若いのに・・・」

「・・・まあ、それだけ郷に馴染んだということだろう。悪いことではない」

「フフ、ええ、そうね」

とりとめもなく会話を続ける二人は、さながら有閑に散歩に出かけたおしどり夫婦のように

一定の速度で、ゆつくりと歩を進めていく

それは平日の住宅街静かな街並みも合わさって、実に穏やかな雰囲気気がたゆたっていた

・・・その片割れは、ザフィーラは、その実決して穏やかとはいえない内心であった

（来ちゃったよ、とうとうこの日が来ちゃったよ・・・!! お、落ち着け、俺。ビークール、ビークール・・・!!）

気を抜いたら動悸息切れにぶっ倒れてしまいそうなほど、ザフィーラの心臓は高鳴っていた

その原因たる目的地まではまだ一キロほどあるというのに、まさにノミの心臓である

（いつかお邪魔しなきゃいけない・・・そう、規定事項なんだ。美由希ちゃんにも約束したんだし、行かないのは失礼だもん・・・大丈夫、大丈夫、今日は平日！時は午前！高町家三女は小学校！！かちあう道理は毛頭無いっ！！）

かつてのメガネっことの約束を律儀にも遂行するために、ザフィーラは今日、ご町内でも評判の翠屋へと出陣する

かねてから決めていたことであり、回避は不可能

まるで戦場に死に行く若武者のような心境で、ザフィーラは今朝、家を出た

あらゆる二次創作で悪鬼羅刹魑魅魍魎の巣窟と化している海鳴市

中でも月村家と双壁を成すほどの危険スポットといえる場所こそが、喫茶・翠屋

かつては不破の仕事人にして、店を支配する一家の大黒柱、高町士郎人外の嫁と魔王の妹を持つナチュラルボーンエロゲ主人公、KYO UYAこと、高町恭也

張り付けた仏の笑みの裏には翠屋の影の支配人たる威圧を秘めた、

高町桃子

あとおさげのメガネっこ

将来の魔王が不在とはいえ、そこに乗り込むのは生半ではない覚悟が必要である

（ちよっとお邪魔して、居るなら美由希ちゃんに挨拶して、手早くヴィータちゃん達へのお土産にケーキを買って、八神ザフィーラはクールに去るぜ　　よし！完璧な作戦だ！）

悠々と歩を進めながらも何度も繰り返した流れるような脳内シミュレーションの出来に、ひとしきり満足する

（あの店は敵地！敵軍は強大！自軍は寡兵！作戦想定はどれほど積んでもたりぬほどよーッ！！）

ぶっちゃけた話、ザフィーラのビビりすぎである

かつての世界で二次創作を読み過ぎた彼の妄想による産物が殆どであり、実際のところ、この世界の翠屋にそんな変態的な過剰戦力はない

これもある種の被害妄想といえるのかは疑問だが、少なくとも、ケーキを買いに来た客に問答無用で神速で切りかかるような世紀末な喫茶店では、断じてない

ザフィーラが気をつけることは、なるべく高町なのはというストーリー軸的に主人公格の存在に、自らの存在を知られないようにするだけでいい

元来のビビリ癖が、遺憾なく発揮された結果が、内面でラリホーしてる今の彼であつた

（問題はない。万全、万全っ……！圧倒的万全っ……！覚悟は、決めたっ！）

ざわ……ざわ……

キリッ！と効果音をつけるに相応しいようなザフィーラの覚悟であつたが、そんなものは出がけに

『シャマル、用がないのなら、一緒に出かけないか？』

と援軍を求めてしまった程度に、薄っぺらな覚悟（笑）であつた

援軍シャマルは、味噌が切れているためその買い物の荷物持ちを交換条件として、快くこれに同意した

白の半袖ブラウスに緑のロングスカート、近頃愛用しているパール色のハンドバックを持ち、軽くお出かけという出で立ちのシャマル
藍色のカッターシャツに黒のスラックスを合わせ、シックな服装に

バンドナは不似合いなため、銀髪を撫でつけてなんとかイヌミミを隠しているザフィーラ

外見不相応の精神的内面も相まって、二人の醸し出す空気は先述したようにまるで息のあった老夫婦のようである

ザフィーラ自身は自分のことで精一杯だし、シャマルもお互い特に意識するような間柄ではないとリラックスしている

他人から見た自分たちの評価なんてものは、全く意識の外にある二人だった

カランコロン

「いらっしゃいませー」

シンプルながら小洒落た押し扉を開ければ、客を迎えるベルの音と、店員の声が聞こえた

「あら、噂通りに素敵なお店ね」

「そう、だな」

翠屋に着いた二人は、店内へと足を進めた

昼前と言うこともあり、込み合う時間帯から外れた店内は、落ち着いた雰囲気を持って二人を出迎えてくれた

すると、カウンターの向こうからゆるるかな声が掛けられる

「いらっしゃいませ、お二人様ですか？」

にこやかなスマイルでそう言ったのは、第一関門

『翠屋総帥』

『不老奥様』

『魔王の母』

『エロゲの主人公の母親は総じて美女』

など、数々の異名を持つ女 高町桃子！！

（これは噂に違わぬ美人さん・・・いや、シグナムさんとかシャマルウでもう慣れたよ。美形が多すぎて逆に何が美形か分からなくなってきたな・・・）

彼女を見たザフィーラの第一印象がそれである

緊張転じてどうしようもなくどうでもいいことばかりが頭に浮かぶ

（次元犯罪者とかにはヒッター！に世紀末な不細工面とかいないんだろうか？

しかし、スカリエッティもなんだかんだイケメン。オッサンキャラもダンディばかり・・・メリハリが無いってのもつまらんよなあ）

「お客さん？」

「・・・む？あ、ああ、すみません」

「気にしないで下さい、彼、時々ぼつつとする癖があつて」

不審に思ったのか首を傾げる桃子に、ザフィーラは我に返った

何度が体験し既に慣れてきていたシャマルは、特に狼狽えるでもなく手酷いフォロー

「それはまた変わってらっしゃるわねえ・・・ああ、すみません。お二人でしたね、ご案内します」

「む、いや、我々は・・・」

ザフィーラの予定では、ここに長居するつもりはない

（美由希ちゃんは・・・いない、か？）

店内を見渡す限り、姿がないメガネっこ

高校生でもある彼女は、平日故に今は学校だろう

ならば挨拶は不可能

来たことで美由希への義理は果たしたのだし、後はとつととおさらばするためにも、手早くお土産を買っただったのだが

「そうね、折角来たのだし、少し休憩していきましようか？」

（シ、シャルウウウウウ！？）

ところがどっこい！

なんと計画を打ち砕いたのは援軍であるはずのシャルだった！

「いや、まだ買い物もしなければいけないのだし、ここは主達への土産を買っただけ・・・」

「あら、時間はまだ大丈夫よ。いつものお店からそこまで離れていないもの」

「いや、その、だな。ほら、あれだ。ヴィータ達が帰ってきてしまいかもしれんではないか」

「はやてちゃんとヴィータちゃんは、シグナムと一緒にサイクリングに行ってるでしょ？帰ってくるのは夕方になると言っていたから、大丈夫よ」

（そうだったあああーっ！？）

そう

車椅子では得られない自転車の疾走感にハマったはやては、あれ（七話参照）以来自転車の鬼となっていたのだ

主が望むことに応えるが騎士の一分！！とばかりに自転車漕ぎ機と化したシグナムを動力に、ママチャリ 名を、『はやてサイクロン号』 の荷台に載りこみ近頃は海鳴市内を爆走しているのだ

この日も、暇そうにしていたシグナムと、自らも自転車を楽しみだしたヴィータ 彼女の愛機、名を『ヴィータイフォン号』をお供に、サイクリングに揚々と出かけていった

『さあ！風になるでヴィータ！！世界を目指すんやシグナム！！』

『はっ！！』『応っ！！』

そんな声が、ザフィーラの犬耳にリフレインしてきた気がした

（うぐぐぐ・・・！？）

「たまには喫茶店でお茶するのも、いいじゃない」

シヤマルにそう締めくくられ、反論の余地を無くしたザフィーラは、諦めて勧められた席に座り込むのだった

「ご注文はお決まりですか？」

「じゃあ、私はケーキセットと、紅茶を」

「……………コーヒーを。それと、チーズケーキを」

「はい、かしこまりました、少々お待ち下さいね」

接客などバイトにでも任せても良さそうなものだが、今は居ないのか、パティシエ自ら注文をとり、厨房へと消えていった

去っていく桃子を見送りながら、一息着いたシヤマル

そして、いつになくそわそわしているザフィーラをちらりと見る

「ザフィーラ、どうかしたの？」

「む、いや、そんなことは、無い、うむ」

（見るからにおかしい・・・）

歯切れの悪い彼に少し不信感を抱く

思えば、ザフィーラから「出かけないか？」などと誘われたのは、初めてである

守護騎士という気の置けない間柄である割に、自分たちにもあまり隙を見せないザフィーラがこれほど落ち着きがないのが、シャルには気になった

そんなシャルの内心を察したのか、ザフィーラはぽつりと呟く

「いや、な。前に話しただろう、ここの御息女に誘われたのだと。どうも学生だったようで今は居ないが、居たのならば一言掛けようかと思っていただけだ」

「ああ、前に言ってた子ね。ビルの鉄骨から助けたんだったかしら？」

「まあ、彼女ならば恐らく私が手助けせずとも無事だっただろうが、お礼に是非と誘われては、無碍にもできまい」

「当たり前じゃない。そんなことしたらあなたは乙女の敵よ」

呆れたようなシャルに、苦笑じみた表情を返すザフィーラ

「まあ！あなたが美由希の命の恩人さん？」

そこへ、三人目の声が挙がる

「む、早いですね。まだ注文してから二分と経っていない」

見当違いなザフィーラの声に、桃子はにこやかに返す

「それはもう、お客様をお待たせするようなことは致しませんわ。それよりも！失礼ですが、あなたがザフィーラさん？」

「そうですが」

「娘を助けていただいて、本当にありがとうございました！」

「ああ、いや・・・」

「どうしたア桃子オオウ！！」

少しばかり大きな声を出した妻を心配したのか、扉を蹴破らんばかりの勢いでもって、厨房の奥からエプロン姿の男が現れる

『高町家大黒柱』

『御神の剣士』

『娘命のバカ父』

『あのKYOUYAは儂が育てた』

魔王の父、高町士郎である

（げえっー！？）

ザフィーラはテンパった

（む、『娘に因縁付けやがった野郎はどいつだ！？』とか絡まれま
せんように！『俺の嫁に手え出してんなよゴルァ』とか絡まれませ
んように！！）

無神論者の癖に凄まじい他力本願で天に祈りだした彼をよそに、夫
妻は言葉を続けた

「あなた、この方が美由希を助けてくださったザフィーラさんよ」

「おお、あなたが！その節は本当に、娘がお世話になりました！」

こうして並べば、なんともその若々しさが際だって見える夫妻である
これで二十歳近くの子供が居るというのだから、某ボクシング世界
チャンプの様に『すごいね、人体』と言わずにはいられない

（すげえや、さすがエロゲ主人公の両親設定・・・）

真摯に礼を言う二人に対した受け手の脳内は、いつまで経っても阿
呆であった

「あの子から話を聞いたときはすぐにでもお礼に伺いたかったんですが、あの子ったら名前しか知らないと言つものですから・・・本当に、ありがとうございました」

「私も父として、感謝の言葉しかありません。家族を守っていただき、心から感謝しております」

頭を下げる夫妻からは、娘の危機を救つた相手に対する、言つ通り心からの感謝の気持ちが感じ取れた

丁寧は礼を言う彼女らに、過ぎた謙遜はトラブルの元かと考え、さすがにザフィーラも素直に礼を受け取る

「いえ、大したことはしておりません。今日は娘さんにお誘いだきこの店を訪ねさせていただきました」

「そうでしたか。お礼と言つては何ですけど、当店自慢のケーキを是非召し上がって下さい」と、申し遅れました。私は高町士郎と申します」

「む、では改めて、八神ザフィーラです」

笑顔でそう述べる士郎は、実にダンディである

負けじとザフィーラも丁寧に自己紹介

挨拶は社会人の基本である

サラリーマンだろうが、ガテン系だろうが、魔法使いだろうが、犬だろうが、その原理は不変なのだ

「これはどうもご丁寧に・・・おや、そちらの方は？」

ここでもうやく、空気になっていたシャルマルに夫妻の注意が向いた桃子が慌てた風にシャルマルへと向き直る

「すみません、お連れの方がいらっしゃるのに、お邪魔をしてみました」

「いえ、構いませんわ。この人がお宅の娘さんから御招待を受けたようで、ご一緒させて貰ったんです。お噂はかねがね聞いておりましたもので、かねてから一度寄らせて頂くかと思っていまして」

「あら、そうでしたの？あの子ったら、大事なことを言わないんだから。そういうことならこちらも用意ができたのに・・・ああ、ごめんなさい。申し遅れました。私は、美由希の母でこのパティシエを務めております、高町桃子と申します」

「あら、これはご丁寧に。私は八神シャルマルです」

奥様方は奥様方で話が合うようで、地味に世間話にシフトしだしている

オホホ、フフフ

口許に備えた手が実に優雅な雰囲気醸し出す
しかしシャルマル、物腰が見事に若奥様である

こちらはこちらで土郎と会話していたザフィーラは、桃子が持ってきたままに放り出されていたケーキセットが目に入った

そして、その視線を追った土郎が、気づいたように妻に声を掛けた

「桃子、一旦その辺りで。さて、八神さん。お時間を取らせてしまつてすいませんでした」

「いや、お気になさらず。それに今は営業時間中だ。厨房を空け続けるのも何かとご迷惑でしょうから、私たちにはお構いなく」

現在は昼前とは言え、ちらほらと客足も近づく頃である

確かに、店主夫妻が厨房を開けっ放しというのはいささか問題だろう

そんな気を使うザフィーラに、土郎は申し訳なさに苦笑した

「はは、すみませんね。それでは、ゆっくりなさって行って下さい」

そう言い残し一礼すると、高町夫妻は厨房へと戻っていった

「さ、じゃあいただきますようか」

「うむ、頂こう」

どちらともなく居住まいを直し、カチャリと音を立てて、ザフィーラはチーズケーキにフォークを入れる

タルト生地をベースとしたそれは、サクリとした感触をもってフォークを受け入れる

手頃なサイズに切り分けられたそれを、ぱくりと一口

「む／あら」

顔を上げれば、同じようにケーキを口に運んでいたシャマルと目が合う

「これは、美味しいな」

「ええ、本当、美味しいわね」

思わず口元をゆるませる、八神家の二人だった

思わず笑みがこぼれてしまう程に美味な甘味と、店の雰囲気が相まってザフィーラ達はリラックスしていた
おかわりした紅茶をこくこくと飲み干し、シャマルは満足げに一息つく

「ふう、噂に違わぬ味だったわねえ。お土産、ヴィータちゃんは特に喜びそうね」

「アイツはこう言ったモノを特に好むからな。さて、頃合いだろう。そろそろ出るか」

あれから30分程経ち、さてとばかりに席を立とうと腰を上げた、その時

カランコロンと、ベルを鳴らす音がした

「お母さん、手伝いに来たわよー」

「いらっしゃ あら、美由希。学校は終わったの？」

「うん、今日は職員会議とかでね、お昼終わりなんだってさ」

そう言いながら店内に姿を表したのは、ザフィーラには見覚えのある少女、高町美由希

「一応、お店のお手伝いにね。まだお昼前だからお客さんすくないだろうけど」

厨房から顔を出した母と言葉を交わしていた彼女は、あまり客入りのない店内を見渡し

「あっ！」

見知った顔を見つけ、目を見開いた他でもない、ザフィーラである

「ザフィーラさんっ！来てくださっ たんですね！」

「やあ、美由希嬢。丁度身をもて余していたところだったので、寄らせて貰った。ここのケーキは君の言った通り絶品だな。良いご両親を持たれた」

「はい！うちの自慢のお母さん達ですから！」

ぴよこぴよこと三つ編みを揺らしながら、美由希は明るい笑顔を見せた

ザフィーラはしばらく歓談と洒落混むかとも考えたが、席を立ったばかりの連れを放っているわけにもいかない

「さて、では私たちはこれで帰らせていただく。馳走になった」

「えっ、もう帰っちゃうんですか？・・・『私たち』？」

美由希が首をかしげると、そのままザフィーラの後ろに控え、にこにこ笑みを湛えていたシャルを視界に納め 固まった

「あ、えと・・・あの、そちらの、方は？」

「初めまして、私、八神シャルと申します。あなたが美由希さんね？ザフィーラから話は聞いてるわ」

「あ、え、ええ・・・え？あの、それで、お二人は・・・え？」

「・・・？」

急に動きがぎこちなく、まるでブリキのロボタックになってしまったかのような美由希

シャマルはどうしたのかと視線をザフィーラに送るが、彼とてまったく分からなかった

ついにはお下げがしょんぼり、本体もしょんぼりし始め、どうしたのかと声を掛けようとしたザフィーラは、裾をぐいと引っ張られるそちらに目をやれば、責めるような視線のシャマルがなにやら小声でひそひそと話しかけてきた

「ちょっとザフィーラ、あなたこの子に何したの？」

「・・・思い当たる節は無いが」

「嘘おっしやい。見るからに落ち込んだじゃってるわよ、彼女？」

「むう・・・？（マジに、なんかしたっけなあ？）」

唸って件の少女をこっそり見やる。少しばかり俯き、本体に呼応するように下がり気味だった美由希のおさがが、きりつと力を持つ

生きているのかと突っ込みたいが、アニメなんて大概そんなものだ
気にしては負けという奴だ

「あ、あの、お二人はご兄妹なんですか？」

おずおずと口を開いたかと思えば、ビジュアルにかなり無理のある可能性を問いただす美由希

どんな血筋の持ち主なら銀髪褐色と金髪碧眼の兄妹が誕生するのか、遺伝学の神秘的に興味をそそる命題ではあるが

致命的な回答を遠回しに避け、大ダメージから逃れようとする本能的な性だろうか

一方、何故いきなりそんなことを聞かれたのか？

よく分からないザフィーラは素直に、NOと答える他ない

「いや、兄妹ではないが・・・」そう言えばシャマル、私達は血が繋がっていただろうか？」

ふと疑問に思いシャマルに念話で投げ掛ければ、何を馬鹿なことをと言わんばかりの白い視線が返される

目が口よりもものを言っていた

まあ、考えればわかることだ

古代ベルカの素体がどうあれ、人間と狼では血の繋がりようがない

「『生憎ですけど、私オオカミさんを母に持った記憶はないのだけ』ええ、兄妹ではないわよ」

あくまでにこやかなシャマル

そこには悪意の欠片もなく、ただ真実を言っているだけである

「・・・」

⌈
•
•
•
⌋

「……（何故黙り込むし）」

しばしの間

ザフィーラはこの沈黙にはやくも耐えられそうになくなっている

「じゃあ……」

ポツリ言葉が漏れた

意を決したよう瞳でもって、しかし恐る恐る、美由希は尋ねた

「お一人は、恋人かなにかですか……？」

•
•
•
•
•
•
○

（はい？・・・ああ、そうか、そういう見方でもできないはない、ってか）

い や い や い や い や い や い や

美由希の聞きたいことを理解し、ザフィーラは思わずそう言いながら首と手をフルスイングしなくなった

（これは俗にいう・・・『愛人との浮気現場が見つかった夫とその妻の図』ッ！！修羅場！圧倒的修羅場！！）

断じてそんなことはない

何故か彼の脳内では、犯してもいない浮気を自らに課し、知り合いでしかない少女を妻に据える妄想シュミレーションが完成していた
どう見てもドラマを見すぎた脳ミソのオーバーフローである

「・・・！」

一方同じ言葉をぶつけられたシャルも少女の言いたいことを察したらしく、軽く目を見開いて

「私たちの、関係ねえ？」

ニヤリと

今までのにこやかなそれとは質の違う、しかしそれでいて満面の笑みを顔に張り付けていた

テンパるザフィーラは見逃した

おっとりとした彼女の瞳が、一瞬にしてぎらりとした、意地の悪い光を放ったことを

そう・・・シャルのターン！！

「うーん、この人とは血は繋がってないけれど」

「・・・」

「『大切な家族』には違いないのよね」

「・・・ッ!? そ、それは」

「世間一般的な呼び方は分からないけれど・・・『血の繋がらない男女であり、一つ屋根の下で暮らす切っても切れぬ仲』としか言いようがないわね」

「・・・ッ!!?」

この時、美由希に電流走るといふかにやにやと迂遠な言い回しをするシャルマルに、完全に飲み込まれていた

しかしシャルマルのターンはまだまだ終わらなかった

「あら、そろそろお昼ねえ。大変、早く帰らないと、ヴィータちゃん達が帰ってきちゃうわ（棒読み）」

「いや、夕方まウツフ」

要らないことを言いそうになったザフィーラにすかさずレバーブローサすが参謀は急所を狙うのが巧かった

（喋るなとおっしゃるか）

急所破壊とはいえ、腐つても鍛え抜かれたザフィーラの腹筋
本来マッスル派ではないシャルルのパンチでは、無様にうずくまる
ほど痛くはない

が、いくら空気の読めないザフィーラでも、さすがにこれには察し
が付いたらしい

賢明なことに、彼は金たる沈黙を貫くことにした

そんな敗北主義の犬野郎に気づかぬまま、美由希は更にシャルルの
畏へと足を踏み入れてゆく

「あの・・・そのヴィータちゃん、というのは・・・」

「ああ、『うちの子』でね。甘いものが好きだから、ここのケー
キをお土産にと思って。あ、写真見るかしら？はい、どうぞ」

そう言つてハンドバックからひょいと取り出したのは、一枚の写真
何故持っているのか

ツッコンだところで更なる突き返し（急所的な意味で）が待ってい
るので、ザフィーラは事態を静観するに止まっている

「・・・こ、これは!？」

と、写真を渡された美由希が、にわかに戦慄いた
彼女は今日、終日驚きっぱなしである

そこに写されていたのはとある家族の団らんの姿

赤い髪の女の子（推定7、8歳）を肩車しながら朗らかに笑うザフイーラ

場所はおそらくどこかの公園か

明らかに休日遊ぶ父娘の図であった

アハハ、ウフフ

そんな幻聴が聞こえてくる

あまりの衝撃に美由希は硬直している

故に、その赤い少女が見るからに抵抗していることや、ザファイラの銀髪がむしり取られそうになっているさま、また、画面の端に写り込んでいる笑いをこらえたシャマルなどは目に入っていないらしい

実際の副音声は

イタタタタ

下ろせこらあああああ

プークスクス

である

これはひどい

「『うちの子』でね、ヴィータちゃんって言うの。私たちもこの町に越してきたばかりなものですから、まだまだ目新しいものが多いからはしゃいじゃってね」

「あ、あ、あ・・・」

「あらごめんなさい。私ったら、これじゃただの『親バカ』みたいよね?」

「こ、こ、こ・・・」

「さて、それじゃあ、『うちの子達』が帰ってくる前にお買い物して帰らなきゃいけないから、私たちはそろそろお暇させていただこうかしら」

「・・・・・・・」

あながち、嘘は言っていないだけにタチが悪いシャルクオリティー

美由希は最早言葉もないらしい

しかし、御神の剣士は伊達ではない

ギリギリとぎこちない笑みをなんとか頬に張り付けながら、美由希は手にしていた写真をシャルムへと返し

「あ、はは、そう、ですか。あ、伝票おあずかりしまーす」

まずは眼前の業務をまっとうすることにしたらしい

プロ根性故なのか、現実逃避なのか判断しづらいが、この際どちらでもいいかもしれない

「はい、占めて2700円になりまーす」

「はい、これで。それじゃ、ごちそうさまでした」

「うむ、ご馳走様。では、また、美由希嬢」

そうして、お会計を済まし、土産を購入した二人は、翠屋の扉を潜っていった

「ありがとうございましたー」

この日、これより後は終始ポケーと停止し続けていた娘に、桃子はどうしたものかと首をかしげるのであった

翠屋からの帰り道、守護騎士二人はのんびりと歩を進める

後半からすっかりシャマルにペースを持っていかれ、まったく空気に成り下がっていたザフィーラに、当のシャマルはじとりとした視線を送っていた

「あなたも、気がついてない訳じゃないでしょう？あの娘も可哀想に。絶対勘違いしてたわよ、あれ」

「しかしな、『そう』なる程に親しい仲というわけでもないのだが、それに足る理由もなかるう」

ザフィーラは思い返す

何も話さなかった故によく見ていたのだが、シャルマルが話し出した
辺りから明らかに美由希は動揺していた

ザフィーラとて、鈍感の唐変木というわけではないので、シャルマル
の言う『勘違い』が何を指しているかはわかる

美由希の中ではザフィーラ達二人はアレな関係として捉えられたの
だろう

それはまだ良い

確かに、男と女が居ればそういった風に話が進みもするだろう

が、先ほどの少女とは進む以前に話しすら殆どしていないのだ

美由希があからさまな動揺を示す根幹に至った理由が、ザフィーラ
にはピンと来なかった

それに、なんというか、原作キャラ云々を今さら言い出すつもりは
ないが、『ザフィーラ』というファクターに色恋は似合わない気が
してならない気がする

「大体、お前自身も敢えて煽るようなことを・・・と言っか、全部
お前のせいだろう」

「あら、知らないの？女の子の心に理屈は通用しないのよ。それに
煽ってるなんて人聞きが悪いわね。私は少ししかかってみただけよ。
ウフフ」

ザフィーラの苦言もなんのその、年季を経た者のみが持ちうる、『
スゴ味』みたいなものを感じさせる怪しげな笑みを、シャルマルは言

葉に乗せて返して見せた

その時、ザフィーラに電流走る・・・！

（ま、まさか、うちのシャマルさん・・・コイツ、ただぼやぼやしてるだけの脇役じゃない・・・ッ！）

ウフフと妖しく笑うシャマルに、ザフィーラは驚愕した

これは、このシャマルは原作でフェードアウトした様な無害な見守りキャラではない

どじっ子であり、お医者さんでもあり、お母さんでもあり・・・その上に更なる深みを隠していたのだ

ビューティー・アクジョか？

ドロ ジョ様狙いなのか？

それではプレシアさんとキャラが被るんじゃないか？

（シャマルエ・・・）

そこまでしてキャラを濃くしたいのか

（分かる、分かるよその気持ち）

御同類の悩みと試行錯誤に、ザフィーラは目頭が熱くなるのを感じた

まったくもって無礼千万な狼野郎である

「そういえば・・・」

「どうした？」

ふと、シャルがこぼす

「気のせいかしら、他の場所に比べてあのお店、妙に魔力素が濃かったような気がするのだけれど・・・」

（ドッキンコ！！）

頬に手を当て可愛らしく小首をかしげるシャルさんの鋭い感知能力不意打ち気味な核心をついた言葉は、ザフィーラの心臓をまるで真珠湾攻撃の様に強襲した

彼はいつか不整脈で死ぬのではなからうか

「き、気のせいだろう。何故かは知らんが、魔法文明がない割には、この世界は比較的魔力素が多いからな」

守護騎士・・・特にヴィータなんかなのはをつついてクロノを出す、もとい藪をつついて蛇を出す結果になりかねない

現時点でのザフィーラ達は特に悪事は働いていないのだが、管理局からすれば『闇の書、（存在するだけで）アウトー！（デデーン）』らしいので、不用意な接触は避けたかった

やがて、「うーん……」と唸っていたシャルマルもふつと笑い

「そうよね、私の考えすぎかしら。立場柄疑り深くなってしまうのが私のクセなのよねえ」

苦笑するシャルマルの言葉に、ザフィーラはカヴァーが成功したことを知った

（アブねえ……何とかバレずに済んだかな）

騙しているようで悪い気もするが、どうせ放っておいてもあと一月もしないうちに出会うことになるだろう

主に血生臭い戦場とかで

今はそれを意識しないようにしながらザフィーラは口を開く

「お前はそれでいい。そうでなくては、我等がブレインは務まらないだろう?」

「あら、そういつてくれるのかしら、盾の騎士さん?」

「ああ、頼りにしている、参謀殿」

そう言ってお互いに目を合わせれば、どちらともなく吹き出す

シャルマルはスカートをふわりと揺らしながら、ザフィーラの前を歩いていった

「ふふ、さ、手早くお買い物して帰りましょうか。はやてちゃん達もお腹すかせて帰ってくるでしょうし。頼りにしているわよ、荷物持ちさん？」

「むう」

なんとも言えない笑みを浮かべながら、翠屋印のお土産を手には、ザフィーラはシャマルに追い付くべく足を早めるのだった

平和な、晩夏の一時である

その晩、八神はやては倒れ、病院へと担ぎ込まれた

そうして時は激流のごとき速さをもって、動き出して行く

つづく

第十話 『A・Sは一日にして成らず』

時刻は深夜二時。

とある一軒家にて、深刻な空気を纏い顔を付き合わせる四人の人影
守護騎士達の姿があった。

そこは八神家一階の居間。

はやてを新たな主とし、彼らが今世に顕現してよりこれまで数ヶ月、この空間には穏やかな笑い声が満ち満ちていた。

しかし、最早ここにあるのは重々しき、夜の帳を下ろしてなお深い絶望ばかり。

車座に座る彼らは、テーブルに乗せた一つの物体に目を落としながら、誰一人として言葉を発しない。

そこに在るは、闇の書。

彼ら四人の母体にして、所有者に絶大なる力をもたらす魔導書。

しかし、現在はいかに弱き少女の命をじわじわと喰らう悪魔でしかなかった。

そう、今代の『夜天の主』八神はやてが、闇の書の侵食により倒れたのである。

その可能性は以前より存在した
故に、覚悟もしていた。

だが、あまりにも唐突な平穏の破壊は、戦無き世界に馴染み始めて

いた彼らの心に容赦なく焦燥の楔を打ち込むこととなる。

知略を巡らすべき己が、もう少し早く気づけていればと、湖の騎士は己の見地を嘆き。

何故優しいはやてがこんな目に遭わねばならぬのかと、紅き鉄騎は怒りに震え。

渦巻く感情の一切を制し、しかし微動だにすることなく、盾の守護獣はただただ瞑目して時を待つ。

カチリコチリと、秒針が時を刻む音のみが場を支配する。やがて、烈火の将が地を這うかのように低く、ポツリと呟いた。

「
今が、選択の時だ。座して朽ちるか、外道を往くか」

カチ込め！ザフィーラさん 第十話『今がその時だ！』

「寝惚けたこと言っ てんじゃねえよ」

鈴を転がしたように可愛らしい、しかし棘のある声が発せられる。シグナムの言葉に、そう言っ てヴィータはぎろりと視線を送った。

そこに込められるのは、理不尽に対する怒りと、希望を掴み取ろうと固めた決意の気迫。

「こうなっちゃったら、そんな選択肢なんて今さらだ。あたしはやる。例えはやてに嫌われたって、ぜったいやってやる。はやてが死ぬなんて、ダメだ。それだけは、許せねえ　やるしかないんだ、あたしは」

今一度、自分自身に確認し直すように、静かに、しかし激発寸前の意気が込められたヴィータの言葉。
それは最早、彼ら四人の共有した思いであった。

是か、否か

実を言えば、主たるはやてを侵食より救う手段は、ひとつだけ残されている。

魔法収集媒体としての側面を持つ闇の書に、力を吹き込んでやること。

つまり、他者の魔力を、リンカーコアごと取り込ませることである。

ひたすらに優しく血が流れるような争いを好まないはやてからすれば、自らの命の危機だとしても誰かを傷つけることを良しとしないだろう。

守護騎士達にも、戦うなと命じることだろう。

故に、決行は極秘裏に。

決してはやてに気取られてはいけない。

騎士たるもの主命に背くなど不義の証明に他ならない。

しかし、不忠の汚名を被ろうと、彼らには引き下がれぬ理由があるのだ。

即ち、『是』一択。

何物にも代えがたき主のためならば、それこそ心を捧げたとして惜しくはない。

主のためなら名誉は要らぬ。

異を論ずる者など、ここには居ない、居るはずはないのだ。

やがて、答えを受けたシグナムがふうと息を吐いた。
継がれた言葉には、どこか仲間への信頼が滲み出ている。

「ああ、お前ならそう答えると分かっていた。その答えは我らの総意だ。先ほどの問いは、あくまで将としての確認だよ」

豊かな胸の前で組まれたままであったの腕をほどくと、同時に張り詰めていた空気もどこか弛緩していく。

シグナムという武人は、そこに居るだけで人に感じさせる凜とした存在感がある。

あるいはそれこそが、将器と呼ばれるものであろうか。

「でも、グイータちゃん」

ふと、車座の一角、これまで黙っていたシャルマルが口を開く。
常よりの柔和な笑みは浮かべておらず、今、彼女の顔にあるのは不安の念。

彼女の整った眉が、力無さげにひそめられていた。

「リンカーコアを集めると言うことは、つまり、はやてちゃんの人生を血に染めてしまいかもしれないということよ？」

「・・・言われなくても、分かってる。分かってるよ」

シャマルの言葉は、ヴィータとて痛いほど理解していた。

彼女らはこれまで、リンカーコアを求め数えきれぬ戦場を駆け抜けてきたのだ。

それこそ、殺しの法度も何もない、血で血を洗う戦場を。

だからこそ、その惨たらしさは知っている。

守護騎士の狼藉は、それ即ち主の罪と断ぜられる。

この平和の世に生きるはやてに、殺人の罪禍を背負わせることはできないのだ。

「皆、その点だけは肝に命じておけ。主はやての道を血に染めないためにも、例え何を相手取ろうと、我らが命を刈り取ることはあつてはならない」

「そう、私たちがはやてちゃんの未来を台無しにしてしまうわけには、いけないもの」

決然と言うシグナムに応じ、未だ不安は拭えずも、シャマルは精一杯の気概でもって決意を新たにした。

黙っていたヴィータも、外見不相応な真剣な光を目に宿し、力強く頷いた。

誰からともなく目線を交わせば、次第に心から沸き上がるは純粹なる頼もしさ。

我らが揃えば敗北は無し。
必ず成し遂げて見せようや。

彼女達は、幾星霜を共に戦ってきた盟友である。
さすればこそ、願いは四位一体、一蓮托生。

いつかまた、この家に心からの笑顔を取り戻すこと。

それだけを胸に、羽を休めていた戦士達は、久方ぶりの闘争の渦へと身を投じることを決意したのであった。

？

お気づきだろうか。

ここに揃うは四人の騎士。

しかし語らうは三人の女達のみ。

明らかに一人欠けている。

「おい、ザフィーラ。なんか喋れよ」

そう、黒一点・守護獣ザフィーラが黙したままであった。
それ以前に、いまだ瞑目したままである。

この流れでノーリアクションとか、マイペースにも程がある。

「
む」

「む、じゃねーよ。お前、話聞いてたよな？当たり前だよな？まさか聞いてなかったとは言わせねーぞ？」

ぱちりと目を開けたザフィーラに、ヴィータのジト目が降り注ぐ。

ここはふざけていい場面ではないことぐらい、それこそ九歳児にだって分かるだろう。

だからこそ、ヴィータの声音には自然とドスが利いていた。

流石は歴戦の騎士なだけはある、その響きは、たとえば子供の喧嘩で使おうものなら今後の学校生活は独りぼっち確定なほどに恐ろしいものである。

しかし、ザフィーラは特に気にした風もなく、言葉を続ける。
その視線の先にいるのは、烈火の将。

「シグナム」

「どうした？ まさかとは思っが、反対するか？」

つう、と。

シグナムの鷹の目が細められる。

「蒐集の対象だがな、できうる限り人間は避けるべきだろう」

その口から放たれたのは、蒐集に踏み切ることを前提とし、さらに先を論ずる言葉。

そう語りかけられたシグナムは元より、ヴィータもシャルも、ふと緊張を緩めた。

彼こそは、『盾の守護獣』。即ちもつとも主と共にある存在。

そんな彼には、主を助けられないという選択肢など端から浮かぶはずもないのだろつ。

それでこそその守将であつた。

だが、信頼は再確認できたからと言っても、彼の言葉には看過できないものも含まれていることにもシグナム達は気づいていた。

「しかしザフィーラ。それでは間に合はんのではないか？」

「ええ、確かに大型の原生生物なんかにはヒトと類似したリンカーコアもあるわ。けれど、『闇の書』は本来対人目的に作られたものだから、どうしても効率が悪くなる。はやてちゃんの容態が悪化する前に解決するならば、やっぱり人間から蒐集するのが一番なのよ」

継がれたシャルの言葉は、現状の切迫感をよく表している。

命の危険から主を救つのならば、一早くことを成すべきである。

闇の書をベースとする守護騎士ならば、それがわからないはずはない。

無論、ザフィーラとて例外ではないはずだ。

だが、三人は彼が何を考えそう言ったのかを薄々ながら理解できた。

「命に貴賤があるとは言わん。だが、少しでも『被害者』は少ないほうが良いだろう?」

結局は、そこに帰決するのだ。

『はやての未来を血に染めない』。これが四人の唯一の懸念であり、ザフィーラの提案はその可能性を少しでも減らしたいという彼なりの考えなのだろう。

動物ならば死んでもいいのかと糾弾されるかもしれないが、もとより、彼らが行うのは法的見地からすれば悪行の類いである。

万が一殺生沙汰になったとしても、それが対人間であつた場合とそれ以外であつた場合では、己や他者に与える倫理的嫌悪感は格段の差があるはずだ。

万が一彼らが捕縛され“しかるべき組織”に裁かれることになったとき、殺人罪があるかないかは大きく断罪に関与するだろう。

理想論では『命は平等である』と言えるが、大多数の人間は『殺人の有無』を問うだろう。

彼らとて百戦錬磨の騎士であるからには、やすやすと捕縛されるような真似にはなるまい。

だが、『万が一』の確率であろうが、起こりうるからには考慮すべきなのだ。

突き詰めれば、今までの平和の時間すらも、『万が一』にもたらされた奇跡のようなものである。

万が一とは、決してゼロではないことを、彼らは知っていた。

それに思い至る騎士達は、しばし沈黙した。

騎士とは本来、戦場において何よりも相手との剣を交えた命の対話を重要とする。

このような命を秤にかけるような判断は、彼らにとっては遺憾に違いない。

だが、今は騎士道を語ってられるような時ではない。

「確かに、一理ある、か」

「その状況はあまり考えたくはないわ。でも、そうね、考えないわけにはいかないわね」

主を免罪符にすることだけは赦されないが、彼らにとっては非情に徹すべき事態なのだから。

「……でもよ、だからってはやてが危険な目にあっちゃ意味ねーだろ」

ぶすりと顔をしかめながら、ヴィータはザフィーラにそう吐き捨てた。

彼女の言葉もまた真理。

万が一の可能性に囚われ、今に迫る危険で主が傷つくことも、あり得てはならない。

だが、ザフィーラはそんな彼女の不満を一刀にして切り伏せた。

「挑みもせずして弱音を吐くな、鉄槌の騎士。……主の未来も守れずして、何が守護騎士か」

「……っ！」

いつにない覇気と堅い意思を含ませたその物言いに、ヴィータは鼻白んだ。

彼の言葉は一見すれば、主の意思を盾にした責任逃れにも聞こえる。だが、彼の性格からすればそれはあり得ないはずだ。

そして、ヴィータは気づかされた。

最愛の主であるはやてが倒れたということに、自分は思う以上に焦っているのではないか？

拙速に甘んじ、急いたが為に仕損じるようなことがあれば、その時自分はどうするのか。

焦りが功を奏することはない。

それが戦場ならば尚更だ。

(……ちっ)

ザフィーラは言った。

挑みもせずして諦めるのかと。

そうじゃない。鉄槌の騎士ヴィータとは、そうではないはずだ。

いかなる絶望にもいの一番で切り込んで行き、主の障害をその鉄槌でもって打破するのが彼女の役目だったのではないのか。

「……そこまで言われりゃ、やるっきゃないだろ！！わかったよ！やってやる！」

「ヴィータちゃん……」

心配するようなシャマルの言葉も、ヴィータの耳には届かない。実を言えば、ヴィータは何にも変えてはやてを助けてやりたい。だが、それは他の三人だって同じだろう。

それでもなお、頭に血の昇った自分が考えるよりは、冷静な三人の出した答えに従うべきだろう。

ヴィータは過去の経験上、そうすることが総体的な痛手を減らすことに役立つと知っていた。

鉄火場での一寸の駆け引きならば自分の直感に従うのが最上だと自覚していたが、大局的な思考展開では、その限りではないのだ。

口では受け入れたが態度には不満が溢れているヴィータの様子に、シグナムは苦笑しながらも口を開く。

将として、今後の指針を定めなければならない。

「ザフィーラの言うように、魔導師を相手にすることは極力控えよう。しかし、ヴィータの懸念ももっともだ。我らを邪魔立てる存在があれば、例えそれがなんであれ一切の区別容赦はしない。それだけは心に刻め」

「無論だ」

「要するに！あたしらが死ぬ気で頑張るっただけだろ！もちろんはやては死なせない！その上ではやてを哀しませない！両方やっちゃいいだけだ！！」

水を向けられたザフィーラは、しっかりと頷いて返し、継ぎ早に吐

かれたヴィータの氣勢が、この場の結論を言い当てていた。

シグナムは一つ息を吐く。

それは小さな吐息であったが、この話し合いに一段落がついたことを示していた。

「そう言うわけだ、シャル」

「ええ、任せて。リンカーコアを保持する生物が棲息する世界をチエックするわね。移動時間も考えてなるべくこの世界から近いところが良いわよね？」

「無理を言つてすまん」

何はともあれ方向が指し示されたことで前向きになれたのか、朗らかに笑って応えたシャルに、ザフィーラは頭を下げる。

次元世界の搜索や、転移魔法の行使は必然的に参謀役のシャルにお鉢が回ってしまう。

後方支援の役目として、カートリッジの作成なども、大部分を彼女に頼ることになるだろう。

自分の発言が彼女の負担を増やしてしまうことを、ザフィーラは心苦しく思っていた。

「気にすることないわ。これは私達みんなの方針よ？一度決まったことに、誰その責任だなんてことはないわよ」

それにね。

シャルは続ける。

継がれた言葉に、残りの三人は誰からともなく顔を見合わせた。

さあ、早速はじめましょう！

すっかり普段の空気を取り戻し、そう言って机の上の闇の書を手にするシヤマル。

シグナムも、ザフィーラも、気を吐いていたヴィータも、そしてシヤマルも、お互いの目を見て、笑った。

私たちはヴォルケンリッター。四人揃えば、敵はない。でしよう？

（ふいー。）

気焰に満ちた車座の一角で内心の一息を吐きながら、ザフィーラは気を抜いていた。

外面では場の空気を読んで不適な笑みを浮かべながらも、実際にはご覧の有り様である。

ここまでの流れ、即ち、『戦闘は基本的にNGの方向で大作戦』。

シグナムとの模擬戦という形で何度か戦いを経験している彼ではあるが、いかんせん、中身の臆病さは拭えていない。

模擬戦だと分かっているシグナムとの鍛練ですらも、腰が引ける。いくらザフィーラの戦闘記憶や新しいデバイスがあろうとも、戦うことはなるべく遠慮したい。

しかし、ザフィーラはたしかに臆病者ではあれど、かといって決して何も考えがないわけではない。

先程皆に語った『万が一』に備えるというのはもちろんのこと、ザフィーラが念頭に置いたのは、『アニメ本来の流れ』だった。

ザフィーラの記憶では、原作ではやてが倒れたのは十月半ば。主人公達との出会いは十二月初め。つまり原作の騎士達はクリスマスまでの三ヶ月ちよっとしか時間がなかった。

しかし現在は残暑も厳しい九月初め。ゆうに一月強の時間差がある。この猶予は、かなり大きいだろう。

原作ではなりふり構っていらなかっただろうヴォルケンスだが、今の彼らなら少しは余裕を持った計画的略奪作戦が可能なのだ。

それを利用しない手はない。

（まあ・・・闇の書の一件については、残念ながら原作のまとめ方が一番だよなあ。都合のいい解決策なんで、俺のアタマじゃ思い付かん・・・）

ザフィーラ一番の懸念は、やはり『原作』という縛りだ。

下手に知っているからこそ、それを頼みとする以外の方法は、なかなか見つからない。

現時間軸は、アニメ二期の寸前。一期が原作通りに終わっているな

らば、展開は変わらないだろう・・・と希望的に見ていた。

そうになると、ザフィーラ達が魔導師を襲い管理局に存在を察知されるのは、来月以降でないと、予定が狂いかねない。

へたすりや地球がデストロイな案件だけに、ザフィーラはそうなることに恐怖を抱く。

考えれば考えるほど、アニメの世界は奇跡的なタイミングの重なりあいで構成されているのだと、痛感した。

（まあ、来月からまた方針にテコ入れを具申するとして・・・とりあえず今月は、リアルモンスターハンターで頑張ろう）

良くも悪くも、来月からが本番に違いない。内心の憂鬱を女性陣に気付かれぬよう、表情にはおくびにも出さず。

ふと、いつかみた巨大ダンゴムシに手甲1つで挑みかかる自分を幻視して、ザフィーラはげんなりした。

明くる朝、八神家の食卓にて。

八神はやては寝起き一番に待っていた家族らの心配責めに、ほんわ

りとした笑みで応えていた。

「まあ、皆心配しすぎやて。昨日のは、ちょっと疲れとっただけやから。我ながら、倒れたのは大げさやったなあ」

昨晚、風呂から上がり自室へ戻ろうとした直後、いつになく強い体の痛みに襲われたはやては卒倒し、家内を騒がせてしまった。

すぐさま病院にかつぎ込まれたものの、精密検査には異常もなく、大事をとって入院しろと勧める周りを押し切って、夜遅くに帰宅したのだ。

実際、これまでも発作的に痛みに襲われることは幾度かあったのだが、あくまでもそれは疼痛刺激的な弱いものだった。

今回のような事態は彼女としても初めてだったのだが、病院に着いたときにはもう痛みもなく、結局ははやての遠慮が勝った。

それ故の今朝からの心配責めに、はやては不謹慎ながら心に暖かいものを感じていた。

今までは、広い家でひとり痛みに耐えながら、彼女の心は寒さに震えていた。

今更ながらに、誰かに慮られるということの面映ゆさ、暖かさにはやての頬は緩む。

今浮かべているニマニマとした笑みも、心底のものだった。

それだけに、彼女は申し訳なさも抱いていた。とくにヴィータの心配しような尋常ではなく、今日は一日中側にいるぞとばかりにはやてに刷りよってくるのだ。

はやてにはそれがどうにもいたたまれなく　やはり、それ以上に

嬉しいと思ってしまうのであった。

そうこうしながら朝食を済ませると、また一日が始まって行く。

膳を下げたシャマルは流し台に立ち、リビングではシグナムが仕事の支度を始めている。

廊下からは新聞を取りに歩くザフィーラの足音が響き、傍らを見やればヴィータがこてんと首をかしげはやてを見返してくれた。

「どしたの、はやて？」

「ヴィータ」

「うん」

「ヴィータはええ子やね」

「え？えへへ、ありがと」

きれいな赤髪を小さな手でわしわしと撫でてやると、かけがえのない妹分は顔をほころばせた。

（うん、やっぱ、いいもんや）

日常の暖かさを知ってしまったたはやては、このぬくもりをもう二度と捨てることはできなさそうだと再確認するのであった。

U
U
<
U
!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0734k/>

カチ込め！ザフィーラさん

2012年1月12日19時48分発行